第二十九課　第二復習日（七月十六日）

サウルの死をダビデ悲しむ

―（サムエル後書一〇一―四、十一―十二、十七―廿七〔青年科は全章を讀む〕）―

【諺誦聖句】何事よりも先づ互に熱く相愛せよ。愛は多くの罪を掩へばなり（ペテロ前書四〇八）

注意―第十六課の初めにある注意書は今日の復習日にも當嵌まる。

▲質　問（各質問の終の括弧内の數字は其の答を見出すべき學課の番號である）

一、イスラエル人が其の新らしい王を何う云ふ風に迎へましたか（十七）

二、サウルは王として發表されて後、どう云ふ場合に（イ）智慧と、（ロ）憐憫と、（ハ）勇氣と、（二）人を救す精神と、を表しましたか（十七）

三、サムエルは其の最後の公げの集會の初めに人民に何を尋ねましたか（十八）

四、人民は何と答へましたか（十八）

五、サウルの惡に陷る第一歩は何でしたか。サムエルは後で彼に何と云ひましたか（十九）

六、サウルはペリシテ人を攻めて居る間に、何う云ふ早まつた命令を出しましたか。その結果は何うでしたか（二十）

七、サウルは二度目に叛いたのは何う云ふ事でしたか（二十一）

八、サムエルの來た時に彼は何うしましたか。彼の惡い行爲の結果は何う云ふ事になるとサムエルは云ひましたか（二十一）

九、エサイに幾人の息子がありましたか。其の中の誰が神樣に選ばれましたか。何うする爲に撰ばれたのですか（二十二）

十、サムエルに膏注がれた後、ダビデは何の爲にサウルの宮中に行きましたか（二十二）

十一、ゴリアテとダビデとの武器は何でしたか（二十三）

十二、ダビデがゴリアテに勝つた秘傳は何でしたか（二十三）

十三、何う云ふ事からサウルはダビデに對して嫉妬を起しましたか。それが何う云ふ事に表れましたか（二十四）

十四、讒言したサウルの家來ドエグの事を知つて居る丈け話して下さい（二十五）
十五、アビガルは何う云ふ風にして、ダビデが自分の仇を返さうとするのを引止めましたか（二十六）
十六、ダビデがサウルの生命を助けて上げた時の事を話して下さい（二十七）
十七、サウルは其の生涯の終に神樣の御惠を失つた時誰に助を求めて行きましたか（二十八）
十八、サウルは何處で死にましたか。何うして死にましたか（二十八）

▲青年科（十三歳以上）

一。ダビデはサウルを吊ふ（一—十二）

これは偽善でない、何となればダビデは其の王に對して絶えず全き忠義の態度を保つて居つた故である。彼に謀叛を企つる事、彼を誘ふ事、自分の思ふ通りになる時にも彼を害す事を拒んだのであつた。此所には目上の人々が假令私共に正當な取扱をせぬ時にも、彼等に對する私共の義務の何たるかを教へてある。

二。ダビデはサウルの仇を打つ（十三—十六）

サウルには、彼の仇を打つことの出來るやうな息子はなかつた。それでサウルが（その青年の語るところによれば）戰爭の爲に死んだのでなく、其の青年が平氣で殺したのである故ダビデはオスラエルの律法を履行した。

三。ダビデの悲歌（十七—廿七）

これは有らゆる文學の中でも最も美しき悲歌の一つである。ダビデはサウルの善き德ん述べては居るが、嚴重に眞實を守り、自分と王との關係に就いて、善惡何れをも云つて居

ないことに注意せよ、併しヨナタンの事に及んでは彼の心が語つて居る。ダビデは此處に一つの最も大切な教訓を私共に教へて居る—他人の缺點を認める嘗察、嚴正なる眞實、自分の受けた害に就いては沈默。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—前週はサウルがギルボア山で悲慘な死を遂げたことを習つた。今日はそれに對してダビデが何うしたかを見るのである。サムエル後書一〇十七—廿七を朗讀。

一。ダビデはサウルの殺されしを憤る（一—四、十一、十二）

（イ）悲報來る。ダビデは、イスラエルの今一つの敵なるアマレク人と戰つて居つた。チクラグ—彼の當時の住所—に歸つて一二日經つた時、一人の使者が頭に灰を被つて（喪の記號）、彼の許に走つて來た。ダビデは彼がサウルの陣から逃げて來たと聞いたから、戰爭の模樣を聞き度いと思つた。使者はイスラエル人が負け、多勢殺され、サウル王と息子のヨナタンも其の中にはいつて居ると告げた。

（ロ）證據物を渡す。尙ほ深く尋ねられたので、其の青年はサウルの死んだ有樣を述べ、彼

が重い手傷を負うて居つた故、自分は彼を殺したのだと云つた(多分これで大變な御褒美が戴けると思つたであらう)。サウルの死んだ證據物として、サウルの用ひて居つた王の冠と腕輪とを持つて來た。

(ハ)サウルの仇を打つ。これを聞いたダビデは此の青年に御褒美を下さるどころか、「汝は何故に手を伸ばして、エホバの膏注ぎ給うた者を殺すことを畏れなかつたか」と叫んだ。彼を死刑にする事を命じた。それからダビデも共に居る者も衣を裂き、悲しみ、泣き、斷食した。

二。ダビデの悲歌(十七—廿七)

(イ)サウルの德を憶ゆ。ダビデは神樣への讃美や祈禱の歌を澤山書いたが、今は其の死んだ王の爲に立派な悲しみの歌を作る爲に其の力量を用ひた。「イスラエルの榮輝は殺さる。」又「勇士は仆れたるかな」と云つて居る。サウルはペリシテ人と戰つて死んだのである。それ故ダビデは其の歌に「此の事をガテ(彼等の首府)に告ぐるなかれ、恐くはペリシテ人の女等喜ばん」と云つた。次に彼はヨナタンの弓とサウルの鋭き劍とを賞讃して居る、そして「二人

は鷲よりも捷く、獅子よりも強かりき」と云つて居る。

(ロ)サウルの敵たりしを忘る。サウルの不親切であつた事は此處に一言も云つてない、却つてダビデはサウルが惜まず其の分捕物を人民に與へたことを思起し、彼より惠を受けたる者等に、其の死にたる王の爲に泣けと告げて居る。

(ハ)ダビデの友を吊ふ(廿五—廿七)。ダビデは次に其の愛せし友ヨナタンの事、其の勇氣、其の潔き戰死の事を歌つて居る。終には、彼に取りて其の愛が「婦の愛にも勝りたり」し「兄弟」の失せたるを「我悲慟む」と云つて居る。

主なる教訓—**居ぬ人の欠點を思はずに、其の善き點を語り、其の餘の事に就いては默せよ。**

勸告—サウルの生きて居る間はダビデは彼を誘つたり、謀反したりすることを拒んだ。彼の死んだ今もダビデは自分の忠義を示し、王の善き點をのみ語り、虐待されたことは語らない。若し自分の害されたことを述べたならば、彼は聞く者の尊敬を失つたであらう。居ぬ人に對してはダビデの如くなせ。之を誘ることを拒絶せよ。

第三編　聖靈なる神

註―世界の創造よりキリストの降誕までは、世界はただ父なる神エホバのみを知つて居つた。地上に於ける三十三年の御生涯の間、イエスは「世の光」となり給うた、そして御昇天より御歸還まで聖靈は特別に此の世界に與へられて居給ふ。大正八年の第一卷では萬物の父なる神―世界の創造者―の事を考へ、大正八、九、十、十一年に引續き神の子なるキリスト―世の光―の事を考へた。本編に於ては聖靈が此の世界に與へられた事と、人々の心の中になし給うた其の御働の結果の幾分とを見るのである。三位一体の中でも聖靈は實感することの最も困難なお方である、併し私共は皆、聖靈の御臨在と其の祝福に充てる御感化とが私共の間にあることによりて受けて居る惠の事を、幾分でも悟るやうに精々努力すべきものである。

第三十課　聖靈の約束　（七月二十三日）

―（ヨハネ傳十六〇五―十四。廿〇十九―廿二）―

【諳誦聖句】われ父に請はん、父は他に助主をあたへて、永遠に汝らと偕に居らしめ給ふべし（ヨハネ傳十四〇十六）。

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲廿〇十九。此の集まつた場所は過越の晩餐の爲に貸されたと同じ二階座敷で、ペンテコステまで弟子等が此處に集まつたのだと或る人々は考へて居る。

△廿二。ペンテコステの日まで聖靈は充分なる分量に於て與へられて居なかつた。此は來らんとする者の「手附」又は保證であつた。

△廿四。「トマス」はヘブル語、「デドモ」はギリシヤ語、その意味は「雙子（ふたご）」である。多分彼は雙子であつたのだらう、時々彼と名を並べられて居るマタイは彼と雙子であつたと或る人々は思つて居る。

△廿六。十九節に戸を閉ぢた理由が述べてある。若しイエス様が生きて居るのを見たとの噂さが弘まると、ユダヤ人の長等が使徒等に對して反抗的態度を取るかも知れなかつた。

聖書の教訓

一。二階座敷に於ける主の言葉（十六〇五―十四）

（イ）主の行き給ふは惠を齎す爲。これは不可能と思はれたに相違ない。併し救主が退き給ふ迄は、各個人が他の人に生命を與へる中心となる程十分に聖靈が彼等の中に宿り給ふことが出來ないのであつた。ことを私共は理解して居る。

（ロ）聖靈が未信者の爲になし給ふ事。此の罪の自覺を起さしめる力は神より來るもので、人間の仕事でない。悔改の涙、熱心なる求道者を惠の座に見る時には、私共は其の榮光を集會の指導者にでなく、聖靈の感化に歸し奉るのである。

（ハ）聖靈の指導と助。罪の自覺を起さしめ、靈魂を悔改に導いた後に、聖靈はその儘に棄て置き給ふのでない。その靈を導き、神様の御旨を示し、絶えず偕に在して助け且つ慰め給ふ。併し其の靈魂が不從順の爲に聖靈が憂ひしめ、其の聖き感化を打消して仕舞ふことも出來る（エペソ書四〇卅、テサロニケ前書五〇十九）。

二。二階座敷に於ける三日の後（廿〇十九―廿三）

（イ）門を鎖す。外部の門や横木は救主には何の障碍でもない。併し強情と叛逆とは主と雖も通り拔けることの出來給はぬ邪魔物である（默示錄三〇廿）。

（ロ）傷の跡。これは如何なる言葉よりも優つて力ある證言であつた。貴君の愛と奉仕との證據として此の世に居る間に「傷の跡」を得る機會を主が貴君に與へ給ふかも知れない。

（ハ）聖靈の力。神によりて遣され（廿一節）、聖靈を受けたる（廿二）人々は次の二つの何れかの方法によりて罪人を助けることが出來る、（1）彼等の罪の赦されたる時には、彼等を導いて神様が赦を與へ給ふことを信ぜしめる事、或は（2）彼等が神様の求め給ふ條件を果たす迄は、彼等の罪は赦されることが出來ぬと云ふ事を示す事。これ―人間に與へられたる最上の働―は靈的に準備された人によりてのみ成され得るものである。

三。二階座敷に於ける一週間の後（廿四―廿一）

（イ）トマスは不在。トマスは或は余り不愉快であつたから皆と偕に居なかつたのかも知れない、併し欠席し故意に救主に逃ひ損なつた。此會に欠席する誘惑を受けた時には之を記憶せよ。イエス様は其處に於て貴君に特別なお言葉を授けようとして居給ふかも知れない。

(ロ)トマスも居あはす。トマスは疑ふことを欲しなかつたのそれ故救主が歸つてお出でになることを望みつゝ止まつて或る所謂懼疑者や無信論者とは異つて居る、彼等はキリストに對する反對論を誇り、他の側を考へたり其の意見を聞いたりすることを好まぬ。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―今度は救主がゲツセマネにお出でになる前に使徒等となさつた最後の會話に後戻りするのである。主は何をお約束になつたかを見ませう。高壇からヨハネ傳十六〇五―十四を朗讀。

一。二階座敷でお別れの言葉（十六〇五―十四）

（イ）聖靈を約束す。救主の死ぬ時が近くなり、使徒等は悲しんで居る。イエス樣は彼等に其の用意をさせようと思召した。それ故御自分はこれから行つてお仕舞ひになるけれども、その代りに慰むる聖靈を送り給ふと彼等にお話しになつた。

註―イエス樣は人間の身体を持つておいでになつた故、一時に一所に居給ふだけであつたけれども、聖靈は始終何處に於ても働き給ふことが出來る

（ハ）救主の訓誡。イエス樣は、一人の不滿足を感じて居る者の爲に二階座敷に歸ることを甲斐あることと思召した。そして私共は皆これによつて訓誡を受けた。一人の靈魂を確實にキリストに導くことが出來るならば、如何なる骨折も忍耐も多過ぎると思ふな。

（ロ）聖靈が世の人になし給ふ事。イエス樣は其の次に聖靈が何をなし給ふかを使徒等にお告げになつた。人々に其の罪を悟らせ、之を悲しく思はせる事。善を行ふ事の如何に美しきかを世の人に知らしめ、彼等が最早惡魔の力に抑へ附けられなくなると云ふ事。私共の心の中に聖靈の感化がないならば、誰も罪を悔改める事も、イエス樣を愛することを始めもしないのである。

（ハ）聖靈が信者を助け給ふ事。救主は尙ほ使徒等に仰しやる事が澤山おありになつたが、彼等はまだ其の意味を悟れなかつた。併し眞理の聖靈は、彼等が神樣を愛して仕へ奉る事の出來るやうに、彼等の考を助け導いて下さるのであつた。これこそ聖靈なる神樣が日毎に私共に下さらうとて待つてお在になる驚くべき御助である。

二。二階座敷で復活の日に（廿〇十九―廿三）

（イ）堅く戸を閉づ。三日の後に十一人のお弟子が二階座敷に集り、ユダヤ人を恐れて堅く戸を締めて置いた。彼等は救主のお死にになつた事を悲しげに語りあつて居ると、不意に主

は御自身で彼等の眞中に立つて「平安なんぢらに在れ」と仰しやつた。

（ロ）復活の主が顯る。それから手にある釘の跡と、羅馬の兵隊が主の脇腹に槍を刺した傷とをお見せになつた。お弟子等は、愛する主が今一度自分等の眞中にお出でになつたことを、大いに喜んだ。

（ハ）聖靈の降る保證。再び祝禱をして下さつた上に、「父の我を遣し給へるごとく、我も亦汝らを遣す」との新しい任命をお授けになつた。それから息を吹いて「聖靈を受けよ」と仰しやつた。此は後に彼等が受ける筈の聖靈に滿たされる事を前以て示す爲の記號であつた。

三。二階座敷で八日の後に（廿四—廿一）

（イ）欠席した弟子の疑。多分トマスは初め皆と一緒に居たのを、出て行つたのであつたらう。歸つてから、皆から救主を見たと云ふことを聞かされると、自分で見て、釘の跡に觸り、槍傷に手を入れた上でなくば信じないと彼は答へた。

（ロ）欠席者の疑は除かる。一週間の後に弟子等は再び集まり、トマスも一緒に居た。戸は

注意して締めてある。今一度イエス樣はお出でになつて「平安なんぢらに在れ」と仰しやつた。それからトマスの方をお向きになつて「汝の指を此處に伸べて我が手に觸れ、又なんぢの手を我が脇にさし入れよ。さう直きに疑はないで信せよ」と云ひ給うた。トマスはたゞ恐れつ驚きつ「わが主よ、わが神よ」と答へることしか出來なかつた。

（ハ）救主は祝禱を賜ふ。「汝は我を見しによりて信じたり。見ずして信ずる者は幸福なり」とイエス樣はトマスに宣うた。此の幸福は私共にも時と所とを問はず、凡て主を信ずる者に與へられるのである。

主なる教訓—眞實に光を求むる人の靈魂を聖靈は必ず助け給ふ。

勸告—聖靈を遣し給うたことを神樣に感謝し、その柔和な而も力ある感化に身をお任せなさい。聖靈がなければ私共の心は、燈火なき室のやうに、眞暗である。聖靈を心に迎へれば自分の心の有樣、神樣の事で前に分らなかつた事、が分るやうになる。

（例）聖靈の御働は電氣に似て居る。工夫が暗い家の中で電線を敷いて居る。工事が終ると「私は行きます」直きに家中が明

ろくなります」と云ふ。遠くにある電氣の源へ行つて、電流を送る。音も聞えず、何も感じない、併し不意に「スウイッチの明けて
ある室は」悉く明るくなる。それでもスウイッチを明ける事を拒むならば、尚ほ眞黒暗に居ることも出來るのである。

第三十一課　聖靈の豫期（七月三十日）

—（マタイ傳廿八〇十六—廿）

【讃詠聖句】我より聞きし父の約束を待て。ヨハネは水にてバプテスマを施されん（使徒行傳一〇四、五）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲マタイ傳廿八〇十七。弟子等が、イエス樣を顯れ給ひし神として「拜」したのは此の時が最初である。

△廿。これは弟子等には新しい考であつた。今までは唯だ見ゐて居る時のみイエス樣が近くに居給ふ者と考へて居つた。

▲使徒行傳一〇一。「前書」とは醫者なるルカの書いた福音書である（ルカ傳一〇三）。「テヨピロ」とは「神の友」と云ふ意味である。彼は異邦人の基督信者であつたものと見ゐる。

△三。「確據なる證」—四十日の間イエス樣は使徒等に御自分を顯し給うたことは、救主が事實墓より甦り給うた事に對する疑を不可能ならしめた。

△六。弟子等は此の時にも尚ほイエス樣が地上に於てイスラエルの王にせられる爲にお出でになつたものと考へて居つた如く見ゐる。たゞ聖靈の導きを受けてのみ、彼等はキリストの宏大なる靈的目的を悟つたのである。

△十二。「安息日に行きうる程」とは一哩に少し足らぬ程。ユダヤ人の教師等は安息日にそれ以上の距離を旅行するこ

とは罪であると定めて居つた。

聖書の教訓

一。キリストと階にガリラヤにて（マタイ傳廿八〇十六—廿）

（イ）疑へる者もあり。聖靈の感化の必要を示す著るしき一例である。主御自身の御取計らひによりて主に遇つて居るとの智識も「目に視た事さへも、主が本當に死より甦り給うた事を悉くのお弟子等に確信せしめた譯ではなかつた。私共に與へられて居る信ずる力に對して神樣に感謝しませう。

（ロ）我等の全能の救主。故に私共は決して、救主の權力範圍外に出ることが出來ない。地も空も天國も地獄も有らゆる創造物も—主は此等凡ては勝利を得給うた、そして永遠に主權を以て之を治め給ふ（エペッ書一〇十九—廿二）。

（ハ）我等の世界的任命。私共及び今日イエス樣を愛する凡ての者への任命はこれである。先づ人を救へ、次には彼等を助けて其督に屬する事を公然告白せしめよ、そして最後には、聖き生活をなし、神樣と周圍の凡ての人とに奉仕する道を彼等に敎へよ。

二。キリストと階にエルサレムにて（使徒行傳一〇一—八）

（イ）明白なる命令。神樣は屢々其の民に約束の成就を「待て」と命じ給ふ。さう云ふ待つて居る時間は、若し適當に費せば、私共の靈魂の益となる—（1）願望を增す、（2）忍耐の德を發達せしめる、（3）信仰を奬勵し、（4）其の惠を受けることを得させる。

（ロ）弟子等の質問。神樣のみ知り給ふ事を發見しようとするのは時間の空費である。矣の事に必要な凡ての事を神樣は既に示してお出でになる—（1）罪より救はれる事、（2）御旨を行ひ、救を地上に廣める事、（3）終に天國に達する事。

（ハ）約束の賜物。弟子等は、天に屬する世界的王國を創立するのであつた。併しエルサレムより始め、それを中心として外部に働を弘めるのであつた。これは凡てキリストを證言せんとする者の働きの本當の順序である。若し家庭生活が正しくなければ、外部に對する凡ての働も余り價値はない。

註—此の四つの約束は水面に出來る波紋の如く、次第に廣くなる。（その成就せられた事は追々に習ひます。）サマリヤはユダヤ人と異邦人との間にある鏈の輪のやうである。其の人民は異邦人であり乍らユダヤの眞中に住んで居り、隨分ユダヤ人の宗敎と習慣とが彼等の間に行はれて居つた。

三。キリストと階にオリブ山にて（九—十四、（ルカ傳廿四〇五十、五十一）も見よ）

（イ）別れの祝禱。イエス樣は彼等を「ベタニヤに至るまで導き給うた、それから後の生涯は彼等は自分でやらればな

ちなかつた。救主の實際の御臨在が退き給つたけれども、尙ほ主の道を歩み續けることが彼等の義務であつた。その如く神様は特別の必要に對しては特別の助を與へ給ふけれども、獨り立ちで歩けるやうになつた時にはそれを除き給ふ。

(ロ)榮光ある昇天。私共も亦昇天的經驗をなすことが出來る(コロサイ書三〇一)。上にあるものを求め、心と考とに於て上に昇り、勗くて日常の心を乱すやうな思煩ひや失望の上に超越するのである。

(ハ)約束の歸還。天使はその事を告げた、そして主の民は祈禱によりて充實した時を過ごした、また聖靈の來た後には主の御命令を實行することによりて充實した時を過ごした。私共も主が此の世より召し給ふ時—或は今一度地上に歸り給ふ時—まで此の世の生涯を斯くの如くにして過ごすべきである。

▲少年科(六年生以下三年生迄)

緒言—今日は救主がお弟子等に最後に顯はれ給うた中の三度の事を見るのである。その度毎に特別な大切なお言葉をお與へになつた。高壇からマタイ傳廿八〇十六—廿を朗讀。

一。ガリラヤにて(マタイ傳廿八〇十六—廿)

(イ)主と偕に山の上にて。救主が墓から甦り給うてより大分日が經つた。その間に主は度々お弟子等に顯れ給うた。十一人の弟子はガリラヤに歸り、主が彼等にお遇ひになると約束なさつた或る山に登つた。多分他の人々も一緒に居つたのであらう。主が愈々顯れ給うた時に、集つた中の多數の者は主を拜したけれども、その時にすら尙ほ實際に目に見て居るこ

とを信じ得ない人々も幾人かあつた。

(ロ)主の限りなき力。それからイエス様は彼等に近寄つて仰しやつた「我は天にても地にても一切の權を與へられて居るのである」と。主は死にて甦り給うた事によりて「王の王」—死をさへ治め給ふ王—となつて居給うた。

(ハ)世界的の任命。それ故彼等は國内にのみ引込んで居らずに出て行つて「もろ〳〵の國人」に父と子と聖靈との名によりて敎へ、バプテスマを施し、即ち改心者を造るのであつた。彼等はイエス様から命ぜられた凡ての事を彼等に敎へるのであつた。主が絶えず世の終まで彼等と偕にお在下さるのであつた。

二。エルサレムにて(使徒行傳一〇一—八)

(イ)明らかな命令。彼等はガリラヤで斯の如き驚くべき任命と約束とを受けて居たけれども、まだ働を始めるのではなかつた。今一度(此の時はエルサレムで、皆が主の周りに集まつた時に彼等に「エルサレムを離れないで神様の大いなる約束の成就するのを待て」とお告げに

なつた。バプテスマのヨハネは水を以てバプテスマを施したが、更に〳〵驚くべきバプテスマが天より彼等の上に降るのであつた。

(ロ)弟子等の質問。その時弟子等は、主が今國をイスラエルに返して、羅馬政府の束縛から彼等を解いて自由になし給ふのであるかと尋ねた。併し主は仰しやつた「神様が御手の中に置いてお在になる事を知らうと努めてはならぬと」。

(ハ)約束の賜物。次に救主は彼等に告げ給うた。聖靈が彼等の上に降つた後に、彼等は先づエルサレムに、次には手近い所に、そして終には世界の中の一番遠い所にまでも、救主の證人となるのであると。

三。オリブ山にて(九—十四、(ルカ傳廿四〇五十、五十一をも見よ))

(イ)お別れの祝禱。救主はお弟子等に大いなる任命をお授けになつた後に、彼等をオリブ山まで連れてお出でになり(十二節)、そこで、ルカの云ふには、主は「手を擧げて之を祝し給うた。」

(ロ)天空に昇る。救主はお弟子等の爲に祝禱をなし、彼等は主を見て居る間に、主は彼等を離れて天に上げられ給ひ、遂にお姿が雲に隱れて仕舞つた。主が本當に去つてお仕舞ひになつたとは何うも信ずることが出來ないやうな氣持で、彼等は尙ほ立つて上を眺めて居つた。

(ハ)歸るとの約束。突然二人の白い衣を來た人が顯れ、彼等の側に立つて「ガリラヤの人々よ。何ゆへ天を仰ぎて立つか。汝らを離れて天に擧げられ給ひし此のイエス樣は、汝らが天に昇りゆくを見たる其の如く復きたり給はん」と云つた。そこでお弟子等はオリブ山を去つて、エルサレムに歸つた。そして彼の二階座敷でイエス樣の御母マリヤ、それから十字架の側に來て見て居つた聖き婦人等と共に、十一人の使徒は約束の惠を祈り且つ待つた。

主なる教訓—待つ時間を空費せず、準備の時間として用ひよ。

勸告—聖靈の來るまで待てと救主はお弟子等に告け給うた。怠惰や無頓着の中に時間を空費せよとの意味でなく、熱心に祈り、彼等の大いなる將來の爲に心をも生活をも準備する爲に其の時を費すのであつた。或る少年青年は將來神樣が自分に大いなる事を爲せて下さるや

うにと望んで居る。併し今の時間を無駄に過ごし、惡い習慣、惡い友達、怠惰、輕薄の風を造つて居るならば、決してそれに適した者となることが出來ない。さうでなく、お弟子の如くに、宜しく其の準備をなすべきである。

（例）土の燒物を造る時に、形が出來たならば、乾かしたり燒いたりする間「待たれば」中に水を入れて使ふことが出來ぬ。ところで此の待つて居る時間が土を固めるには最も大切である。若し其の間に足で踏まれたり、傷けられたりしたならば、その將來は全く役に立たなくなつて仕舞ふ。

第三十二課　聖靈の降臨（八月六日）

—（使徒行傳二〇一—十八（九—十一）を省く）、廿二—四十一）—

【諳誦聖句】聖靈なんぢらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而して我が証人とならん（使徒行傳一〇八）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

△一。ペンテコステ（五旬節）の祭儀は過越祭より五十日後。四十日救主は地上に止まり給ひ、今は昇天後十日だつた。

△三。凡ての國民を一つになしたる方言の賜物と、バベルの言語の混亂とを對比せよ（創世記十一〇七、八）。

△十五。ユダヤ人は安息日や祭日には晩まで酒を飲まぬ。

△廿六。ユダヤ人には「キリスト」と云ふ語は「膏注がれた者」或は「メシヤ」と云ふ意味であつた。ペテロの言葉は「汝等はナザレのイエスを十字架に釘けたが、彼は神より遣され

たキリスト即ちメシヤである」と云つたのと同樣である。

△四十一。僅か四十日前にはキリストは犯罪人として十字架に釘けられたのであつた。今三千人は悔改め、考を精神と生活の仕方とを變へて、主の名によりて信者に加はつた。バプテスマのヨハネと救主との預言が驚くべく成就したものである（マタイ傳三〇十一。ヨハネ傳十二〇廿四）

聖書の教訓

一。火のバプテスマ（一—十一）

（イ）突然の賜物。聖靈のバプテスマは救靈事業に必要な大いなる身仕度である。此の力は無學の漁師等をば「天下を顚覆した」（使徒行傳十七〇六）と云はれる程の人物にした。これは一面から云へば「餓か」に來たのであるが、も一面から云へばキリストが幾年も掛かつて此の日の爲に使徒等を準備して居給うたのである。

（ロ）風と火。風は聖靈の型（ヨハネ傳三〇八）—人力の支配し能はぬところである。火は自ら腐敗せざる者で、不純物を滅す。

（ハ）各人に適する言葉。今も聖靈が力を以て臨み給ふ時に有らゆる階級と種類とより成る聽衆が此の事を感する。

二。ペテロの力ある言葉（十二—十八、廿二—廿六）

（イ）二種類の聽手。求道者も嘲笑者も出席して居つた。耳を以て聞く丈けでは足りない、心の理解が必要である。その如く神樣がキリストに語り給うた時に人々は雷が鳴つたと思つた（ヨハネ傳十二〇廿九）。今使徒等が語つた時に、或人は彼等を酒に醉つてると思つた。

（ロ）偽りの嫌疑を論駁す。惡つたり、ちれたりせずにペテロは自分も他の者も今時醉つて居る筈のない理由を靜かに說明した。丁度其の如くに主も鬼につかれて居ると云はれた時にそれを論駁なさつた（マタイ傳十二〇廿五—廿八）。

（ハ）預言の實現。ヨエルの言葉は誰しも讀んで居つた、併し誰も其の實現を認めなかつた。私共も主の光に照らされ、聖靈に教へられた頭を持たればならぬ、さうでないと神樣の爲し給ふ多くの驚くべき事や自分の新鮮の經驗を悟り損ふことがあるであらう。

三。驚くべき結果（廿七—四十一）

（イ）罪の自覺。聖靈が人の心に臨し給ふ第一の事は罪を悟らしめる事である。此の天來の力なくしては罪人は決して救を見出すものではない。此の結果はキリストが其の凡ての驚くべき御事跡の中にも見なかつたところである（ヨハネ傳十四〇十二）。

（ロ）救の道。聖靈の賜物は特別な少數の人に限られて居

るのでなく、眞に悔改むる凡ての者に與へられる。私共は銘々此の天來の指導者を請求する事が出來る。

（八）榮光ある聖靈降臨祭。此のペンテコステの日は、基督教會の誕生日である。これは聖靈時代の先驅となつた。聖靈は神の民の心を支配し、彼等に力を與へて世界を基督に獻げしむる爲に來り給うたのである。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―前週は救主がお弟子等に聖靈を遣し給ふことを約束し、彼等は從順にそれを待つたことを習つた。今日は主の御約束の成就したことを見るのである。高壇から使徒行傳二〇一―八を朗讀。

一。火のバプテスマ（一―十三、九―十一は省く）

（イ）火が降る。お弟子等は救主の御命令通り、ペンテコステの日までエルサレムに逗留した。一同が二階座敷に集まつて居る時、不意に烈しい風の吹くやうな響がして來て、彼等の坐つて居る家に滿ち、一人々々の上に焰のやうに赤く見える物が降つた。

（ロ）弟子等は滿たされ、聖靈の導くが儘に今まで云つた事のない不思議な言葉を語り始めた。主が待てと仰しやつた火のバプテスマは今や事實となつ

た。

（ハ）人々は怪しむ。世界の方々の遠い所から多勢のユダヤ人が來てエルサレムに止まつて居つた。彼等は群をなして集まつて來たが、何事が始まつたのか一向に解らなかつた。「此の話をして居る人々は皆ガリラヤ人ではないか」と彼等は尋ねた、「彼等の語る言葉を聞くと、我々銘々の國の言葉だが、何う云ふ譯であらう。一体何事だらう」と互に云つて居る。他の人人は又嘲つて「かれらは甘い葡萄酒に滿たされて居るのだ」と云つた―酔つて居るとの意。

二。ペテロの力ある説教（十四―十八、廿二―廿六）

（イ）僞の批評を否定す。するとペテロは、他の使徒等に取卷かれつゝ立ち上つて、大きい、はつきりした聲で「ユダの人々および凡てエルサレムに住める人々よ。我が言葉に耳を傾けよ。此の諸君の驚いて居る事は、諸君の思つて居る如く酒を飲んだからではないのである。今は朝の九時であるから」と語つた。

（ロ）ヨエルの預言の實現。次にペテロは彼等の知つて居る預言者ヨエルがずつと昔書いた

言葉を引いて彼等に話した。其の預言には、神様は聖靈を凡ての人々に注いで、預言を語り、幻を見る、力を授け給ふと仰しやつてお在になる。そして此の聖靈の賜物は男にも女にも、老いたるにも若きにも、與へられるとある。

(ハ)聖靈は救主の約束。ペテロは其の驚くべき説教を續け、自分も他の使徒等もイエス様の御生涯と御働との證人であると云つた。神の右にある天の御座より主は御約束の如くに聖靈を遣し給うたのであつた。ペテロは終に宣べて曰く「イスラエル中の人は疑はずして此の事を知り度いものである。即ち汝らが十字架に釘けた此のイエス様を神様は立てゝ主となしキリストとなし給うたのである」と。

三。驚くべき結果(卅七—四十一)

(イ)罪を悟る者多し。聖靈はペテロの言葉を人々の心の奥深くに達せしめたので、彼等は自分の惡に氣が附き、ペテロや他の弟子等に向ひ「兄弟たちよ、我ら何をなすべきか」と叫んだ。

(ロ)一同に悔改を勸む。此の問を聞いてペテロは感謝に滿たされ「なんぢら悔改めて、おのゝイエスキリストの名によりてバプテスマを受け、罪の赦を得よ。然らば聖靈の賜物を受けん。此の約束は汝らと汝らの子らと凡て神の聲に耳を傾くる者の爲にされたのである」と答へた。それからペテロは人々に尙ほも語つて、其の時其の場で救を受けよと勸めた。

(ハ)三千人の改心。ペテロの言葉を歡迎し、其の云つた事を信じた人はバプテスマを受けた、そしてイエス様を救主として受入れた事を證據だてた。それで聖靈の降つた其の日三千人が改心した。

主なる教訓—聖靈が來ると人々は新しい願望を有ち、新しい力を受ける。

勸告—聖靈の御働はペンテコステに始まつた、先づ二階座敷で、次にはペテロの聽衆の心の中に。併しそれ以來世界の有らゆる方面にそれが續けられて來た。其の感化と助とがなかつたならば、救を受ける人も、生涯を献げる人も、イエス様に從ふ事を願ひ、主に仕へる事を喜ぶ心も起らなかつたであらう。これは皆聖靈の感化のお蔭によるのである。或る人々に

ば潔むる風又は火として來る。或る人々には柔しい露、又は鴿として來り給ふ。併し何時も私共を勵まして神樣に導き給ふのである。

第三十三課　第三決心日（八月十三日）

ペテロと跛者（使徒行傳三〇一—十六、四〇一—四、十三—廿二）

【諳誦聖句】金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に與ふ、ナザレのイエス、キリストの名によりて歩め（使徒行傳三〇六）

注意—第七課の初めにある注意書は今日の決心日にも當嵌まる。

【司會者へ】青年少年が自分の進歩に熱中して他の人の爲に盡す事を忘れるのは、あり得べき事である。併し他の人の爲に盡すことは最も確實なる進歩の方法の一つである。今日の學課が既に救はれて居る者を導いて奉仕の爲に神樣に身を獻げるに至らしむるやうに努めて下さい。

注意—此の學課は動作を以て教へて下さい。「人の小さい子供を高壇に登る踏段に腰を掛けさせる、次に「見て來度いと思ふ者の爲に此の上には立派な御馳走が用意してある」と說明する。二人の大きい子供（ペテロ、ヨハネを代表する）が御馳走に行かうとて腕を組み合はせて上つて來る。その時に小さい子供の側を通る（さうさせる）。

此の時に彼等の心の中に居給ふ聖靈が彼等を止まらす（二人は止まる）、柔しく其の小さい子供に話をする、一緒に其の子を連れて行き度いと思ふ。彼等は「あげるお金はありませんが、あるものを上げませう」と云ふ。彼等は何を持つて居るか。ペテロが跛者を歩るかせたやうな力はないが、丈夫な身体がある、氣持よく助けて上げる親切な心がある、それ故一緒に其の子を連れて行つてあげる丈けの力はある。（二人は下を向く、小さい子は兩腕を二人の首に掛ける、二人は其の子を連れて上つて行く。）そこで三人は一緒に御馳走に行く。

假りに其の二人の子が「あゝいやだなあ、あの氣味の惡るい小さな手、着物は破れて居るし、あんな子と一緒に行くと見つともない。そこへ飲つて置け」と云つたとしたら何うでせう。彼等は樂しく御馳走が食べられたでせうか。聖靈は彼等を悲んで下さつたでせうか。否、聖靈はお悲しみになつたでせう。

善く氣を附けて聞いて居る人には聖靈は絶えず色々な親切な、利己的でない行爲をすることを教へて下さる、そして彼等は「有るものを與へる」ことが出來て、さうするのが嬉しくなると云ふ事を教へて下さい。

一。▲青年科（十三歳以上）

註—ペテロが五千人の改心者を得、ユダヤ人の議會（其の市の最高、最重要の人々）に證言をすると云ふ驚くべき機會の得られたのは跛者の爲に盡したからだと云ふ点に生徒の注意を向けて下さい。多くの人々は「此處には働の機會が無い」と云ふ、併し若し小さい機會を用ひ、自分の周圍に居る人々を助けるならば、範圍が廣くなり機會は增すのである。

△二。今日も多くの人々は此の乞食の如くに外側の境遇、快樂、富などに賴つて幸福を得ようとし、何時も「與へる」ことをしないで「得る」ことのみ考へて居る。今日此處にさう云ふ人は居らぬか。

△六—八。此の賜物はお金よりも如何に遙かに優つて居つたかを見よ。お金を與へたら乞食は矢張り乞食として居つたらう。新しき力は彼を獨立せしめ、神の家に入り、又自分の生活費を儲けることを得させた。救世軍人は、或る者は貧しいかも知れないが、神樣の御助によりて多くの人々にイエスによれる此の同じ新生命の賜物を與へて居る。

△十四。其の人の神殿に居る事がイエス樣の力を示した。その如く今日多くの人々は私共の方法や、やり方を非難するが、若し使徒等の如くに私共の戰利品（改心者）が私共の間にある神樣の力を實證するならば、之には何とも云へまい。

△十八—廿一。惡魔は今も尙ほ神の民の默することを欲し、有らゆる手段によりて彼等の口を閉ぢようと努める。併し私共もペテロと共に、見且つ聞いた時には彼の如く「語らざるを得ず」と答へる。こが出來る。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—前週は皆が一所に集まつて居る時に聖靈が驚くべき有樣でお降りになつたことを習つた。今日はその後にペテロとヨハネとの行つた事を見よう。高壇から使徒行傳三〇一—八を朗讀。

一。憐れな乞食を助く（三〇一—十一）

（イ）二人の友達。ペテロとヨハネとは色々の場合に二人一緒にイエス樣の御用に遣された事が度々あつた、今また祈禱をする爲に一緒に神殿へ行つた。二人共同じ事をやる、これが本當の友達である。歩いて居ると、生れてから一度も歩いた事のない可哀さうな片輪が助けて呉れと云つた。

勸告—前にはペテロとヨハネとは、度々周りに從いて來る人々を面倒がり厭がつて、イエス

樣に逐拂つて下さいと賴んだ—「婦を歸したまへ」（マタイ傳十五〇廿三）。併し今は彼等の心に神樣の靈が滿ちて居る。それ故止まつて乞食を眺めた、見て居ると、彼も同じ人間だのに氣の毒だと感じた。此の聖靈の宿つて居ると云ふ證據は貴君の心にもありますか。貴君は病人や、困つて居る人や、悲しんで居る人々に出遇ふ時にそれを何う云ふ考で見て居るか。

（ロ）ペテロの命令。ペテロとヨハネとは立ち止まり、ペテロは「私等を御覽なさい」と云つた。すると何時もお金ばかり貰つて居る其の乞食は、幾らかお金が貰へる事と思つて二人を見詰めた。

勸告—私共の制服は「私共を御覽なさい」貴君方をお助けし度いのです」と語る。私共が制服を着、帽子を被り、襟にSを附け、胸に救世軍の色々の徽章を附けるのは此の爲である。「私共を御覽なさい」と云つて人々に希望を有たせて置き乍ら、後で彼等を失望させるのは如何にも恐るべきことである。

（ハ）ペテロの贈物。「貴君の呉れと云ふ金銀は」とペテロは云つた「生憎ありません—

其の方は貴君と同じやうに貧乏だから―併し有つて居る物を上げませう。ナザレのイエスキリスト様の名によりてお歩きなさい。」ペテロは手を伸ばして、片輪の人の手を取つて立たしてあげた。直ぐに足の先きも踝骨も丈夫になつたので、手を放すと前の通りに腰を据ゑて仕舞はないで、立つて元氣よく歩き始めた。

勸告―或は貴君もペテロの如く「私には上げたくとも自分の金はありません」と云ふかも知れない。併し、と云つて何か自分の有つてる物を與へてならぬと云ふ道理はない。神様が下さるのは他の人に與へる爲である　貴君は心の中に神様の下さる安心と喜びとがあるか。又神様が自分の友達だと云ふ自覺を持つて居るか。親切な顏をし、言葉を掛け、笑面を見せ、六寸の時間を費して世話をして上げる力を持つて居るか。貴君の手は何か出來るか、强くて親切で人助けをする手か。若しさうであり、聖靈が貴君の心の中に住み給ふならば、貴君は片輪な人を助けないで放つて通過ぎることなく、此等凡ての物を與へるであらう。

（例）假りにペテロとヨハネとが「うるさい乞食だ、迚も助けられやしない、僕等は行つて樂しまう、忙しくつて嬉しくつて彼の事なんか構つて居る事が出來ない」と云つたとして御覽なさい。その時は何うでせう。神殿で祈つても貰はれ

す、聖靈を憂ひしめ奉つたであらう。

（二）跛者の證言。其の片輪であつた人が、今は喜びつゝ使徒等に從いて神殿に入り、歩きながら喜んで躍つたり、大聲に神様を讃美したりした。人々は直ぐにそれが彼の片輪であると知り、其の驚くべき見物を見んとて走り集まつた。乞食は、イエス様の力によつて自分に新らしい生命を下さつた二人の側に、尙はもくつ附いて居つた。

勸告―多くの人々は乞食の手にお金を入れてやることは厭はないけれども、お連れにする人はない。一緒に連れて町を歩いたり、人から自分の友達だと思はれる事を好まない。これは頼んでも出來ない事であらう。併し聖靈はペテロとヨハネとに此の力をお與へになつた。貴君は汚い着物を着た貧乏な子供を喜んで助ける心はあるか。それとも貴君の心は高慢と虛僞―自分を他の人よりも優れりとするパリサイ的精神―とに滿ちて居るか。

二。大膽に證言す（十二―十六。四〇一―四、十三―廿二）

（イ）ペテロは群集に演說す。皆は何うして斯う云ふ不思議な事が出來たのか知り度いと思

つて、其の人を見詰めながら一心に聞いて居る。ペテロはそれを説明して、彼等が暫く前に十字架に釘けた其のお方が生命の王であつたのだと話した。其の方のお力によつて此の乞食が丈夫にして戴いたのであつた。

(ロ)兵卒等に捕へらる。ペテロが語つて居る間に、神殿の番兵や祭司等が怒りながらやつて來て、三人を捕へて翌日まで閉込めて置いた。併しペテロの言葉を聞いた五千人の人が救主を信じた。

(八)ペテロは議會に演説す。習日三人は、彼の數週間前に救主を死罪に宣告した大祭司や役人の前に出なければならぬことになつた。併しペテロの心に滿ちて居給ふ聖靈は彼に力を與へて大膽に語らしめたので(十一十二)、一同は此の二人にはイエス樣が一緒にお在になることを知つた。側に立つて居る乞食もまた論駁することの出來ない證據となつた。

(二)イエス樣の爲に勇ましく立つ。ペテロが語り終ると、彼を外に待たして置いて、議會は相談を凝らした。その後で三人を呼歸し、最早イエスの名によつて語つてはならぬと命令

した。併しペテロとヨハネとは默する事を拒んだ(十九、廿)。そこで別に罰すべき理由もないやうに思はれたから、彼等は放免され。其の爲し給ひし事に對して全市の民は神樣を崇めた。

勸告—ペテロが一人の憐れな片輪の人に話をした事から、一歩々々と導かれて、群集に演説して五千人の改心者を得、議會に於て證言をなし、大膽と愛と單純とによりて、聽く凡ての者にイエス樣の事を思出させると云ふところまで至つたことを敎へて下さい。私共の小さな親切な行爲が必ず此の通りならないかも知れないが、次々と一つ宛爲す行爲が連つて、終には愛の奉仕に滿ちた一生涯を携へて、主の御前に出ることが出來るであらう。そして神樣が私共を用ひて何れ程多くの善事を爲させ給うたかは、天國へ行くまでは決して分るものでない。

主なる敎訓—心の中に聖靈が臨在し給ふならば、他の人の世話をなし助をするやうになる。

勸告—此處には後日神樣の爲に大いなる事をし度いと思ふ人が居るであらう。或は士官となり、大勢の人に説敎をし、澤山の靈魂を救はうと思ふであらう。併しこれは聖靈の力かな

くては出來ない。聖靈はペテロの場合の如く、先づ私共の心の中に働いて周圍の人々の爲に盡させ給ふ、即ち人の困つて居る事に氣が附いて、自分の受けて居る惠を傳へるのである。若しさう云ふ人を助け、引き上げて、一緒に神樣の御用をさせるやうにして居れば、心配せずとも懲て神樣は私共を用ひて、更に大いなる事を爲させ給ふ。貴君は高慢、利己の精神から救はれて居るか。神樣から此の新らしい精神を心の中に入れて戴いて居るか。貴君は考へ、祈り、計畫し、如何にせば他の人々の生活にイエス樣の惠と愛とを持込むことが出來るか、やつて見る積りがあるか。若しさうでないならば、貴君は他日神樣に用ひられて大事を爲し得ると信ずる權利を有たない。（悔改の座。）

第三十四課　聖靈を憂ひしめた虛僞（八月二十日）

【諳誦聖句】神の聖靈を憂ひしむな、汝らは贖罪の日のために聖靈にて印せられたるなり（エペソ書四〇廿）—（使徒行傳四：廿一—廿七。五〇一—十一）—

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲四〇廿二。「凡て之を共に有つ」と云ふ願望は救主とお弟子等との模範に從ふ爲に起つたものであらう。其の願望は正しかつたけれども、結果が甘く行かなかつたものと見え。ロマ書十五〇廿六にはエルサレムにある「聖徒の貧しき者」の爲に集金したことが書いてある。

△廿六。使徒行傳の方々に散在するバルナバに關係ある記事を見ると、彼が使徒等から實に適切な名を貰つたものだと云ふことが分る。彼が人々を慰め、「心を堅くして主にたゝしむるやうに彼等を助けた事を見よ（十一〇廿二—廿四）。又彼等を弱々しき卑怯者となさず、艱難を忍ぶべきことを奬勵して居る（十四〇廿三）。今日も至る所にバルナバが必要である！

▲五〇五。多分アナニヤの死は、他の人々と同樣に、ペテロにも驚きであつたらう。彼は罪人の罪を責めたが、其の審判を宣告したのではない。

△八。多分此の場合には、二人が一緒に罪を犯した故に、彼女も其の罰を受けることを聖靈がペテロに示し給うたのであらう。

聖書の教訓

註—此の學課に於て、神樣に獻ぐるに二通りあることを見る、一つは神樣の祝福を齎し、今一つは神樣の怒を招く。お金を取つて置いたのは罪でなく、取つて置くことを明白に教へよ。パルナバ：此の二人とはアベルとカインとに譬へる事が出來ようエホバ、アベルと其供物を眷顧みたまひし（バルナバにも同樣）かども、カインと其供物をば眷み給はざりき」（アナニヤとサッピラにも同樣）。神樣は決して獻物と獻げる人の品性とを引離してお考へにはならない（箴言廿一〇三）。

一。正しき動機の獻物（四〇廿二—廿七）

（イ）聖靈の力。一致の祈禱は一致の祝福を齎した。心と生活とを一つにする人々の營む祈禱會によりて世界は何れ程のお惠を受けて居るかを測り知ることが出來ぬ。

（ロ）兄弟の愛の實行。神樣の靈が人の財布に觸れるまでは其の人の生活にはまだ大した御業が行はれて居ないのである。心に祝福を受けた人々は施を好む（申命記十五〇八—十一）。

（ハ）「慰藉の子。」バルナバが人から愛され感化力のあつたのは其の贈物の大きかつた爲でなく、其の精神が立派であつたからである。神樣は私共銘々をも「慰藉の子」となし給ふことが出來る。

二。惡しき動機の獻物（五〇一—十一）

（イ）聖靈に對する僞。これは語りし僞でなく、行ひし僞であつた、併し等しく僞であつた。神樣を欺き、自分等の行はなかつた事に對して賞讃を得ることに二人が同意した。何方かが拒んで反對したならば、兩方共救はれるのであつたらう。

（ロ）アナニヤは一人にて立つ。彼等は一緒に計畫したが、今は別に答をしなければならぬ。欺くことを計畫する人は何時その欺きが暴露するかを知らない。アナニヤが「神は侮るべき者にあらず」と知つた時には最早、遲かつた。事實ありもせぬ者に自分を見せ掛けようとした爲に、彼は生命を失つた。

（ハ）サッピラは一人にて立つ。多分彼女は夫の嘘に加勢しないと、夫との間に結んだ約束に「不誠實」になると思つたであらう。金を獻げた人ではなかつたが、惡を共謀した故に彼女も等しく有罪であつた。此處には凡ての人の爲に嚴かなる警戒がある。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—前週はペテロが難澁な片輪者を助け、自分を訴へる人々の前では柔和であつたことを見た。今日は彼が尙ほも聖靈に滿たされては居たが、罪に對しては嚴しかつたことを見るのである。高壇から使徒行傳四〇卅一—卅七を朗讀。

一。氣持よく獻げた人は惠を受く（四〇卅一—卅七）

（イ）聖靈を與へらる。イエス樣のお弟子や信者等が祈禱の爲に一緒に集まり、迫害に堪へ得る爲に惠と勇氣とを祈求めると、其の塲所が地震の如くに搖動き、聖靈は再び銘々の上に

降り、皆が大膽になり、恐れなくなつた。

（ロ）兄弟の愛があらはる。エルサレムには今や愛と信仰と喜悅とによりて一致せる幾千人と云ふ改心者が滿ちて居つた。彼等の受けて居る惠が實際的に表れた—持物の多いものは困つて居る人に與へ、財產を賣つて施をするお金を拵へた人さへあつた。

（ハ）バルナバは改心を實證す。新らしい改心者の一人にバルナバと云ふ人が居り、其の人の居る事が非常に人に慰藉を與へるので、使徒等から「慰藉の子」と呼ばれて居た。彼はクプロにある地面を賣り、其の金を持つて來て使徒等に渡し、困つて居る人々を助ける神樣の御用に用ひて戴き度いと云ひ、其の心は愛と感謝とに溢れて居つた。

一。僞つて獻げた人は罰を受く（五〇一—十一）

（イ）聖靈に對する嘘。アナニヤ、サッピラと云ふ二人がバルナバの手本に倣はうと決心した—多分彼のやうに皆に愛され度いと思つたのであらう。地面を賣つたが、代價の一部分を取つて置き、殘りをば全部のやうに見せて渡すことに二人が同意した。アナニヤが其の獻物

を持つて來た時に、ペテロは嚴重な態度で彼を眺めつゝ尋ねた「何故なんぢの心がサタンに占領され、聖靈に嘘を云つて地所の價の幾分を匿したのであるか。何も全部を献げる必要はない。それに全部献げた風をするのは、人にではない、神樣に嘘を云つたのである」と。

(ロ)アナニヤの死。此の言葉を聞くなり、アナニヤは倒れて死に、一同は呆氣に取られた。多分ペテロもさう云ふ事は豫期しなかつたので驚いたことであらう。集會に來て居つた若い人々は立ち上つて、アナニヤの屍を墓場に運んで行つた。

(ハ)サッピラの死。三時間の後に彼の妻のサッピラが入つて來た。「汝らは此の値段で彼の地所を賣つたのであるか我に告げよ」とペテロは云つた。彼女は「其の値段です」と云つた。「汝らは心を合はせて主の聖靈を試みようとするのは何うした事だ。汝の夫を葬づた人々は今に汝をも運出して行くだらう」とペテロは云つた。直樣彼女はペテロの足下に倒れ、息出されて夫の側に葬られた。彼等は生きて居る間に一緒に罪を犯したが、今は死んで二人の屍が並びあつて横たはつて居た。其の場に居あはせた者も、此の天罰の事を聞いた者も、皆大い

に懼れて、神樣を僞らうとするのは如何に危險なものかと云ふ事を悟つた。

註—法律では品物を盜んだ人のみならず、盜んだ品物を受取つた人も罰を受けることになつて居る。

主なる教訓—聖靈は從順な人には惠を下さる、併し罪を知りつつ逆つて罪を犯す人には恐ろしいお方である。

勸告—使徒等やバルナバは聖靈に從うて居たから愛と奉仕と大いなる幸福とに導かれた。併しアナニヤとサッピラとは神樣を僞らうとしたから、彼等には聖靈は滅ぼす力となつた。熱心に神樣を喜ばせ奉らうと努める人々は、聖靈の御助を當てにすることが出來る。併し他人を惡に導き、僞を謀る人々は、聖靈が自分の敵である事を發見し、其の生涯は悲痛と苦悶とに終るのである。

(例)火は神樣の賜物で、正しく用ひれば大いなる祝福となり、家を暖め、食物を料理し、蒸氣を造るなど仲々有用である、併し用ひ方を誤れば恐ろしい危險物となり、私共の身体をも持物をも悉く滅す力を有つて居る。

第三十五課　聖靈は使徒を通して證言す　（八月二十七日）

―（使徒行傳五〇十五―四十二）―

【諳誦聖句】我らは此の事の證人なり。神のおのれに從ふ者に賜ふ聖靈もまた然り（使徒行傳五〇卅二）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

△十七。サンヒドリム即ちユダヤ人の大議會の七十人の議員は大抵はサドカイ人であつた。サドカイ人は死後の生命、天使、靈の存在、等を信じなかつた。使徒等の教に腹を立てたのも怪しむに足らぬ。

△廿一。神殿の戸は夜明前に開いて居つた。其所には既に多くの人々が群集して居つた、それ故使徒等が早朝に神殿に行つたのは別に特異な事ではなかつた。

△廿八。ユダヤ人が如何にイエス様を憎んだかに注意せよ。「この名」、「この人」と云ひ、イエスと云ふ名を唇にすることさえ避けた。それとは反對に使徒等は、イエスキリストの事を語ることを榮譽とした。

△卅四。ガマリエルは偉大な聰明なる教授、或は法學博士として到る處に於て知られて居つた。彼の名聲が人々の間に非常に高くて、「ガマリエルが死んで律法の榮光が落ちた」と一般に云はれた程である。彼は使徒パウロの教師であつた。

△卅六。「チウダ」は多分此の時より遠からぬ前に此の國に蔓つた多くの叛逆者の發頭人の一人であつたらう。

△四十。四人は柱に縛られ、三つの別々の革で出來た鞭で十三度打たれた。これがユダヤの所謂四十に一を減じたる鞭であつた。救主の受けた恐ろしい羅馬の鞭韃法より其の嚴しさは遙かに少ない。

一。彼等の驚くべき奇蹟（十五―十八）

（イ）エルサルムは動く。萬事實に都合よく行つたので、間もなくエルサレムの市民が皆イエス様に從ふに至るかと思はれる程であつた。併し暴風が將に始まらんとして居つた。

成功の時には困難の來ることを覺悟せよ。惡魔は今もキリストの意地惡い敵である。

（ロ）ペテロは祝福の中心。彼の其の場に居ることが人々に健康と慰藉とを齎した。假令仕挫つても、眞實にイエス様を愛する者は、主は恢復させて用ふることを喜び給ふとの驚くべき實例である。

（ハ）使徒等の入獄。彼等が實際に迫害を經驗するのはこれが最初である。彼等はキリストの御爲に獄に投ぜられたる者の長い大行列（救世軍人もその中にあり）の先頭である。

二。彼等の勇敢なる行爲（十九―廿六）

（イ）獄屋の戸が開く。石、境遇、又は不健康の獄屋も神様が最善と見給ふより以上に一瞬間たりとも長く私共を閉ぢ込めて置くことは出來ぬ。

（ロ）大膽に危險に面す。エルサレムより逃げたりせずに、使徒等は眞直ぐに危險の場所―神殿―に戻つて行つた。神の命令には神の保護は附き物。使徒等は聖靈の力によりて主の勇氣と沈着とを幾分か學びつゝあつた。自分の安全でなく、主の榮光が今は彼等の第一に心に懸けた事であつた。

（ハ）役人等も當惑す。議會は、救主を十字架に釘けた時に萬事終れりと確信した。今は次に何事が始まるかと當惑するのみであつた。救主の御言葉（マタイ傳四〇廿―廿（二））が事實となりつゝあつた。米種が大木となりつゝあつた。二階座敷では百二十人であつたが、今はエルサレムにはキリストに從ふ者が充滿して居つた。

三。彼等の恐れざる證言（廿七―四十二）

（イ）ペテロの力ある答。神様の要求は何時も人間の要求よりも先きである。神様の律法と人間の規則との衝突する場合には、何時も此の大主義が事を支配しなければならぬ。

（ロ）ガマリエルの忠告。ガマリエルは此の世の智慧に於ては賢明であつたが、間違つて居つた。彼はこれが神様より出た働きであるか人より出たものであるかを明言すべき筈であつた。「中立」であつたとは云へ、矢張り神様に反對して居つたのである、何となれば彼は復活とメシヤとの大問題には觸れないで置いたからである―信ずる事を好まなかつた。彼は或る所迄進んだ、それから悲しむべし！中途で止めた。

（ハ）使徒等は働に復歸す。彼等が歸つて直様働に從事した事に注意せよ、困難が多いとて不平を云つたり、後の事を心配したりもしなかつた、暴風の時に如何に行動するかを云ふことは私共の教を驗す眞の試金石である。使徒等は困難にも喜びをなすことが出來た、斯くして主の教訓を實際に行つて居つた（マタイ傳五〇十一、十二）。貴君はイエス様の御爲に非難を受けることを名譽と思つて居るか？

緒言―前週は神様が其の民を虚偽な人々より保護し給うたことを見た。今日は大いなる危險の中に主の御保護があり、聖靈は驚くべき方法を以て彼等を通して證言をなし給うたことを見るのである。高壇から使徒行傳五〇十五―廿三を朗讀。

一。彼等の驚くべき奇蹟（十五―十八）

（イ）エルサレムは動く。神様は尙ほも（十二節）使徒等―殊にペテロ―を通して多くの不思議な奇蹟を行ひ給うた。人々はペテロが通る時に、彼の身体の影にでも觸つて病氣を直して貰はうとて、往來に病人を連出して來ると云ふ程であつた。

（ロ）許多の人々は癒さる。エルサレムの近邊の方々からも人々が群をなして、病氣の人や惡魔に附かれた人を連れて來たが、皆癒された。

（ハ）使徒等は獄に投ぜらる。大祭司や役人等は、さう云ふ事がイエス様の名―彼等はイエス様が人から忘れられん事を欲して居つた―によりて行はれて居るのを知つて、大いに腹を

立てた。使徒等を縛つて牢屋に放込んで仕舞つた。

二。彼等の勇敢な行爲（十九―廿六）

（イ）天使に助出さる。ところが夜の間に神様の聖い天使が牢屋の戸をあけ、使徒等を外に連出して、斯う云つた「行つて神殿の中で此の生命の言葉を宣傳へよ」と。

（ロ）神殿にて教ふ。それで使徒等は丁度夜明けの前に神殿に行つて、教へ始めた。其の間に大祭司が議會を召集し、使徒等を呼びに人を遣した。下役の人々が歸つて來て云ふには「牢屋は堅く閉ぢてあり、番人は立つて居るのに、囚人は見附かりません」と。

（ハ）役人等は當惑す。議會ではこれを聞いて當惑して居つた。丁度その時に誰かやつて來て「あなた方が牢に入れた彼の人々は神殿の中に立つて教をして居ります」と云つた。そこで神殿の番兵の頭と其の番兵とが急いで神殿に行き、靜かに使徒等を連れ歸つて來た―若し荒々しく扱ふと人民に石を投げられるかと恐れたからである。

三。彼等の大膽な證言（廿七―四十二）

(イ)大祭司の質問。「彼の名を以て敎へることを汝らに禁じて置いたではないか」と大祭司は使徒等に尋ね、「それに今汝らは其の敎エルサレムに滿たして、彼の人の死んだことに就いて我々に責任を負はせようとするのである」と云つた。

(ロ)ペテロの力ある答。ペテロは皆を代表して「人に從ふよりも神樣に從はねばなりません」と答へた。そして復も、彼等が救主なるイエス樣を十字架に掛けたが、神樣がイエス樣を甦らせ給うた事、そして使徒等も聖靈も共に其の證人であることを彼等に告げた。役人等は大いに怒り、使徒等を殺して仕舞はうと決心した。

(ハ)ガマリエルの忠告。ところがガマリエルと云ふ非常に學問のある名高い敎授が、一寸暫く使徒等を外に出して戴き度いと云つた。彼等が出た後で彼は「イスラエルの人よ、諸君は此の人々に爲さんとする事に就いては氣をお附けなさい」と云つた。それから、大變な騷ぎを起した他の人々が、直きに滅んで仕舞つた事もあると云ふ實例を引いて話した。「此の人人を爲す儘に任せてお置きなさい」と彼は言葉を續け、「若し彼等の爲す事が人から出たものならば自然に消えて仕舞ふであらう。若し神樣から出た事ならば、諸君の力で止められるものでもなく、うつかりすると諸君は神樣に敵する者となります」と結んだ。役人等はそれに同意し、使徒等を呼入れて之を鞭ち、イエスの名によりて語つてはならぬ」と命令して彼等を放免した。使徒等はイエス樣の御爲に苦難を受けさせて戴くことは勿體ないことだ」と喜びつつ歸り、毎日神殿や家の中でイエスキリスト樣の事を敎へた。

主なる敎訓—凡て正義を行ふ爲に苦しんで居る人々を、聖靈は來つて助け慰め給ふ。

勸告—聖靈の御助の與へられる方法は色々ある、時には—使徒等が天使に助け出された時のやうに—困難や苦痛から逃れる道を敎へ給ふ。又或時には—使徒等が議會の前に出された時のやうに—爲すべき事、云ふべき事を敎へ、又勇敢に正義を行ふ能力を授け給ふ。

第三十六課　聖靈の力と魔術者　（九月三日）

—（使徒行傳八〇四—廿四）—

【諸聞要句】食るもの、即ち偶像を拜む者等のキリストと神との國の世嗣たることを得ざるは、汝らの確く知る所なり●

汝ら、人の虚しき言に欺かるな（エペソ書五〇五、六）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

△五。ピリポはギリシヤ方言のユダヤ人であつた故、エルサレムの人々と「投交渉」のサマリヤ人には特に適して居た。

△九。その時分には魔術使ひが甚だ普通であつた。今日でも異教の國々では「悪魔祓」「治病法術士」その他種々の虚偽の教師等は人々を欺いて自分の懐を肥やして居る如くに。

△十八、十九。英語に神職賣買罪と云ふ意味で「シモニー」と云ふ言葉があるが、此の人の事から起つたものである。

△十九。シモンは光を受けんと欲したのでなく、自分が發電所の如くになつて、光を賣捌き、それによつて自分の地位を益々高め度いと思つたのである。

註―古き記錄によればシモンは尚ほ生き、失脚り自分は偉大なるものであると自慢し、到る處に悪感化を弘めて居つたその事。彼の終は判然しない。或る著述家の記すところによれば、彼は必ず三日目に甦ると思つて自分から求めて、生きた儘埋められたと云ふ。

聖書の教訓

一、救の使者ピリポ（四―八）

（イ）神は轉じて悪となる。迫害はクリスチヤンが不拭殺に陷る事を豫防し、彼等を遠く廣くに遣して、榮光ある福音を弘めさせる事になつた。ピリポは執事として誠に忠實であつたから（六〇五、六）傳道師に昇級された事が明かである。小さい機會に對して忠實であれば、それは直に大いなる機會に對する準備となる。

（ロ）サマリヤの喜び。三つの階段に注意せよ（1）人々は聽いた、（2）汚れた靈より救はれた、（3）市中には大いなる喜びがあつた。今日も聖靈の力によりて救の宣傳されるところでは、何所でも同じである。

二。魔術者シモン（九―十九）

（イ）彼の悪感化の破壞。ピリポはシモンや魔術に對して反對演說をするやうな骨折はしない。それは時間の空費になる丈けの事である。眞實のものを與へよ、然らば人民は直き

に虚偽なものを去るであらう。

（ロ）彼の改心の告白。シモンの實生活は直きに彼が本當に變化して居るか否かを示すのであつた。多分彼等は彼の詐偽を以て其の生活を營んで居つた人にバプテスマを施す前に帶つ方が正當であつたらう。決して急いで洗禮せずに、凡て悔改の座に來る者を助けることを努めよ。若し本當に救はれて居るならば聖靈の果を結ぶことを熱望するであらう。

（ハ）彼の貪慾心の發露。或る人々の失敗を言行不一致とは皆が似せ物だと云ふ證據にならぬ。シモンが一人失望を與へたからとて、それが他の改心者も不眞實だと想像すべき理由にはならぬ。然るに如何に屢々人々が口にするではないか「職業は最善者だ、僕は決して二度と宗教は信じない」と（ペテロ後書二〇二〇）。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―前週は使徒等が牢屋から助出された諸々を習つた。今日は「人の悪人が聖靈の力を貪り求めたところを見るのである。高壇から使徒行傳八〇九―十九を朗讀。

一。眞の教師ピリポ（四―八）

三。ペテロは惡事をあばく（廿―廿四）

（イ）彼の大膽な叱責。ペテロはシモンの心が變化せずに、尚ほ「苦き膽汁と不義の繫さに居る」ことを明らかに見抜いた、併しシモンに對してそれ程に厳しかつたけれども、尚ほ彼に救さるべき道を告げた。ペテロ自身の言葉と對比せよ（三〇六）。彼は有てるものを與へた、シモンは神様の榮光の爲に用ひる積りでないものを買ひ又與へんことを欲した。

（ロ）彼の祈禱を求めらる。シモンは自分の爲に祈らなかつた、ただ其の悪の結果を逃げ得るやうに他の人々が祈つて與れることを欲した。彼は救をもキリストに似んことをも欲しなかつた。宗教の上部の告白を平氣でやつて居る、生れ變つて居ない、利己的な人の心の雛形である。

一（イ）彼の惠の言葉。キリストの僕等は此の時大いに迫害された、そして其の爲に遠く廣く散らされた。ピリポはサマリヤ市に下り行き、そこで敎を宣傳べた。

（ロ）其の榮光ある結果。市の人々は心を込めてピリポの言葉を聽き、彼の行ふ樣々の不思議な事を見た。惡鬼に附かれて居た者が多勢癒され、中風や跛者が立派に病氣を直して貰つた。光と平和とが人々の心に來り、全市が喜んだ。

二。僞の敎師シモン（九―十九）

（イ）彼の惡感化。暫く前よりサマリヤにシモンと云ふ人が住んで居り、魔術を行ひ、人々を欺き、凡人よりも勝れた者の如くに自ら裝つて居つた。人々は彼を恐れて「此の人は神の大いなる能である」と云つた。シモンは魔術を以て人々を迷はせて居つたが。ピリポがイエス樣の名によつて敎を宣べ始めると、人々は救主を信じ、眞の光を受け、多くの人がバプテスマを受けた。

（ロ）彼の信仰告白。シモンもピリポの話を聞き、自分は救はれたからバプテスマを受け度

いと云つた。新らしい改心者等はシモンが救を求めたのを見て喜び、彼は何時もピリポの側に居つて奇蹟を行ふのを見て驚いて居つたから、定めし其の心が變化したものと信じたのであらう。

（ロ）彼の利己的な申出。サマリヤに於ける驚くべきリバイバルの報がエルサレムに居る使徒等に屆いた。そこで彼等はペテロとヨハネとを遣しで、改心者等を助け强めて、彼等にも聖靈を受けさせようとした。使徒等は集會を營み、祈つて改心者等の上に手を接くと、彼等も亦驚くべき神樣の賜物を受けた。シモンはこれを注意して見て居つたが―自分の心に聖靈の感化を得たいのではなく―使徒等のやうに之を授ける力が欲しいと思つた。そこで若し使徒等が、神樣から授つた其の驚くべき力を彼に賣つて呉れるならば、お金を與へようと申出でた。

三。ペテロはシモンの心を見破る（廿―廿四）

（イ）ペテロの嚴しき叱責。「汝の金は汝と共に亡べ」とペテロは叫んだ、「汝は神樣の賜物を金で買べると思つてるのだ。汝の心は神樣の前に正しくない。」それからペテロは彼に、其

の秘かな心の企てを赦して戴くやうに悔改めて祈れと告げ、「何となれば我は汝が危険な罪の束縛の中に居ることを見る故である」と云つた。

(ロ)シモンの其の場逃れの答。シモンは多分ペテロの言葉を聞いて恐れたのであらうが、それでも尙ほ心の變化を望まなかつた。彼はたゞ「あなた方の仰しやる事が一つも私の身に落掛つて來ないやうに、私の爲に祈つて下さい」と云つたのみであつた。併しペテロが何れ程祈つて呉れたところで、それがシモン自身の悔改の代理をすることが出來ない。そして恐らく彼は遂に悔改なかつのであらう。

主なる教訓—貪慾で一杯になつた心には、聖靈が住み給ふことが出來ぬ。

勸告—貪慾は多くの靈魂の滅亡を招いた—ユダ、アナニヤ、シモン、皆此の岩に打突かつて難船した。何れも自分の爲に得ようとした。金錢—ユダの如く、友人の賞讃—アナニヤの如く、他の人々を支配する權力—シモンの如く、を貪ることは危險である。私共の貪り求むべき物は救主御自身に似たる品性である。

(例)シモンの事を今日の救世軍のリバイバルの最中に起つたものと想像して既明して御覽なさい。

第三十七課 聖靈はピリポを導く (九月十日)

—(使徒行傳八〇廿六—四十)—

【讃頌聖句】よろこびの音信をつたへ、平和をつげ、善おとづれをつたへ、救をつげ、シオンに向ひてなんぢの神はすべ治ゆたまふといふものの足は、山上にありていかに美しきかな(イザヤ書五十二〇七)

▲青年科 (十三歲以上)

聖書の註解

△廿六。エルサレムからガザへの道は二つあつた—一つは海岸に沿ひ、も一つは沙漠の曠野を通つて居つた。

△廿七。「カンダケ」とはエチオピアの女王の稱號であつた—エジプト王をパロと云ふ如く。此の人は黑人で、多分ユダヤ教に改宗して居つたのであらう。ユダヤの聖書に親しんで居つたが、それがキリストに於て成就されて居ることを知らずに居つた。彼には其の地位に相當な大勢の從者がお供をして居つたことであらう。

△廿八。東洋では今日でも輕を出して自分の爲に音讀する習慣がある。併し此の旅行家は或は御者にも聞かせる爲に大聲で讀んで居つたのかも知れない。

註—傳說によると、此のエチオピア人は其の本國に於ける最初の福音宣傳者になつたと云ふ。現今ではアビシニア(舊のエチオピア)の人民の間に幾分かイエス樣に關する智識の存して居ることが知られて居る。救の知らせは今日も尙ほ同樣の方法に於て異敎の國々に傳はつて居る—一人が其の眞理を聞き、それを親類や友人に話す。

聖書の教訓

一。光を拒らず(廿六—廿九)

（イ）ピリポの受けた命令。若し私共が信じて、身を神様の御手に委ね、寂しい道でも樂しい集會と同樣に歡迎する心の用意があれば、神樣は其の福音をどんとし給ふ靈魂に私共を導き給ふであらう。

（ロ）旅人が光を求む。屢々高位高官の人々は高慢で、心靈上の事柄に無頓着な者と思はれて居るが、此處には一人の高官の宮人が其の靈魂の爲に聽々長の旅行をなし、種々の点に於て自分よりも遙かに劣つた人から教を受けることを喜んだことを見る。彼の單純と熱心とは私共凡ての者への模範である。

（ハ）不可解の書。或はエルサレムに滯在中に聖書を一部買つたのかも知れない。惠を受けんが爲に千里を遠しとせずして來たのであつた。尙ほ解決を得ない不明瞭な事柄が多くあつたけれども、彼は神樣を尋ね求めることを續けた。如何に多くの人々は、集會からの歸路で愚かな談話をする爲に其の受けた惠を失ふことであるぞ！

二。光を示さる（卅一―卅四）

（イ）ピリポの驚くべき會。其のエテオピア人は學ぶ機會を捕へる事に熱心であつた。幾千と云ふ人々の心は今日も彼と共に「導く者なくば、いかで悟り得ん」と云つて居るのである。これに應ずるのが私共の仕事である。

（ロ）旅人の質問。聖靈は彼の讀むところを導き、同時に彼の質問に答へ得る人をも送つて居給うた。これは今日も尙ほ聖靈の働き給ふ方法の驚くべき一例である。

（ハ）聖書の説明。ピリポは別に學者めいた説明や、ユダヤの書物からやかましい言葉を引いたりなどしないで單に「イエスの福音を宣傳へた。」これは人の頭腦と唇とを占領し得る最大の題目である。「イエスを宣傳へる」ことを學べ、然らば主の爲に靈魂を捕へるであらう。

三。光を受入れる（卅五―四十）

（イ）旅人の即座の願望。自分がイエス樣に從ふ者なることを公けに認めたいと願つた。少しも躊躇しない、彼の心はよく用意せられた地面であつた―善き種子が直ちに芽を出した。

（ロ）新しき改心者のバプテスマ。其の怪み見て居る凡ての從者の前で、此のエテオピア人は其のバプテスマにより自分は今はクリスチャンであることを公然に證言した。彼は救主の預言し給ひし人々の中の一人で（マタイ傳八〇十一）、キリストに心を獻げた最初のアフリカ人であつた。

（ハ）ピリポの働の完成。救主の御爲に語つた言葉が如何に遠くまで及ぶかは決して知ることが出來ない。若しピリポの如く私共も神樣と僧に歩み、聖靈の御導きに服從するならば、私共も亦旅人に祝福を與へる者となり、彼等は私共の語つた言葉を私共の途に知ることの無いやうな所に持つて行くことになるであらう。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―前週はピリポがサマリヤで教をして居つたのを見た。今日は彼が聖靈の御力によつて、一人の大臣を福音の光に導いて居るところを見るのである。高壇から使徒行傳八〇廿六―卅一を朗讀。

一。二人の旅人が道で出遇ふ（廿六―廿九）

（イ）ピリポの奇妙な命令。前の日曜日に習つた立派なリバイバルの最中にピリポは神樣の天使から一つのお告げを受けた。即ち市を離れてエジプト行の寂しい道へ行けとの事であつた―多分エルサレムから六十哩程であつたらう。ピリポは直ちに服從し、獨りで出掛けた。

註―ピリポは今日の眞の救世軍士官のやうであつた―主の御命令のまゝに何處にでも行く用意があつた。

（ロ）アフリカの旅人の讀書。エテオピア人で、女王カンダケの大藏大臣を務めて居る偉い

お役人が、神殿で神樣を禮拜する爲にエルサレムへ旅行したのであつた。歸途に馬車に乘つて坐りながら、獸の皮で拵へた卷物を、聲朗らかに讀んで居つた。其の卷物には預言者イザヤの言葉が錄してあつた。

（ハ）ピリポへの聖靈の命令。ピリポが其の馬車が道を通つて來るのを見た時に、彼は神樣から又一つのお告げを受けた。「ゆきて此の馬車に近寄れ」と聖靈が彼に仰しやつた。そして彼は直ちに服從した。

二。馬車の中で二人の會話（卅—卅四）

（イ）旅人はピリポに尋ねらる。ピリポは馬車の側に走り寄つたところ、其のエチオピア人がイザヤの書いたものを讀んで居るのを聞いた。「讀んでお在でになる事がお分りになりますか」と彼は尋ねた。エチオピア人は「何うして分りませう、誰か說明して下さらねば」と答へた。そこで彼はピリポに、乘つて來て自分の側に坐つて下さいと云つた。ピリポは多分此の時に、神樣が何故自分を此の遠い所までお遣しになつたかを悟つたことであらう。

註—此のエチオピア人は現今の德光の人々のやうである—（一）イエス樣の事に就いては暗黑の中に居る。支那には四億の人々があり、その中には救主の名を聞いたことのある人は極少數である。日本にも朝鮮にもシヤパにも印度にもアフリカにも其の他の國々にも尙ほ多くの民がある。（二）誰かが來て敎へて與へるのを待つて居る。彼等は自分等の宗敎の中に何の眞理も、罪の赦しも、天國の希望も見出さないのである。

（ロ）聖き讀物。そのエチオピア人の讀んで居つた所にはイザヤが救主の死を預言した彼の驚くべき言葉が書いてあつた「彼は羊の屠場に牽かるゝ如く牽かれ、又羔の其の毛を剪る者の前にて聲を出さぬが如く其の口を開かず」（イザヤ書五十三〇七）。

（ハ）ピリポは旅人に尋ねらる。エチオピア人は、それを讀んだ後にピリポに尋ねた「此處では預言者は誰の事を申して居るのでせうか—自分の事ですか、又は誰か他の人の事ですか」と。これこそは丁度ピリポの望んで居つた機會である。

三。アフリカの旅人の改心（卅五—四十）

（イ）イエス樣をピリポが宣傳す。イザヤ書の此の驚くべき言葉を題目にして、ピリポは二人で一緒に馬車に乘つて旅の道に進みつゝ、此のエチオピア人に、世界の救主なるイエス樣の善き音信を語して聞かせた。

（ロ）イエス様を旅人が受入れる。聽て水のある所へ來ると、エテオピア人は「御覽なさい、水がある！直にバプテスマを受けていけないと云ふ譯も無からうぢやありませんか」と云つた。ピリポは「差支ありますまい、若しあなたが一心になつて信じさへすれば」と答へた。すると彼は「私はイエス様が神様の御子であると信じます」と云つた。そこで彼は車を止め、二人は水際に下りて行き、ピリポは彼にバプテスマを授けた。

（イ）イエス様を旅人が喜ぶ。エテオピア人に對するピリポの仕事はこれで濟んだ。そして彼等が水から上つて來ると、聖靈はピリポを他の方へ連れて行つてお仕舞ひになつた。併し旅人の方は喜び嬉しがりつゝ、その遠い〳〵本國指して旅を續けた。ピリポの方は其の間にアシドドと云ふ町に來て居つた、それから其處でも他の凡ての市々でも福音を宣傳へつゝカイザリヤまで來り、そこに住居を定めた。

主なる教訓—黑暗の中にも惠を求めて居る魂靈に、神様は御自分の使者を遣して助け給ふ。

勸告—若しピリポが神様の召命を拒み「旅行が餘り長い、餘り寂しい、餘り甲斐もなささうだ、家に居る方がましだ」と云つたならば、彼のアフリカ人は光を求めて尙ほ闇路を彷徨つて居たであらう。貴君もピリポに倣つて何時も直ちに神様の御聲に從ふ習慣をお養ひなさい。又將來救世軍士官となつて、暗黑の中に居る人々にイエス様の光を照せとの神様の召命のあつた時には、直ちに服從することの出來るやう、今から其の準備をお始めなさい。

（例）少年兵が外國傳道の士官から、暗黑な悲慘な境遇に居ながら救の光を求めて居る靈魂を、キリストに導いた話を聞いた。その子供は「私も、同じ目的の爲に一生を献げる」と決心した。其の考で勉强したり準備したりして居る間に年は經つて、志願した。今日では愉快な、惠まれた士官として遠い異教の國で神様の惠を弘めて居る。

第三十八課　聖靈は光を賜ふ（九月十七日）

—（使徒行傳十〇一—廿三）—

【諳誦聖句】眞理の御靈きたらん時、なんぢらを導きて眞理をことごとく悟らしめん（ヨハネ傳十六〇十三）

▲青　年　科（十三歳以上）

聖書の註解

▲十〇一。「カイザリヤ」—羅馬皇帝アウグストゥ・カイサルの名に從つて斯く名けられた—はユダヤに於ける羅馬軍隊の本營所在地であつた。ヨッパよりは三十三哩、エルサレムよりは七十哩。「イタリヤ隊」は歴史家の筆に上つて居る名

高い聯隊で、イタリヤよりの義勇兵より成立つて居つた。「コルネリヤ」は羅馬の或る貴い家柄の名であつた、多分彼は其の家系に屬して居つたのであらう。

△二。ユダヤに居住して居た多くの羅馬人は眞の神に仕へることを學び、ユダヤ人と同じ祈禱の時間や、規則などを守つて居た。コルネリヤも其の一人であつた。（マタイ傳八〇十には一人も見えて居る）。

△五、六。ヨッパはエルサレムの海港で、二十七哩隔つて居つた。皮工はユダヤ人には憎まれ賤しまれて居つた、その工場は市の石垣の内には許されなかつた。内側を羅馬のヒメントで塗つた皮工の桶の跡が今尙ほ海岸に見られる、或はそれがシモンの工場に屬するものであつたかも知れない。

△十四。モーセの律法によればイスラエル人は食物、習慣交際及び宗教に於て他の國民と分離して居るべき筈であつた。最初イスラエルは律法を破り、異教徒と混じた。併し後には他の極端に馳せ、その分離を誇り、自分共は他國民よりも優づて居ると思ふやうになつた。（濁き動物と潔からざる動物との表に就きては利未記十一章を見よ。）

聖書の教訓

一。コルネリヤに新しき光（一—八）

（イ）羅馬の軍人が祈る。本當の神々しき生涯には祈禱と人助の行爲とが含まれて居る。片一方丈けでは、余り役に立たぬ。最も眞實に祈る人は大抵は最も快く與へる。

（ロ）彼の迅速な服從。此處に陸軍式訓練の實例が見える。一刻も愚圖々々しない。尙ほ多くの光を與へられる前に、既に有つて居る光に服從することが必要である。

二。ペテロに新しき光（九—十六）

（イ）猶太の使徒が祈る。私共の祈禱の時は神樣の默示の時である。ペテロもコルネリヤも、若し特に時間を造つて祈ることをしなかつたならば、神樣の新しき世界大の默示を得損ふのであつた。若し個人的の祈禱の爲に幾時間と云ふ時間を用ひる事が出來ぬならば幾分かの時間を割き、他の人々から退いて神樣の御聲に耳を傾けよ。

（ロ）彼への神の啓示。ユダヤ人と異邦人との間の分離の律法を造り給うた神樣は眞實にそれを廢止にしておいでになる。今の時代に神樣の要め給ふ分離は國民と國民との間でなく、各個人が凡ての聖からざる事物より分離する、ことである（ロリント後書六〇十七）。

三。共に光に服從す（十七—廿三）

（イ）羅馬人の要求。此の二人の僕と兵卒が皮工の家の戸を叩いて居るのを見た時に、誰一人として、これら寫音が異

教の世界に僧（られるのだと信じなかつたであらう。最も無智な兒童に似たやうな要求をも等閑にすることのなきやう慎め、それが基となつて如何なる大事が起つて來るかは神樣のみ知り給ふ。

（ロ）聖靈の命令。嚴格なユダヤ人としては、ペテロは異邦人の家に入る權利がなかつたのである。キリストはユダヤ人なる弟人らと食事を共にした爲に、パリサイ人を驚かせた（マタイ傳九〇十一）、今やペテロは—聖靈の直接の御導きによつて—羅馬士官の許に行つて宿泊することによりて、ユダヤ人を更に大いに驚かせるのであつた。

▲少　年　科（六年生以下三年生迄）

二。緒言—前週は神樣がエチオピア人を光に導く爲に特別な使者をお遣しになつたところを見た。今日は神樣がペテロに、救は全世界の人に自由に與へられるものだと、敎へてお在になるところを見るのである。高壇から使徒行傳十〇一—八を朗讀。

一。コルネリヤに新らしい光（一—八）

（イ）彼の篤信な生活。パレスチナの北の方にあるカイザリヤと云ふ大都會にイタリヤ聯隊の聯隊長なるコルネリヤと云ふ人が住んで居つた。此の人は神樣を愛して仕へ、そして其の家中が皆さうして居つた。又貧乏な人々には親切で、度々神樣に祈つた。

（ロ）天來の訪問客。或日の午後三時頃、彼は幻の中に、一人の天使が自分の家に來て、「コ

ルネリヲよ」と名を呼んで居るのを見た。彼は「主よ何の御用で御座りますか」と答へた。すると天使は彼に、彼の祈禱と親切とは神様の御前に忘れられないで居る。そして神様はヨッパの海邊なる皮工のシモンと云ふ人の家に宿を取つて居るシモンペテロと云ふ人を呼びに人を遣すことを彼に望んで居給ふのだと告げた。天使の云ふ事には、此のペテロと云ふ人は彼にもつと神様の御旨を敎へて下さるのであると。

（ハ）ペテロに人を遣す。天使が行つて仕舞ふと、直ぐ其の士官は二人の僕と、も一人何時も一緒に居る信仰の篤い兵卒とを呼び、其の幻の事を話して彼等をヨッパへ遣した。

二。ペテロに新しい光（九十十六）

（イ）彼の屋上の祈禱。翌日の晝頃、その人々が旅行して居る時であつた、ペテロは祈る爲に平らな屋根の上に登つた。彼は大いに空腹を覺え、食物が欲しくなつた。家の人々が食事の用意をして居る間に彼は夢を見て居るやうな狀態に陷つた。

（ロ）彼の奇妙な幻。ペテロには、恰も天の大空が開いて、四角を結んだ大きな帆が地上に

釣下されるのが見えるやうに思はれた。中には色々樣々の獸や鳥や虫が入れてあつた。

（ハ）彼への神樣の啓示。次に彼は「ペテロよ、立つて之を殺して食べよ」と云ふ聲を聞いた。併しペテロは嚴格なユダヤ人であるから「主よ、それはいけません。私はまだ穢れた物を食べたことが御座りません」と答へた。すると又其の聲が「神樣の潔めた者を潔くないと思つてはならぬ」と云つた。三度斯う云ふ事があつて後に、帆は再び大空に引上げられて仕舞つた。

三。共に光に服從す（十七―廿三）

（イ）三人の知らぬ人の到着。ペテロは一体此の幻は何う云ふ意味だらうかと大いに惑うて居つた。すると丁度その時に、彼の使者等が皮工の家の門口へ來て「ペテロと云ふ苗字のシモンと云ふお方がお家に泊つていらしやいませんか」と尋ねた。

（ロ）聖靈の命令。ペテロは尙ほも熱心に其の幻の事を考へて居ると、聖靈は彼に「三人の人が汝を尋ねて居る。下りて行つて、疑はずに彼等と一緒に行きなされ、我は彼等を汝の所に

來させたのだから」と仰しやつた。

（八）使者等の出發。そこでペテロは其の見た事もない人々に會ひに下りて行つた。「あなた方の尋ねておいでになるのは私です」と彼は云つた、「何う云ふ譯で私の所へお出でになりましたか。」「私共の聯隊長のコルネリヲは」と彼等は答へた、「正しい、また神樣を敬ふ人で御座りますが、聖い天使からあなたを招きに人を遣すやうに、そしてあなたの敎を聽くやうにとお告げを受けたので御座ります。」ペテロは彼等を招き入れ、食物を與へ、宿を貸し、翌日一緒にカイザリヤを指して出立した。ヨッパから數人の友達も彼に附いて行つた。コルネリヲの家で何う云ふ事があつたかは次の日曜日に習ふのである。

主なる敎訓—聖靈に服從しようと努めて居れば、神樣の御旨が日毎に明らかに示される。

勸告—コルネリヲは使者等を送らず、ペテロも聖靈の御命令を聞きながら彼等と共に行かなかつたならば、彼等は何方も銘々に與へられた幻の意味を悟らずに仕舞つたであらう。惑ふ時には、有つて居る光に從ひなさい、さうすれば一歩々々貴君の道が開けて行くであらう。

（例）マリエルさんは大勢あゐ子供の中で一番年上である、皆がお友達と一緒に終日の野遊に出掛ける計畫をして居た。丈夫でないお母さん丈けが家に居らせることをマリエルさんは不安に感じた、自分も家に止まるべきだと云ふ感じがだんだんと強くなつて來た。他の者はそれでは困ると思つたが、彼女は決心して仕舞つた。その日の間にお母さんは心臟が急に惡るくなつた。お醫者さんの云ふには、若しマリエルさんが居つて機敏にお世話をしなかつたならば死んで仕舞ふところであつたも。お父さんは大層有り難く思つた。マリエルさんは「家に居ることが私の義務だと云ふことを私に示して下さつたのは神樣です」と云つた。

第三十九課　聖靈は異邦人に降る（九月二十四日）

—（使徒行傳十廿四—廿八、四十三—四十八。十一、一〇—一四、十五—十八（若し時間が短かければ話す））—

【諳誦聖句】神は偏ることをせず、何れの國の人にても神を敬ひて義をおこなふ者を容れ給ふ（使徒行傳十〇廿四、廿五）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲十〇廿四、廿五。嚴格なユダヤ人としてはペテロは異敎徒の家に入つてならなかつた。併し今は、當時解しなかつた「全世界に行け」との主の更に廣い命令に服從して居つた。

▲十一〇二。救はれて居らぬユダヤ人等は異敎徒がイエス樣の惠にあゐかろことには異議を唱へなかつたが、其の前に彼等が先づユダヤ式の割禮を受けて、ユダヤ人になることを欲した。併しユダヤの儀式は云はゞ建物の完成した後には不用になつて取外して仕舞ふ足場の如きものであつた。ユダヤ人と異邦人との間を隔てゝ居つた石垣は救主の降世と死とによつて破壞された（エペソ書二〇十三、十四）

△十八。ユダヤ人の手によりて門戸が開かれ、ユダヤ人の

心が私共異邦人を神様の御家族の中に歡迎して呉れたと云ふことを決して忘れてはならぬ。キリストの降世までは人間に示されたる唯一の純なる宗教がユダヤ人のみに托されて居つたのである。私共もユダヤ人の事を神様に感謝し、彼等の爲に祈り、彼等を愛し、イエス様がメシヤなることを彼等に知らしめるやう助を致し度い。

註―キリストの言葉が　如何に驚くべく成就せられたかを見よ（使徒行傳一〇八）。神様の言葉は最早一國民を通して與へられるのでなく、これからは太陽、雨、風、空氣と同じく、地上に住む凡ての者に自由に與へられることになつた。

聖書の教訓

一。ペテロはコルネリヲの家に至る（十〇廿四―廿三）

（イ）羅馬人の歡迎。ペテロは聖靈の導き給ふ儘に、皮工の家へでも立派な異邦人の家庭へでも行く用意があつた。貧者のみならず富者も神様の使者を要する。此の羅馬の貴族の一漁夫の前に於ける謙遜を見よ。神の靈には級階の差別なし。

（ロ）ペテロの學びし事。ペテロは未だ神様の意味し給ふところを充分に解しなかつたけれども、今後は二度と何人をもつまらぬ者、潔からざる者と呼んではならぬと云ふことを知つた。「自然性」から云へば私共は自分の家族、町民、國民を好み、他の人々を「外人」と思ふ。併し「惠」によりて私共は皮膚の色や國語の如何に拘らず、凡ての人を兄弟と見る。

（ハ）コルネリヲの經驗。一同は其の話を聞いた時に、互に知りあつても居らぬ者を一緒に來會はさせたとは、神の靈が二人の双方を導いて居る證據であることに、氣が附いたであらう。神様は今日もその如く働き給ふ。

二。聖靈は異邦人に降る（廿四―廿八。四十三―四十八）

（イ）ペテロの演說。彼の開會の言葉は「神様が異教の國民を如何に取扱ひ給ふであらうかと尋ねる人々への一助となる。若し彼等は其の有つて居る丈けの光に從つて歩むならば神様の御旨に適ふのである。彼がキリストの御生涯を述べた「周遊りて善事を行ひ」との言葉は、キリストに從ふ者の中の最も小さき者に就いても眞實であり得る。

（ロ）聖靈の賜物。此處には神の言葉に對して少しの反抗も叛逆も疑もなかつた。此の聽衆は彼のエテオピア人の如くに眞理に飢ゑて居つた。それ故彼等の信仰は直ちに聖靈の賜物によつて印せられた。

（ハ）新改心者を公けに受入れる。ユダヤ人にならずにキリストに從ふ者の受くべき特權を充分に受ける者となつた。

三。ユダヤ人の議會とペテロ（十一一〇二―四、十五―十八）

（イ）ペテロは非難される。ペテロは、主がユダヤの異人の間

に行き給うたと同じ理由の下に、異邦人の間に行つた。彼等の罪と快樂とを共にする爲に、救はれて居らぬ人々と交はるのは惡い。併し若し彼等に福音を與へる爲であるならば最惡の家に入ることも差支はない。

（ロ）ペテロの平靜と忍耐。ペテロは恰も次の如く語つたやうなものである。「私は何ですか。私は鍵に過ぎません。私を持つておいでになるお方が錠を廻はして、門戸を全世界に開放し給ふならば、道具なる私は如何で反對することが出來ませう。」此の謙遜は更に聖靈の御臨在を證するものである。

（ハ）萬人に賜ふ神の自由なる惠。神様が自分を如何に導き給うたかを事細かに語つたペテロの忍耐ぶかき智慧ある說明は聽く者をして信ぜしめ非難が感謝に變じた。此の堪忍と自分の行爲を喜んで說明する心とは、一方が他より論が進み過ぎる時又は見解を異にして居る如き場合に必要である。

▲少　年　科　（六年生以下三年生迄）

緒言―前週はペテロが數人の友や三人の羅馬人の使者と共にカイザリヤを指して出發したことを見た。今日は彼等がコルネリヲの家に着いた時に起つた事を見るのである。高壇から使徒行傳十〇廿四―廿三を朗讀。

一。ペテロはコルネリヲの家に至る（十〇廿四―廿三）

（イ）ペテロは歡迎さる。コルネリヲは、神様が將に自分等に敎の言葉を聽かせて下さらうとして居給ふことを信じて、親類や友人等を集めてペテロの到着を待つて居つた。ペテロが家に入るとコルネリヲは尊敬を表す爲に彼の足下に平伏した。併しペテロは「お立ちなさい

私も同じ人間です」と云つて彼を起した。それから奥へ入つて見ると大勢の人が集まつて居つた。

(ロ)ペテロは光に從ふ。ペテロが此の會衆を見た時に、その中には多分ユダヤ人が一人も居なかつたであらう。彼は云つた「諸君の御存知の通り、ユダヤ人は他國の人を訪問する事を嚴禁されて居りますが、神様は私に、何人をも潔からぬ者と云つてはならぬとお敎へ下さいました。それで貴君が人をお遣しになつた時に直ぐに參つた次等であります。それでお尋ね致しますが、何う云ふ御用ですか」と。

(ハ)コルネリヲは光を求む。コルネリヲは、前週私共の習つた自分の經驗をペテロに物語り、次の如く云つて言葉を終つた「お出で下さいまして有り難う存じます。私共は今皆此處で神様の御前に集まつて神様の敎を拜聽致さうとして居るので御座います」と。

二。聖靈は異邦人に降る(卅四—卅八、四十三—四十八)

(イ)ペテロはイエス様の救を語る。ペテロは語り始め「私は、神様は誰彼の差別をなさらないで、何處の國の人であらうと、凡て神様を敬うて義しい事を行ふ人は神様に喜ばれると云ふことがよく解りました」と云つた。それからペテロは、ナザレのイエス様が聖靈を以て膏注がれ、行巡つて善を行ひ給うた事を彼等に話して聞かせた。次にペテロは救主の死と復活との事、又主が何時か後の日に世界中の人をお審判きになる事(卅九—四十二)を語つた。凡てイエス様を信ずる人は其の罪を赦されるのであると云つて其の演説を終つた。

(ロ)聖靈は降る。ペテロが斯う云つて居る間に聖靈は、其の話を聞いて居た一同の上に降り給うた。ペテロと一緒にヨッパから來て居つたユダヤ人等は、聖靈の賜物が異邦人にも與へられたのを見て驚いた。何となれば彼等が異つた國々の語で語り、又神様を讃美して居るのを聞いたからである。

(ハ)新改心者を公けに受入れる。救主のお約束になつた火のバプテスマが彼等にも與へられたのであるから、ペテロは水のバプテスマをも授けて差支ないと思つた。そこで彼等は公けに主の名によつてバプテスマを施された。

三。ユダヤ人の議會とペテロ（十一〇一—四、十五—十八（時が短かければ話す））

（イ）ペテロは非難ある。間もなく、使徒等や國の方々に住んで居るイエス様を信ずる人々は、此のカイザリヤであつた事を聞いた。そしてペテロがエルサレムに歸つた時に、ユダヤの友人等は彼に小言を云つた。「君はユダヤ人でない人間の家に入つて、一緒に食事をしたりした」と彼等は云つた。

（ロ）彼の忍耐ぶかき説明。そこでペテロは、此の出來事の由來を抑々の始まりから悉く彼等に話して聞かせた。彼は言葉を進めて云つた「聖靈は丁度始めに我々に降り給うたと同じ樣に彼等の上にもお降りになりました。そこで私は主の宣うた、ヨハネは水を以てバプテスマを施したけれども、我々が聖靈に由つてバプテスマを施されるとのお言葉を思出しました。神樣が我々に賜うたと同じ賜物を此の異邦人等にも與へ給うたこと故、何うして私は神樣に逆ふことが出來ませう」と。

（ハ）非難は感謝に變る。ペテロの聽手は彼の語る事を聞いた時に、彼等は喜びに滿たされ

て「それでは神樣はユダヤ人のみならず異邦人にも生命に至る悔改を賜うたのですね」と云うた。

斯くてペテロは聖靈に導かれて、救の門戸を廣く全世界に向つて開放することになつた。

註—此の默示は、クリスチヤンの上に漸次に曙光を放つたことを御覽なさい。最初はピリポが一人の寂しき旅人の許に導かれた。次にペテロは異邦人の家庭に導かれた。最後にユダヤ人の混じて居らぬ一團の人々に聖靈が注がれた。

主なる教訓—イエスキリストによりて人種、國民、階級の差別は全く無くなる。

勸告—世俗は今尙ほ各國民の間に、白色と有色との人種の間に、貧者と富者との間にと色々の隔てを造らうとする。イエス・キリスト樣の王國に於ては此等の差別は全く拭去られて仕舞ふ。私共は凡ての人を神樣の大家族の一部として取扱ふことを學ぶからである。

（例）有色人種の間に住む多くの白色人種は有色人種を劣等なものと思ひ、又さう云ふ扱をする。ブース、タッカー中將は、以前には印度の裁判官であつたが、その高い地位を擲ち、救世軍士官となつた。そしてイエス樣の御精神に則り印度人を兄弟として扱うた。彼は跣足で歩き、印度服を着、印度食を食ひ、日毎に托鉢をして米を乞ひ、斯くして印度人の愛を得、千人以つて數ふべき大數の印度人を異教から基督に導いた。

第四十課　聖靈と祈禱（十月一日）

—（使徒行傳十二〇一—十九（青年科は廿三まで讀む））—

【詩誦聖句】斯のごとく御靈も我らの弱を助け給ふ。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御靈みづから言ひ難き歎をもて執成し給ふ（ロマ書八〇廿六）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の教訓

△二。ヤコブは斯くして十二人使徒の中でも第一番に十字架と冕とを交換する者となつた。彼の兄弟のヨハネは、それより五十年以上も後に、其の最後のものとなつた。

△三。ヘロデは多分ユダヤ教に改宗して居つたのであらうが、熱心なユダヤ人と思はれたがつた。それ故ユダヤ人を喜ばせようとした。何と氣の變り易い人民であるぞ！キリストが驢馬に乘つてエルサレムに入京の時には「ホザナよ！」と叫び、數日の後には「彼を十字架に釘けよ！」と云つた。ペンテコステの直ぐ後では使徒等と肩を並べて居たかと思ふと、今度はヤコブの死刑を喜んだ。

△八。ペテロは今は大いなる感化力を有して居つたけれども、相變らず貧素であつたと見える。何となれば「履」即ち草履は勞働者でなければ用ひなかつたと云ふから。

△十七。此のヤコブはイエス樣の異母兄弟で、ヤコブ書の著者で、エルサレムに於ける教會の長即ち監督であつたと思はれて居る。

△廿。「タロ」と「シドン」とは二つの重要な商業都市で、若しヘロデの不機嫌が長く續くと損害を受けるのであつたらう。ベラストは多分ヘロデの下に勤めて居た雜馬人だらう。

△廿三。此の病は甚だ劇烈なもので、非常な疼痛を起した。

聖書の教訓

一。ペテロの爲に祈る（一—六）

一週間も經つたけれども、他にペテロを助ける手段が彼の

友人達には示されなかつた。併し彼等は彼の救の爲に訴へることを繰げざるを得ないやうに感じた。そして今や彼の最後の夜となつて彼等は最後の「終夜」の聯合祈禱會を催した。此の強き執成の精神は聖靈によつて與へられたのである。

二。祈禱は應へらる（七—十）

（イ）天使の來訪。神樣は其の僕の爲に顧るべき適當な時刻を知つておいでになる。天使は、ペテロが死刑にせられんとする僅か數時間前に彼を救うた。神樣の時計は時間を違へない！神樣はその子供等に丁度善い時刻に、塩へ忍ぶに必要な惠を下さるか、逃れ道を開き給ふか、して下さる。

（ロ）ペテロの服從。神樣は私共が自分で出來る事を、決して私共の代りにやつて下さらない。ペテロは鎖を斷つたり鐵門を開いたりすることは出來なかつた。併し草履を穿いたり町を間違へずに通つたりすることは出來た（七、八、十）。今日多くの人々は神樣が自分の爲に奇蹟を行うて下さることを豫期して居る。併し若し彼等が既に知つて居る事を實行するまでは、神樣も其の分をなし給ふことが出來ぬ。

（ハ）鐵の門。誰か遠くに居る友人の信仰の祈禱に答へて、思はざる時に神樣の民の爲に「鐵の門」の折開いたことは如何に屢々であるぞ！祈禱を以てお互に戰友を助けませう。

三。祈禱の力の實驗（十一—十九）

（イ）ペテロは門に至る。此は、彼らが語りなへざるに我きかん」の實例である（イザヤ書六十五〇廿四）。彼等の祈禱の終らぬ間に應答が來た。神樣は私共にも其の如くに答へ度いと願つて居給ふ。

（ロ）ローダの喜び。私共も時々自分の五官の證明を信じ兼ね、祈禱が本當に答へられたとは信ずることの出來ないことがある。其の答が自分の豫期通りに來ないからとて、「そんな答がない」と云つて、戸を開くことを拒むとは何と云ふ愚かな事ではないか。

（ハ）ペテロの證言。今彼等は、自分等の祈つて居る間に神樣が働いて居給うたと云ふことを理解した。私共の薄弱な祈禱に對して與へられたる驚くべき答は—私共には全く知れて居ないが—天國での驚の一つであり、又感謝の源泉となるであらう。

四。ヘロデは罰せらる（廿—廿三）

ヘロデはバプテスマのヨハネの首を刎ね、キリストを嘲弄し、使徒ヤコブを殺し、放埒と罪との生涯を送つたが、その凡てに對して、見たところでは何の制裁をも受けなかつた。併し今や彼の杯は充ちた、そして彼の突然なる終は最も恐るべきものであつた（箴言廿九〇一）。

一人の天使はペテロを解放し（七節）、二人の天使はヘロデ

ム撃つた（世三節）。神様の聖き天使等は今も尚ほ目には見え〳〵と力との源泉なり（ヘブル書一〇十三、十四）、悪を行ふ者にねぎ神の使者として地上に遣されて居る―神の民には慰藉〳〵は正義と刑罰との使者となる。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―前に一度ペテロが他の使徒と一緒に牢に入れられたが、數時間の後に天使に助出され、れたことを習つたことがある。今日は彼が一人で牢に入れられ、大變な危險に陷つたところを見るのである。高壇から使徒行傳十二〇一―六を朗讀。

一。ペテロの爲に祈る（一―六）

（イ）彼の危險。惡王ヘロデは此の時に働の邪魔をしようと仕始めた、そして主なる三使徒の一人なるヤコブ、即ちヨハネの兄弟を殺した。ユダヤ人の長等は此の事を喜んだ、それで彼はペテロをも捕へて牢に入れた。七日の後には彼を引出して殺して仕舞ふ積りであつた。

（ロ）友人の悲嘆。その間彼の友人等は方々の家々で、群をなして集まり、絶間なく彼の爲祈つた。

（ハ）彼の平和な睡眠。最後の夜になつた。翌日になればヘロデは彼を引出して殺す筈であ

つた。併しペテロは牢屋の中で靜かに眠つて居つた。其の兩手は各々一人宛の眠つて居る兵隊の身体に鎖で繋がれて居り、尚ほ別に二人の兵隊は戸の外で番をして居つた。

二。祈禱は答へらる（七―十）

（イ）天使の御見舞。突然一人の天使は彼の側に立つた、そして彼の居る牢屋の地下室に光が輝いた。ペテロの片脇を叩いて天使は彼の目を醒まさせて「早く起きよ」と云つた。そして忽ち彼の手首から鎖が外れ落ちて、彼は立ち上つた。

（ロ）ペテロの服從。「帶をゝめなされ、そして草履を穿きなされ」と天使は云つた。それから「上衣を着て私に附いてお出でなされ」と云つた。ペテロは其の通りして、天使の後に附いて行つた。とは云へ彼は此が本當の事とは信じられず、幻でも見て居るのか知らんと思つて居つた。

（ハ）門が開く。彼等は第一、第二の番兵所を通り過ぎ、市に出て行く鐵の門の所へ來た。これが彼等の爲に獨りでに開け、二人はそれを通つて靜なか夜の町に出た。彼等は一つの町

を通つて行つたが、それから天使はペテロを離れて仕舞つた。

三。**祈禱の力の證明**（十一—十九）

（イ）終夜の祈禱會。遂にペテロは我に歸つて「今こそ確かに分つた。主は天使を送つて自分をヘロデの力とユダヤ人とからお救ひ下さつたのである」と獨語した。さう考へて居る間にバルナバの姉妹なるマリヤの家へやつて來た。そこには人々が集まつて彼の爲に「終夜」の祈禱會をして居つた。

（ロ）思はざる來客。彼が入口の戸を叩くと、ローダと云ふ娘は誰が來たのかと見に來た。彼女はペテロの聲を知つて居つたから、嬉しい餘りに戸も明けずに走り込んで行つて、ペテロが外に立つて居ると云つた。「お前さんは氣が狂つてる」と彼等は云つた。併しローダは「何うしても確かだ」と云ふ。「それでは彼の人の靈に相違ない」と彼等は答へた。その間ペテロは頻りに戸を叩いて居つた、そして彼等は戸を明けて見て、大いに驚いた。

（ハ）ペテロの驚くべき證言。ペテロは手を動かして彼等を靜めた。それから主が自分を牢

屋の中から連出して下さつた事を彼等に語り聞かせた。「之を皆ヤコブや他の人々に話して下さい」と云つて彼はそこを去り、他の所へ行つた。夜が明けて朝になつた時に、兵隊等はペテロが何うなつたものか、一向に合點が行かなかつた。彼等は如何程探しても其の効が無かつた。それでヘロデは自分で直接に番兵に聽質した後に、番兵共の死刑を命令した。

主なる教訓—**聖靈は私共に祈禱を促がし、又其の答を信ずるやう助け給ふ。**

勸告—聖靈は、ペテロの友人等になし給うた如くに、私共の心の中に、祈り度いとの願望を起さしめ給ふ。其の御助けにより、私共の弱き祈禱も、信仰を以て献げさへすれば、力あるものとなつて、其の答を得ることは、彼等の場合と同じことである。聖靈が私共の心に祈るべき事を教へ給ふ時には、其の答を得ることを信ずることが出來る。

第四十一課　第三復習日　（十月八日）

日常生活に聖靈の果（使徒行傳九〇卅一—四十二）

【諳誦聖句】御靈の果は愛、喜悅、平和、寛容、仁慈、善眞、忠信、柔和、節制なり（ガラテア書五〇廿二、廿三）

注意—第十六課の初頁にある注意書は今日の復習日にも當嵌まる。

▲質　問

（各質問の終の括弧内の數字は其の答を見出すべき學課の番號である）

一、イエス樣がお弟子等にこれから別れると仰しやつた時になさつた驚くべきお約束は何でしたか（卅）

二、疑ふトマスは何う云ふ風にして信ずるトマスに變りましたか（卅）

三、救主はお弟子等に何時までエルサレムで待てと仰せになりましたか（卅一）

四、イエス樣の昇天の時に何う云ふ事がありましたか（卅一）

五、聖靈の降る時、外側に何う云ふ徵が現れましたか（卅二）

六、ペンテコステの日に聖靈が與へられて後に何う云ふ事が起りましたか（卅二）

七、神殿の門に居た片輪の人は何うして歩けるやうになりましたか（卅三）

八、アナニヤとサッピラとは何う云ふ惡い事を相談して定めましたか（卅四）

九、神樣は彼等に對するお怒を、何うしてお示しになりましたか（卅四）

十、ペテロが「人に從はんよりは神に從ふべきなり」と云つたのは何時でしたか。何故でしたか（卅五）

十一、聖靈の力を下さればお金を上げますと云つたのは誰でしたか。彼は何と云つて叱られましたか（卅六）

十二、何故にピリポはサマリヤの救靈合戰から荒野に遣されたのですか（卅七）

十三、ピリポが聖靈に用ひられてエチオピヤ人を助けた樣子を話して下さい（卅七）

十四、コルネリヲは何う云ふ人でしたか。彼が祈つて居る時に、天使は何と云つて來ましたか（卅八）

十五、神樣は、ペテロにコルネリヲの家を訪問させる準備に、何をなさいましたか（卅八）

十六、神樣はコルネリヲの家で、救は凡ての人類に與へられると云ふ事を、何う云ふ風にしてお敎へになりましたか（卅九）

十七、ペテロが牢屋から助出された模樣を話して下さい（四十）

十八、彼の友人等は何をして其の夜を過ごして居りましたか。彼等はペテロの解放されたことを何うして知りましたか（四十）

▲青年科（十三歳以上）

一。ペテロはアイネアに遇ふ（卅一―卅五）

ペテロが其の病人に遇つたのは尋れて行つたからである。あなたは新しい町へ行つた時には何が尋れるか。獣樂の場所か、面白い見世物か、或は助と慰藉とを要して居る氣の毒な人々をであるか。私共は自分の尋れ求める者に出遇ふものである。

二。ドルカスの有用な生涯（卅六―卅九）

ドルカスは救世軍人が如何にあるべきかを示す好模範である。彼女の生活は（1）靈的であつた―イエス樣のお弟子であつた、（2）活動的であつた―多くの善事を行うた、（3）有用であつた―實際に何事か為成遂げた。

新約聖書に斯く屢々云つてある寡婦を助ける事（ヤコブ書一〇廿七）は必要であつた。何故と云ふに當時は、婦人は自分で生活費を儲けることが出來ず、パンを得る稼主がなくなつた時には寡婦は助けなき憐れなものであつた。今日でさへ屢々寡婦は隨分悲慘な寂しいものである。特にさう云ふ人々には柔しくも、出來る限りの助と同情とを與へよ。

三。ペテロは主の足跡を履む（四十―四十二）

ペテロはドルカスの屍の側に立つた時に、ヤイロの家に於ける主の行爲を本能的に繰返した（マタイ傳九（廿五）―皆を外に出し、それからドルカスに語り、次に手を取つて彼女を立たせた。唯一つの点が異つて居つた。キリストは死を支配し給ふ主であつた故、祈り給ふ必要はなかつたが、ペテロの唯一の力は祈禱にあつた。これなくしては此の奇蹟は不可能であつたらう。よく祈る人の生涯には必ず何かの奇蹟が行はれる。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―今日は聖靈の力によつて、方々の教會或は小隊が惠を受けたのみならず、ペテロがイエス樣の名によつて驚くべき奇蹟を行ふことが出來たのを見るのである。

一。働の成長（卅一）

ユダヤ、ガリラヤ、サマリヤ（救主の働き給うた地方）一帶は迫害も止み、救主に從ふ者が平安に日を過ごすやうになり、段々と基礎が堅まり、萬事好都合に運んで居つた。

三　聖靈の慰藉。彼等は平安であつたとは云へ、不活潑ではなかつた、新らしい改心者は追々に加はり、皆神樣を恐れつゝ働き、聖靈の奬勵と慰藉とを受けて居つた。

二。ルダにおけるペテロ（卅二―卅五）

ペテロが方々を巡廻して居る間に、ルダと云ふ小さな町の信者等の所にやつて來た。そこに居る間に彼は自分の方から出掛けて行つて病人等を尋ねた。そして中風の爲に八年間も寢床を離れることの出來ないで居たアイネアと云ふ男を訪問した。

アイネアは癒さる。ペテロが其の人に話をして居る時に、神様は彼に、アイネアが力なく床に臥して居るには及ばぬとの確信をお與へになつた。「アイネアよ」とペテロは云つた、「イエスキリスト様はあなたを直して下さいます。起きて床を片附けなさい。」直様アイネアは其の言葉に從うて起上り、ちやんと直つて丈夫になつた。ルダや、近所のサロンの町の人々は、此の不思議な變化には大いに驚き、其の結果主を信ずるやうになつた。

三。ヨツパに於けるペテロ（冊八—四十二）

ルダから十哩離れた所にヨツパの町があつた。そこにタビタ、即ちドルカスと云ふ人が住んで居つた。此の婦人は慈悲な親切な善い行爲をすることに身を献げて居つた。然るに病氣になつて死んだので、婦人等は其の死體を二階の室に置いてあつた。ペテロがルダに來て居ると聞いて、弟子等は二人の使者を送り、どうか直ぐに來て呉れるやうにと願うた。彼が着くや否や彼等は二階に案内した。そして貧乏な寡婦等は泣き乍ら、ドルカスが存命中に拵へて呉れた色々の着物等を彼に見せた。

ドルカスは甦らさる。ペテロは皆を外に出し、跪いて祈つた。それから死體に向いて「ドルカスよ、起きよ」と云つた。直ちに彼女は眼を開け、ペテロを見て起上つて坐つた。ペテロは手を貸し、彼女を立たせ、弟子等や寡婦等を呼んで、ドルカスを生かして彼等に返した。ヨツパの人々は皆此の不思議な奇蹟を聞き、多くの人々は主を信じて、その時から主に仕へる生涯を始めた。

主なる教訓—凡てのキリストの眞の僕の生涯には聖靈の果が見られる。

勸告—アイネアは聖靈の力によりて苦痛に堪へる忍耐と、癒されると云ふ强い信仰とを有つ事が出來たであらう。ドルカスの生涯には愛、親切、その他の德が見られた。ペテロの場合では、力ある信仰が病人を癒し、死人を甦らせることが出來た。私共銘々の心と生活とにも聖靈は喜んで美しい果を生らせて下さるのである、たゞ私共が强情や不從順によつて其の妨げをしてはならぬ。（悔改の座。）

第四編　ダビデ王

註―本編のダビデの學課は非常に面白く、實際的の教訓に滿ちて居り、その教訓は各組に大いに價値あるものとなすことが出來る。聖書は誠實の記錄であり、其の最偉大の聖徒たり英雄たる人物の罪や欠点を容赦なく述べて居る。

第四十一課　イスラエルの王ダビデ　（十月十五日）

―（サムエル後書二〇三―十一。三〇廿一―廿九。四〇五―十一（讀ますに話す）、五〇一―五）―

【讀誦聖句】　なんぢら神の御意を行ひて、約束のものを受けん爲に、必要なるは忍耐なり（ヘブル書十〇廿六）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲二〇五。「ヤベシギレアデ」はベテシヤンから十一哩。サウルの死體を救うて之に適當な扱をしたことは勇敢な剛毅な行爲である（サムエル前書廿一〇十一―十三）。サウルが幾年も前に自分等をお救ひ下さつたことに對して斯くして感謝の意を表したのである（サムエル前書十一章）。

△八。アブネルはサウルの司令長官であつた。ダビデのサウル王に對して有つ感化力は、絶えず陰謀の手段を以て破壞して居つたと思はれて居る。

▲五〇一。ダビデに詣れる支派の事に關する委細は歷代志畧上十二章に出て居る（特に廿三、廿二、廿三、廿八の數節を見よ）。

△三。「契約」とはサウル王がサムエルより受けた憲法の事である（サムエル前書十〇廿五）。王者も臣民も共に果たすべき義務が有る。

聖書の教訓

一。ダビデの第二の受養（二〇三―十一）

（イ）ユダのみの王。ダビデが短氣になり、吃き・又自分の正當の權利と思ふものを急いで取らうとしたならば、其の王國をも神の惠をも失つたであらう。貴君も自分の豫期して居つた程のものを受けなかつた時には、ダビデの事を思出して僅かを以て滿足しておいでなさい。さすれば神樣は適當な時に貴君の杯を滿たしめ給ふであらう。彼は最初自分の民又親族によりて書注がれたことに注意せよ。これは彼の品性に對する賞讃である。貴君を一番よく知つて居る人々が貴君の下に仕へることを欲しない時は惡い兆候である。

（ロ）彼の競爭者の戴冠。アブネルは自分が此の事をするのは善くないと知つて居つた、イシボセテは王に適しなかつたから。（若し時間があり、適當と思ふならば、此の二人が一人の婦人の事で爭つたことを見られよ（三〇六十一）。惡意を以て私共に反對する人々が仲間爭ひするのを神樣が屢々許し給ふ有樣を示す代表的の一例である。）二年の後にアブネルはダビデの側に移る決心をした。

二。ダビデの寛大な心（三〇廿一―廿九。四〇九―十一）

（イ）アブネルの殺害を悲ぶ。ダビデはアブネルを親切に扱ひ、彼を得て一友人として居つた（廿・廿一）、併しヨアブは秘ひに使者を送りて彼を呼んで、殺害して仕舞つた（廿七）。ダビデはヨアブ（自分の司令長官）に怒り、アブネルの爲に公けに吊ひをなし、お互の間の一生の誤解を太目に見て、彼の軍人としての立派な德をのみ語つた。

（ロ）イシボセテの仇を打つ。ダビデの高潔な品性が今尙ほ認められず。イシボセテを殺した二人の士官は彼より報賞と名譽とを豫期して居つた。併しダビデは假令王冠を得る爲であつても不義を嘉することはしない。

三。ダビデの第三の受養（五〇一―五）

（イ）國民の選擇。遂に全國民がダビデを神の選び給へる統治者として認め、彼の過去の奉仕を思出し、彼を王とする事に一致した。彼は冠を戴かされたのみならず、聖き膏を注がれ、神の御手よりの神聖なる委托として其の事業を受取つた。

（ロ）彼の永年の準備。ダビデの生涯を三章に分つ事が出來る。その各章は、受養を以て序言として居る。（1）王國を平ける前の困難、悲痛の學校に於ける訓練の時代、（2）ユダの小王國の王として居る間に將來の準備となるべき失望や面倒に遇つたが、而も追々と感化力の熟して來た時代、（3）更に大いなる機會のあるイスラエル全國の王たる時代。神樣は神樣の爲に大事業を爲さしめんとする人を訓練する爲には、如何なる骨折をも厭ひ給はぬ。「此處には自分の學ぶべき事

が何もない」、「これは自分の經驗する價値はない」、「全力を〳〵盡す樂の事でない」など考へることが慎まればならぬ。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―幾年も前に牧童であつたダビデがイスラエルの將來の王として預言者サムエルから膏を注がれたことを覺えてお在でせう。サウルの嫉妬の爲に彼は幾年間も絶えざる危險の中に居つた。サウル王も今は死んで居る。ダビデは何うしたでせうか。高壇からサムエル前書二〇三―十一を朗讀。

一。ダビデは一つの支派の王となる（二〇三―十一）

（イ）彼の第二の受膏。ダビデと其の部下とは遂に其の家族と共にヘブロンの市に住むことが出來るやうになつた。ユダの人々（彼と同族）は彼に膏を注いで王にした。併し此の時は彼等の支派丈けの王であつた。神樣は自分に十二の悉くの支派を約束して居給ふことを信じて居つたけれども、ダビデは一つの支派丈けならば斷ると云はなかつた。

（ロ）ヤベシ・ギレアデへの感謝。ダビデは、ヤベシ・ギレアデの人々がサウルの死體を恭しく

葬つたことを聞いた。特使を遣して彼等に感謝と祝福との言葉を送つた。彼等に強く且つ勇ましからんことを勸め、自分がユダの人々から王に選ばれたことを告げた。

（ハ）彼の競爭者の即位。更に一つの失望がダビデにやつて來た。サウルの司令官であつたアブネルはダビデが神樣に選ばれた王であると知りつゝ、サウルの殘つて居る息子に冠を戴かせてイスラエルの王に立てた。ダビデに約束された王國は、それ故、まだ彼のものとならなかつた。

二。ダビデの美しき寛大（三〇廿一―廿九。四〇九―十、〔五―八ん簡單に話す〕）

註―精しく聖書を讀む時は無いが、數年の後に丁度アブネルがダビデの側に移つた時に、ダビデの知らぬ間に彼の同意も經ずにアブネルと其の新しい王とは殺害された。

（イ）アブネルの死を吊ふ。アブネルが殺されたとの報知がダビデに屆いた。彼は直ちに公けの喪をふれ、自ら其の棺の後に從ひ。彼の爲に悲の歌を作り、また「今日一人の大將大人斃る、汝らこれを知らざるや。エホバは彼を殺した者を罰し給はん」と云つた。ダビデの人を赦す言行が周圍の凡ての者を心服せしめた。

(ロ)ダビデの競爭者は殺さる。新しい王のイシボセテはアブネルの死を聞いた時に、彼と其の部下とは、自分共の側は見込がないと思つた。彼の二人の士官はダビデの好意を得ようと決心した。そこでイシボセテの家に行つて見ると彼は午睡をして居つたので、彼を殺し、勝ち誇つた積りで其の首をダビデの許に持つて來た。

(ハ)其の惡事は報いらる。其の二人が彼の競爭者の首を提げてダビデに對面した時に、彼は怒つて「わが生命を諸の艱難の中に救ひ給ひしエホバは生く」と彼は云つた、「我はサウルの死の消息を我に齎した者の殺さるゝことを命じたのである。況や義人を其の家の床の上に殺した惡人を罰せざるべけんや。」そこで彼等に賞與どころではない、二人の殺人者の死刑にさるゝことを命令した。

三。ダビデはイスラエル全國の王となる(五〇一—五)

(イ)國民の證言。今は凡ての支派が悉くダビデの行爲に心服して、ヘブロンに居る彼の許にやつて來た。「私共は汝の兄弟でございます」と彼等は云つた、「前にサウルが國を治めてお

いでの時にも、汝は私共の軍勢を率ゐて出入なさいましたが、神樣は汝が私共の君主となるべきことをお約束になりました。」

(ロ)彼の第三の受膏。そこで代表者一同は神樣の御前にダビデと嚴かな契約を結び、全國の王として彼に膏を注いだ。

(ハ)彼の永き治世。斯くて子供の時に彼になされた神樣のお約束は遂に實現した。ダビデはユダによりて膏注がれて王となつた時には三十歳であつた。そして七年半の後にイスラエル全國の王として膏注がれ、三十三年間國を治めた。

主なる教訓—小さい機會を受入れて之を用ひる人々は、將來の更に大いなる機會の爲に自分を準備して居るのである。

勸告—若しダビデはユダの小王國に王たることを拒み、自分の親族丈けを導き祝福することは自分の全力を盡すに足らぬことであると思つたならば、他の支派の人々は決して來つて彼の指導を乞はなかつたであらう。もつと大きい事を任される筈だと思つて、或る地位、仕

事、又は義務を斷ることは神樣の御心を痛め、自分の靈魂を傷け、將來の奉仕に至る道を塞ぐことになる。

（例）ジャック君は或る商店の使小僧になつた、彼は何でも喜んでやつて居ると思つた。「僕は君のやうにそんなに我が身を路すことは何うしてもしない」と云つた。お友達はその町を去つたが、數年の後に凡ての事に失敗して再び歸つて來た、健康も駄目になつて居る。ジャック君を見ると、其の商店で重要な地位に昇されて居る。「何んと！君は運が善いれ、僕も君のやうな機會があつたならば！」と云つた。ジャック君が始めた時に、そんな小さな仕事をして居ると嘲笑つたことを忘れて居るのである。

第四十三課　ダビデ其の民を數ふ　（十月二十二日）

—（歴代志略上廿一〇一—廿七）—

註—ヨアブは司令長官であつた、そして契約の櫃はまだシオンに持つて來てなかつた（歴代志略上廿一（廿九）、それ故此の事がダビデの治世の初項に起つたことは明らかである。其の偉大なる地位を誇とし、其の軍勢の全部の力が何れ程か充分に判り度いと思ふことは、青年には誠に自然なことと思はれる。

【諳誦聖句】　なんぢらが先祖等より傳はりたる虛しき行狀より贖はれしは、銀か金のごとき朽つる物に由るにあらず、瑕なく汚點なき羔羊の如きキリストの貴き血に由ることを知ればなり（ペテロ前書一〇十八、十九）

▲青年科　（十三歳以上）

聖書の註解

△十八。「オルナン」（又はエラウナ）はエルサレムの厚住民なるエブス人の一人であつた。ダビデのエルサレル掠奪に當りて他の者の殺された時に、彼は逃れて、其の土地を保留し、神の僕となつたやうに見える。

△廿二。粗末な木製の機を牛に曳かせて麥を打つた。

△廿五。ダビデは此處では其の地所、即ち山にある畑全部の爲に金六百シケル（一万九百五十圓程）を拂つた。併し其の時には實際の打場と牛との爲に僅か「銀五十シケル」（九十圓程）しか與へなかつたのである（サムエル後書廿四〇廿四）。神樣が御臨在を顯す爲に特に此の場所を選び給うたと云ふ事をダビデが痛切に感じた時に此の多い方の金額を拂つたものであらう。

△廿六。丁度此の山で、イサクが死を免れて、彼の代りに牡山羊が犧牲にされたと信じられて居る。此處で又エルサレムが救はれて、その代りに牡牛が獻げられた。此の同じ山から見える場所に於て、罪の大いなる犧牲なるイエス樣が獻げられた、それによりて救は世界に及んだ。

聖書の教訓

一。**イスラエルは數へらる**（一—六）

（イ）狡猾なる誘惑者。　ダビデは此處では神樣に尊れなかつた。彼の精神はネブカデネザルの如であつた—「此の大いなるバビロンは我が大いなる力をもて建てし者ならずや。」目を醒まし且つ謙つて高慢と虛榮とを愼め、假令それが熱心の外套を着て來ろとも。

（ロ）忠告に意を止めず。　此處ではヨアブは忠義、尊敬、卒直の德を示して居る。彼は自分の義務を盡した、今は責任は最早自分のものでない。臣民として服從しなければならぬ。私共は善い忠告を尊ばればならぬ、假令それが自分の希望と一致しなくとも。ヨアブの幕僚は彼と同意見であつた。それ故ダビデは全軍を自分に反對せしめたのである（サムエル後書廿四〇四）。

（ハ）强情な我意。　神樣の警戒を脇に除けて我が儘を通さうと云ひ張つた時に彼の罪は始まつた。誘惑は罪でない。何を爲すべき善かを考へることも罪でない。神樣と眞心と善き人々の忠告とに背を向けて、知りつゝ不從順を選ぶ時に罪が入り來るのである。

二。**イスラエルは悔たる**（七—十七）

（イ）ダビデの悔改。　罪は何時も惡じある、但し其の時にはさう見えないかも知れぬ。ダビデは其の罪を知り承認し告白したけれども、其の結果はさう容易には取除かれなかつた。

（ロ）六ケ敷しき撰擇。罪は何時も私共を「大いなる難所」（十三節英譯）に連れ込み、困難と悲痛とを以て私共を圍むものである。假令神の罰を受くるとも、自分を神の御手の中に置け、そして取出すな。

（ハ）エルサレムの禍害。ヨアブが其の報告を齎してから三日經つとイスラエルの人目は七万減じた。併し神様は其の審判を注意して御覽になり、教訓を學んだ時には急いで「足れり」と云ひ給ふ。天使を見た人は少數の人のみであつた。他の人々は多分その危險を知らなかつたのであらう。その如く今日も多くの人々は罪の危險をも、神様の審判の聖き劍が自分の上に拔いて伸べられて居ることをも、悔改とイエス様の血を信ずる信仰とにはまらねば之を納に取めることが出來ないと云ふことをも自覺せずに生きて居る。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―今日はダビデの國民が彼の愚かな高慢心の爲に苦しんだ事と神様の情ぶかき御赦との事を習ふのである。高壇から歴代志略上廿一〇一―二六を朗讀。

一。イスラエルは數へらる（一―六）

二。イスラエルは助けらる（十八―廿七）

（イ）オルナンより王への献物（サムエル後書廿四〇廿三）。甘い儲けをする機會だと思はないで、彼は「我が神と王と國民とに仕へる機會だ」と考へた。さう云ふ人物は國民の眞の富である。

（ロ）ダビデ自身の献物。金の掛からぬ献物をすることを慎め。克己週間や其の他の特別な時に、他人から集めることを以て滿足せず、自分の献金をも献げよ。

（ハ）神の嘉納。天から火が降つて供物を燒盡した。ことはダビデの罪と愚とが赦され、人民が助けられたとの證據であつた。彼の供へた犧牲は尙ほ後に供へらるべき大いなる犧牲の雛形であつた。

（イ）サタンの誘惑。今やダビデがイスラエルの王となつて居るところへ、惡魔は來つて彼の耳に「何故に汝の民を數へないか、汝が何れ程多くの軍勢を有つて居るかを調べて見よ」と囁いた。

（ロ）ヨアブの警戒。王は榮榮心と高慢心とをそゝられて司令長官なるヨアブに國勢調査を命令した。ヨアブは云つた、「願はくは神様が汝の民を百倍になし給へ。併し何故に之を數へることを望み給ふのですか。これを爲さることはお間違で御座います」と。

（ハ）ダビデの強情。併しダビデは云ひ張つた。それでヨアブは隨分自分の意志に逆つたことであるが服從した。そして遂に其の統計表を携へてエルサレムに歸つて來た。イスラエルには凡十萬の軍人と、ユダには五十萬人（サムエル後書廿四〇九）。

三。イスラエルは撃たる（七―十七）

（イ）ダビデの悔改。統計表が自分の前に置かれた時に、王は突然に其の罪を悟り、「我この事をなして大いに罪を犯せり、僕の罪を赦し給へ」と神様に叫んだ。

(ロ)神様の言葉。翌朝ガテと云ふ預言者が來て、ダビデに神様よりのお言葉を告げた。彼は三つの罰の中の一つを選ばねばならぬことになつた―三年間の飢饉か、三ケ月間敵に征服さるゝか、三日間の流行病か。ダビデは大いに當惑してガテに云つた「我は人の手に陷らんよりも寧ろ神の御手に陷らん。神流行病を降し給へ」と。

(ハ)流行病の天使。そこで恐しい病氣が民間に流行し始め、間もなく七萬人斃れた。滅す天使がエルサレムにも着いたが、神様は彼に「足れり、今汝の手を止めよ」と宣うた。そして天使は止まつた。ダビデは其の天使が抜身の劍を手に取つて地と天との間に立つて居るのを見た時に、彼と共に居る人々も面を地に附けて平伏した。「惡しき事をなしたる者は我なり」とダビデは叫んだ、「されど是等の羊は何をなしゝや。彼等は罪なし。我と我が家族とを罰し給へ。たゞ人民を病に罹らしめ給ふ勿れ。」

三。イスラエルは助けらる(十八―廿七)

(イ)オルナンの献物。再びガテはダビデに來り、オルナンの打場に神様の祭壇を築けと命じた。オルナンも亦小麥を打ち乍ら彼の天使を見て、彼も息子等も逃げ隱れたのであつた。王が來着するとオルナンは出來り、その前に低く首を垂れた。神様が流行病を止めて下さるやうに祭壇を築く爲に、打場を買ひ度いとダビデは彼に話した。「何うかそれをお取り下さいませ」と彼は答へた、「善しと思召す通りにして下さいませ。私は喜んで犧牲の牛をも薪をも献上致します。」

(ロ)ダビデの犧牲。「それはいかん」とダビデは云つた「必ず相當の値段を拂つて買はう。私は他の人から貰つた無代で得たものを神様に献げることをしない。」そこでダビデは地面と牛とを買ひ、祭壇を築き、犧牲を其の上に置いて、神様がそれを受入れて彼の罪を赦し給ふやうにと祈つた。

(ハ)神様の嘉納。彼の祈禱に答へて、聖き火が天より降つて犧牲を燒いて仕舞つた。同時に神様は滅す天使に命令して劍を鞘に收めさせ給うた。そこで流行病は止まり、ダビデの罪は赦された。併し人民が彼の惡い行爲の爲に恐ろしい苦痛を受けねばならなかつたのは殘念

であつた。

主なる教訓―イエス様の犠牲と死とによりてのみ、私共の罪は赦されることが出來るのである。

勸告―ダビデの供物の爲に神様は彼の罪を赦して流行病を止めて下さつた。其の供物はイエス様を指したのである。イエス様が罪の爲に、大いなる犠牲となつて下さつた爲に、私共はたゞ其のお蔭によりてのみ罪の赦を受ける事が出來る。私共が「イエス様の血によりて救ひ給へ」と祈り、「イエス様の御名によりて」と云ふのは、イエス様が御自分を供物にして神様が私共を赦し給ふことの出來る道をお造りになつたからである。たゞ救の道を知つた丈けで滿足せず、自分の爲に救をお求めなさい。

(例)年若き羅馬の軍人が謀叛の企てを發見せられ、裁判官が丁度死刑を宣告した時に、犯人の兄が進み出でた。自分の兄弟の死刑の當然なる事を認めたが―斯う云つた「私の爲に―私が國の爲に受けた損失の爲に、彼を赦して下さいませんか」と。そして彼は戰爭の時に切り落された兩腕の殘つて居る部分を擧げて見せた。考へた後に裁判官は犯人に云つた「私は汝を放免する、併しただ彼の爲である。汝の生命は汝の兄のお蔭で助かつた事を記憶せよ」と。

第四十四課　契約の箱をシオンへ　(十月二十九日)

―(サムエル後書六〇一―廿三)―

【組長諸氏へ】　此は神様に關係のある事物に敬意を示す事が大切であると云ふ事を教へる必要な貴い教訓である。不敬の結果を有つ人々は必ずしも直ちに罰せられるとは限らぬけれども、早晩自分が神様の惠から切離されて居ることを發見するであらう。

【諳誦聖句】　神はきよきもの、公會のなかにて畏むべきものなり。その四周にあるすべての者にまさりて懼るべきものなり(詩篇八十九〇七)

▲青　年　科　(十三歳以上)

聖書の註解

△一。「コバアレ」又の名は「キリヤテ、ヤリム」はエルサレムから九哩ほど。契約の箱はペリシテ人が返附して以來八十年程の間、此處に置かれて居つた(サムエル前書六〇十九―廿一)。

△三。以前に一度ペリシテ人が契約の箱を新しい車に載せたことがあつた(サムエル前書六〇七)。併し彼等の其の行爲は無智より出たのであつたが、神の民は不注意な粗相からしたのである。

△十、十一。海山の會衆は愛ひつゝ、然しその爲に以前よりも智くなり、又神様の偉大なることを一層深く悟りつゝ家に歸つた。オベデエドムの家には平安と惠とが豊かにあつた。其の名は服從と云ふ意味である。

△十五、十七。詩篇第廿四篇は此の行列の進行中に歌つたものと思はれて居る。シオンの山の周圍を石垣が取卷いて居つた。其の門は契約の箱を迎へ入れる爲に開き、契約の箱はダビデの備へた天幕の中に置かれた。

一。ダビデの悲しき經驗(一―十一)

(イ)ダビデの大集會。ダビデが凡ての民々彼と共に禮拜に加はらせ度いと思つたのは正しいことである。併し此の事に就いて神樣にお尋ねすることを忘つた。大丈夫だらうと云ふのが甚だ危險な精神である。

(ロ)神の命令を等閑にす。行爲そのものが善くても、其の方法を誤らぬやう慎め。神樣の御用に關係のある事は何でも皆最も大切である。用心せぬと聖靈を愛ひしめ易い。何の集會でも神樣が惠を下さることが「當り前の事」ではない。

(ハ)恐ろしき結果。ウザの役目は、注意して正しい方法で契約の箱が運ばれるやうに監督する事であつて(民數紀略四〇七五)、自分の手で觸へたりすることでなかつたのである。私共の役目は神樣に服從し信賴することである。神樣は御自分の事業を保護し給ふ。惡しき行爲によりて神樣の側を少しでも手傳ふことが出來ると考へるのは致命的の間違である。

(ニ)オベデ、エドムは惠まれた。ウザの罪によりて契約の箱は彼に死を齎した。オベデ、エドムの服從によりて契約の箱は彼に福祉を齎した。併し契約の箱は同じである。その如く紅海の通路もイスラエル人には救となり、エジプト人には死となつた(ヘブル書十一〇廿九)。

二。契約の箱を聖壇に安置(十一—廿三)

(イ)ダビデは教訓を學ぶ。「神の櫃を昇上れり」(歴代志略上十五〇二、十三)。最早車を用ひない。犧牲を供へて、彼等は神樣の御臨在を受くる價値のなきものと感じて居ることを示した。則ちは余程精神が異つて居る。私共は絶えず注意して神樣の惠に對して崇敬と驚異の心を失はぬやうにする必要がある。

(ロ)ミカルの高慢心に觸る。ミカルは契約の箱に手を觸れなかつたが、たゞ心の中で夫の之に對する態度を輕蔑した丈けである、「そんな大騒ぎをする必要はない」と。不敬虔になるには、あらはに神を嘗し又は嘲けるには及ばぬ。神の求め給ふものは唇や手丈けでなく、心の敬虔である。

(ハ)ダビデは民と共に喜ぶ。ダビデの神に對する喜びと愛とは言葉にも聲にも行爲にも表れた。心は尚ほ「牧童」である。貴君も神を愛するならば、他の人がその爲に自分を卑しめようと、さう云ふ。そこには頓着なく、凡て爲す事云ふ事にそれを表すであらう。ダビデは其の民に此の世の祝福をも共に受けさせ度いと思つた。それ故彼等に食物を與へた。

(ニ)ダビデの家庭は妻の爲に悲しくなる。これは堪へ難い。祝福を分たうとて家に歸つて來ると、針で刺すやうな非難と嘲弄とを以て迎へられた。彼の力强き靜かな答と其の忍耐とを見よ。彼は云へ、家庭の平和の爲にと考へ直したり、其の行爲を決して繰返さぬと約束したりなどしない。ミカル

の方が一何時も斯う云ふ場合にはさうであるが一結局は敗(北者であつたことに注意せよ。

▲少年科(二八年生以下三年生迄)

緒言。今やダビデは國内を統一し、エルサレムを占領して之を首府と定めた。そこで神樣を禮拜することを確立し度いと熱望した。高壇からサムエル後書六〇一—七を朗讀。

一。ダビデの第一回の試は失敗(一—十一)

(イ)ダビデは民を集む。ダビデは國中より三千人の主なる人々を集めて、エルサレムの一部分なるシオンの山と云ふダビデの邑に神樣の聖き契約の箱を移し度いとの考を話した。そこには天幕即ち幕屋が其の爲に用意されてあつた。併しダビデは此の事に就いては神樣の御旨を御尋ねすることを忘れた。

(ロ)神樣の命令を等閑にす。モーセとアロンとは神樣から契約の箱は何時でも綺麗な縫箱のした棺を被せて、樣で人の肩に擔がせて運ぶべきものだと告げられて居つた。然るにダビデと其の民とは契約の箱を新しい車に載せて牛に曳かせた。それから一同は其の側を歩みつ

つ樂しい音樂を奏した—琴や皷と色々の樂器を用ひた。

（ハ）不從順な人は殺さる。ところが道が凸凹で、牛は躓く、車は搖れる。そこで祭司の一人—ウザ—が、搖れないやうにと思つて契約の箱を手で抑へた。忽ち彼は死んで倒れた。ダビデは大いに心を惱まし、今度は契約の箱をシオンに持つて行くことを恐れ、其の日の喜びが陰鬱になつて仕舞つた。

註—契約の箱は眞に神聖であるから、之に關する神の命令を注意して守らないと、配偶でなく危險となつた。電氣と電流の運じて居る針金との事を話して說明して下さい。

（二）從順な人は惠まる。オベデ・エドムと云ふ善い人が其の近くに住んで居つた。ダビデは祭司等に云ひ附けて契約の箱を彼の家に運ばせて、そこに置いた。契約の箱が彼の屋根の下に藏めてある爲に、オベデ・エドムは神樣から惠まれた。

二。ダビデの第二回の試は成功（十二—廿三）

（イ）神樣の命令を守る。三ヶ月の後にダビデは神樣がオベデ・エドムを惠み給ふと聞いて、自分が神樣の御命令を等閑にしたのが惡かつたと云ふ事を今にして悟つた。そこで祭司等を

呼び、萬事正確にモーセの命令通りするやうにと告げた（歷代志略上十五〇十二—十五）。此の度は契約の箱はレビ人が恭しく運び、出發に先立つてダビデは犧牲を供へた。

（ロ）神樣の箱を尊ぶ。ダビデは其の頃の其の地の風俗に從ひ、白い衣を着て、神樣の御前に喜び躍つた。そして民は歌を歌ひ樂器を鳴らしつゝ契約の箱をミオンに運んだ。ダビデの妻のミカルは窓から眺めて居つたが、夫が躍り且つ喜ぶのを見て、腹を立てた。

（ハ）ダビデの民も喜ぶ。契約の箱が聖き天幕の中に藏められた時に、ダビデは犧牲を供へ、神樣の御名によつて人民に祝福の言葉を與へた。それから男にも女にも一人々々にパンと肉と葡萄とを與へた。それで一同は喜悅と感謝とを以て家に歸つた。

（二）ダビデの家庭は悲しくなる。王もそこで自分の家族に惠を與へようとて家に歸つた。然るにミカルは彼を迎へて、針で刺すやうな苦い言葉を以てダビデを罵り、往來を躍り歩いて馬鹿氣た眞似をしたと云つた。ダビデは重々しく、自分は自分を選んでイスラエルの王にして下さつた神樣へ、感謝を獻げる爲にさうしたのであると彼女に告げた。ミカルが其の立腹

を悔改めたと云ふ事が聖書の中に見えて居ない。それ故神樣は遂に彼女に自分の生みの子供をお授けになることが出來なかつた。

主なる教訓！　神樣に關係のある事は何でも敬の心を以てしなければならぬ。

勸告―ダビデと其の民の如くに、正しい事を誤つた方法で行はぬやうに愼みなさい。集會に來る、神樣の事を話し、讀み、歌ふ、神樣に祈る、皆正しい事である。併しこれを不注意や無考ですることは惡い。神樣は誠に偉大なる聖きお方である故、凡て神樣に關係のある事は神聖である―神樣の家、神樣の御名、聖書、又罪人が神樣にお會ひ申す悔改の座など。神樣は神聖な物を粗相にする凡ての人を、ウザの如くに、罰し給ふ。謙遜と熱心と考とを用ひて神樣の物をお扱ひなさい。

（例）アンニーさんは集會に入る時に跪いて神樣の惠を祈り、考へ乍ら歌ひ、その時々に目を閉ぢて祈り、聖書を讀む時やお話の時に氣を附けて聽き、次の一週間の戰爭の爲に大いに助を受けた。此の頃の事を、よく見て居た一人の年若き婦人が「あの娘は熱心だ、みの人のやうになり度い、今神樣に心を献げませう」と云つた。同じ集會でミーニーさんが新禱會の時にキヨロ〳〵と人を見廻し、お菓子を食べ、隣の人と囁いたり、笑つたりして、目も考も方々をうろつき廻るが僅にして悔まなかつた。惠を受けず、氣持が惡い。それを見て居た餘所の人が「あれが救世軍の人の行儀ならば、私は二度と此處へは來ない」と云つた。

いやな氣持をしながら集會を去つた。

第四十五課　第四決心日（十一月五日）

軍人

（エペソ書六〇十―十八）

一　人

【詩誦聖句】この故に神の武具を執れ、汝ら惡しき日に遭ひて仇に立ちむかひ、凡ての事を成就して立ち得んためなり（エペソ書六〇十三）

【司會者へ】此の決心日を面白き決心日となす爲に、前以て色々の武具を用意し（ボール紙で造り色を塗る）、學課の進むに連れて、一人の裝束を着た男の子に一つ〳〵着せ、斯くして學課が、耳のみならず目からも入るやうにして下さい。

▲青年科（十三歳以上）

パウロのモデル―パウロは何時も自分の側には一人の羅馬の軍人が繫ぎ附けられて居るので、獨りになる時のない事を護立たしく思ふやうな誘惑を受けたことも屢々あつたこと、即ち軍人を研究し、之をモデルとして一つの實物教訓を編み出した。パウロは鎖に繫がれて居ても其の心と精神とは自由であつた。彼は吃かすに其の足枷を救主の御手より受取つた（ピリピ書一〇十二、十三）。

△十一。人生は、何人も此の天來の武具なくして勝利を得ることの出來ぬ戰場である。私共の義務は之を着、決して脫がぬことである。武具を調べて見たり、いぢつたり、それから下に疲かして置いたりして、それを着ずに戰ひに出るのでは何の役にも立たぬ。「着た」のではなくば「役に立たぬ」。

△十五。此の鞋を穿いて利己的になるのではない、神樣の如くに神樣の御用の爲に地の極にまで行く用意をするのである。

△十六。誘惑の來く居る時に自覺しつゝ自分を救主の御前に置いて、主よ惡魔は私に斯く〳〵甲します、併し私は自分の感情の如何に拘らずあなたを信じます。あなたは私の救主で御座ます、あなたは今私と共に居給ひます、あなたの血が「今」私を潔めます」と云ふならば、それは實際に信仰の盾を用ひて居るのである。さうすれば私共に向つて惡魔の射る火矢は悉く消えて仕舞ふであらう。

註—救主御自身も絶えず此の武具を着又用ひ給うた。若し望みならば主が御自分の經驗に於て、それぞれの武具をお用ひになつた場合を組長等に云はせるやうにするも宜い。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—歐洲の大戰爭に參加した各國の軍人はそれ〴〵異つた色の軍服を着けて居つた。或者は頭を保護する爲に冑のやうな金屬製の帽子を被つて居つた。併し皆鐵砲を以て武裝し、彈藥を持つて居つた。

羅馬の昔には爆裂彈などは知られて居なかつた。戰爭は今よりも接戰が多く、從つて一人一人の軍人は武具を以て身を鎧ふ必要があつた。パウロが牢に入れられ、交代に番に來る羅馬の軍人の身體に何時も鎖で繫がれて居つた時に、イエスキリスト樣の軍人等の身に着けねばならぬ武具の事に就いて私共の爲に一つの立派な譬又は實物教訓を考へ出して下さつた。羅馬の武具は今は時勢遲れで、繪やモデルにしか見られない。併し靈の武具に至つては、パ

ウロがエペソの友人等に手紙を書いた其の時と同じ程に今日も大切である。武具を用意するのは軍人の仕事ではない—政府がそれをする—併し彼の義務は絶えず之を着、又之を使用することである。これから此の武具を一つ〳〵見て行きませう。

一。帶（十四）。第一は羅馬の「ゾーナ」、即ち廣いベルトである（取上げて見せる）。これは軍人の胸當の下を締め、全體をきちんとさせる（此の時例の男の子に上衣を脱がせ、ヅボンの上にベルトを附けてやる）。

勸告—私共の帶は誠である。これなしには誰も惡魔と戰ふことが出來ぬ。惡魔は嘘の親玉である。此の帶は他の武具の爲に直きに隱れて仕舞ふが、どうしてもなくてならぬ。さうでないと、他の物も皆役に立たなくなる。先づ神樣から誠の帶を結ばせて戴かない者は、神の武具を着ることが出來ると思つてはならぬ。

二。胸當（十四）。これは首の下から帶まで届き、胸と心臟とを保護する—羅馬の武具の中では甚だ大切な部分である。（取上げて見せてから附けてやる。）

勸告―神様が其の軍人等に賜ふ胸當は正義の胸當である。正しい事を行ひ、語り、正しい事の爲に戰ひ、自分の心を正しく保護し、心を何時も正しく清く保つことである。

三。靴（十五）。これは重い羅馬の履物で、辷らないやうに、そして足をしつかりと踏むことの出來るやうに、裏に釘が打つてあつた。

勸告―私共の靴は平和の福音を持つて行く爲の準備、即ち用意である。「平和の靴」を穿いて行けば、私共の足音は何時でも歡迎される（イザヤ書五十二〇七）。道又は階段を踏む私共の足音を聞いて、家に居る人々は「何と嬉しい、彼の人がいらつしやる」と云ふであらう。或る人々の足音は雷と面倒とを思出させる。

四。盾（十六）。これは軍人そのものをも武具をも蔽ふに足る丈けの大きさで、形は長方形又は卵形であつた。昔は火矢や、先端に燃え易い物を附けた重い飛道具を投げた。それで之を受けて防ぐ爲に盾が必要であつた。

勸告―私共の盾は信仰である。惡魔は私共の愛と熱心とを破壞し、失望させて、戰爭を止めさせようとて絶えず火矢を投げて居る。併し私共の盾は、用ひさへすれば、私共を安全に守るに足る丈けに大きいものである。

五。冑（十七）。（見せて着せる。）羅馬時代のみでなく、今日の軍人も特別に頭を保護する物が必要である。

勸告―此の冑は救の智識、即ち自分が神の所屬であると知ることである。此の智識と記憶とは私共を惡しき考より守り、惡魔の攻擊の最中にも落着いた勇ましい心を有つて居ることが出來る、惡魔が毒矢を送つて私共の頭の中に投込み、私共の考を汚さうとする時に、救の冑が之を防ぎ止めるのである。

六。劍（十七）。（見せる。）これは陸軍士官の用ひるサーベルのやうな長いものでなく、兵隊が腰に下げて居る劍のやうで、又は鋭利であつた。

勸告―私共の劍は神様の聖言である。何時も磨ぎすまして用意して置き、有らゆる誘惑の場合に之を用ひねばならぬ。イエス様は唯お一人で荒野で惡魔と戰うた時に此の劍をお使ひ

になつた。神様御自身の御言葉を引いては聖書に然う「錄され」てゐると宣うた、すると惡魔は逃げざるを得なかつた。聖書の中には小さな劍―小さい手でも使へるやうな短かい聖句―が澤山ある。

七。軍人の義務（十八）。そこで羅馬の軍人は武裝が出來たならば、その任務にある時には、何うしなければならぬでせうか。眠つたり惰けたりでなく、目を覺して居るのである。其の短かい軍人らしい命令を御覽なさい。「武具を執れ」（此の軍人はこれを實行した）。誠を帶として「立て」（氣を附けの姿勢）。そして最後には「常に祈れ」、「目を覺せ」である。

勸告―私共には何時も手近に助を得る方法がある―羅馬の軍人は之に相當する物を何も有たなかつたが―即ち私共の大將は何時でも私共の叫びを聞いて下さらうとて待つて居給ふことである。

主なる教訓―私共は銘々、神様の備へて下さつた靈魂の武具を着、また用ひねばならぬ。

勸告―軍人は如何に武裝するかを習つた。併しそれ丈けでは足りない。集會に居る者が一

人も殘らず靈の武具を身に附ける必要がある。（司會者は急いで話の要點を摘録し、子供等が誠の帶、正義の胸當等を着け、又は用ひて居るか尋ねられよ。）誰か武具の一部を脱ぎ棄てながら、そんな物が無くとも立派にやつて除ける事が出來ると思つて居る人がありますか。或は、信仰の盾を持つて居る事を止め、平和の靴を脱き棄てゝ居りますか。今日の午後お互に救主の御側に來り、今一度お願して天の武具を授けて戴き、それを毎日用ひ、又神様の力によつて「目を覺し且つ祈る」との出來るやうに助けて戴きませう。或はまだ一度もイエス様を自分の大將として受入れたことの無い人もあらう。若しさうならば今日神様の軍隊に加はり神様の戰爭を戰ふ軍人とお成りなさい。（改悔の座。）

第四十六課　ダビデの永久の王位（十一月十二日）

―（サムエル後書七〇―八、十二―廿二、廿九。八〇十三―十八（青年科は歷代志略上廿八〇十一―十九參照）―

【誦聖句】われ一事をエホバにこへり、我これをもとむ。われエホバの美しきを仰ぎ、その宮をみんがために、わが

世にあらん限りはエホバの家にすまんとこそ願ふなれ（詩篇廿七〇四）

▲青　年　科（十三歳以上）

聖書の註解

▲七〇十二。父の即位の後に生れた最年上の息子が王位を繼ぐのが當時の習慣であつた。神様は今は此の事を脇に除け給うた。ダビデの後繼者は未だ生れて居なかつた。

△十三。ダビデが神の家を建て、ならなかつた理由、（1）神殿―神の教會の型―は軍人の手によつて建てらるべきでなかつた（歴代志畧上廿二〇八）。（2）ダビデには然う云ふ事をする時間が無かつた。始終戰爭の爲に外出がちであつた。（3）ダビデが平和を齎したならば、その時にはソロモンが平和の事業をなすことが出來る。（4）必要なる寡大の材料を用意する爲に其の爲し得るところをさせて戴くのであつた。

△十三。此の節は二つの約束に分たれる。「彼わが名のために家を建ん」はソロモンによりて成就された。「我永く其國の位を堅うせん」はダビデの子なるキリストに於て成就された―彼は全世界の靈の神殿を建て給ふのである（エペソ書二〇廿―廿二）。

▲八〇十四。此等の遠き國々に於ける支配力を維持する爲にダビデは主なる町々に守備隊を置いた（六節を見よ）。古代の記念碑にある銘刻を見ると、丁度此の時にはエジプトやバビロンの大國も力が弱り、遠征軍を送出すことを止めて居つた。斯く神様の言葉は古代の遺物の證言を裏書して居る。

聖書の教訓

一。ダビデの偉大なる願望（七〇一―八）

（イ）ナタンに嘉せらる。神様の御爲に大事を願ひ、又計畫するのは正しい事であるが、其の善き願望を悉く自分が成就するものとは限らぬ。私共は自分でそれを實行するのでも、他の人が自分の代りにするのを助けるのでも、何れでも氣持よくしなければならぬ。

（ロ）神に許されず。預言者と雖も外見によつて判斷すれば間違をする。ダビデは、神の御臨在そのものは、御臨在を示し給ふ場所なる天幕よりも大切だと云ふことを長まつて學ぶ必要があつた。

二。ダビデの永久の王位（十二―廿二、時間があれば廿九迄）

（イ）神の約束の偉大。若しダビデが世界の救主なるイエスキリストが「ダビデの子孫」であるべき事を實感することが出來たならば、彼は殆ど堪へ切れない程の愛と感謝とを感じたであらう。世俗は多くの事を約束する如くに見えて、少しゝか與へない。神様の約束の言葉は、其の賜物の豊かなるに比較すれば小さい。

（ロ）ダビデの信仰に充てる感謝。眞に神様を愛する人は、何時になつても神様の惠を讃嘆することを止めず、得ると否と、爲すと否と、生くると否とに拘らず、神様の最善と見給ふところを以て滿足する。

三。ダビデの幸福なる政治（八〇十三―十八）

（イ）其の名は尊ばる。「歸りて名譽を得たり」。名譽を得る方法は事を成遂ぐるにある。或る人々は戰爭に出掛ける時に名譽を得んと欲する。勝利者となつて歸るまで待て、その時には求めずとも來るであらう（ピリピ書三〇五―十一）。

▲少　年　科（六年生以下三年生迄）

一緒言―ダビデは今や自分の立派な宮殿がシオンの山に有り、聖き契約の箱は近傍の天幕の中にあり、エルサレムの都は彼の周圍に發展しつゝあつた。今日は彼の品性の中に一つの新

（ロ）其の政治は正し。ダビデは其の國に對して能ふ限り最上の奉仕を致した。彼は適材を適所に置いた。組織と規律となしには平和も進歩も得られない。平和を維持せんと努力する人々の加勢をお互に致しませう。

註（歴代志略上廿八〇十九）―若しダビデが、丁度自分の願の通りの仕事をすることの出來ない時に、或る人々がする如くであつたならば―不機嫌で、不平を云ひ、不愉快に感ずる―彼は神様が彼に示さうと思召しになつた其の驚くべき企圖と計畫とを理解し得るやうな靈魂の狀態に居ることが到底出來なかつたであらう。

自分で仕事をやつて除けるよりも、ダビデの如くに、他の人にそれをさせる手傳をする方が、更に多くの惠を要することが屢々ある。神様が今此の事業を爲すことを望み給ふかを確めるのみでなく、神様がそれを爲させようと思召し給ふ實際の人物は自分であるかを確めねばならぬ。

しい德を見るのである。高壇からサムエル後書七〇一—八を朗讀。

一。ダビデの大きな願望（七〇一—八）

（イ）ナタンに話す。ダビデの敵は平げられたので、彼は今は休んで考へる餘裕があつた。或日家の中で坐つて居る時、自分には氣持の善い家があるのに、神樣の契約の箱が天幕の中に置かれてあることを思出し、神樣の爲に立派な神殿を建てることを熱望した。王は、何時も顧問として居つた預言者ナタンに、其の志望を話した。

（ロ）ナタンに贊成さる。ナタンはそれは善い計畫だと思つた。「エホバ汝と共に在せば、往きて凡て汝の心にあるところを爲せ」と云つた。ダビデはナタンの言葉を聞いて喜んだ。そして預言者は家に歸つた。

（ハ）神樣に拒絶さる。然るに其の夜神樣はナタンにお語りになり。ダビデが此の神殿を建つべきでないと仰しやつた。イスラエルの子孫をエジプトより連れ出し給うた時から神樣が絶えず彼等と偕に在し給うたのは家の中でなく、天幕即ち幕屋の中に於てゞあつた。

註—歷代志略上廿八〇二、三には神樣が、ダビデが此の神殿を建てることを、拒み給うた一つの理由が見える。即ち彼の事業は神樣の敵と戰つて之を滅すことであつたからである。彼は戰爭の人であつた、神殿は平和の人によりて建てらるべきものであつた。

二。ダビデの動きなき王位（十二、廿二、廿九）

（イ）彼は神樣の約束を聽く。ところがナタンはダビデに、まだ生れて居らぬ彼の息子が彼の死んだ後に神殿を建つべき事、又神樣が其の息子に對して父となり給ふと約束し給うた事を告げることになつた。若し其の息子が罪を犯せば罰せられるのであつた。併し主は「されど我の恩惠は彼よりは離るゝことあらじ」と宣うた。尙ほ神樣は、ダビデの家と其の王國とは永久に續き、其の王位は亡ぶることがないとお約束になつた。

（ロ）彼は神樣の惠の讃美す。ナタンの言葉を聽いた後に、ダビデは神樣と語る爲に聖き天幕に入つた。彼は神樣が何故に拒絶なさつたかを尋ねなかつた。反對に謙遜を以て過去に於て自分と家族との爲になし給うた凡ての事に對し、又將來に向つて與へ給うた驚くべき御約束に對して、彼は神樣に感謝した。

(ハ)彼は神様の忠實に信賴す。次にダビデは、神様が彼の家族を惠み、その子々孫々が永く神様に仕へる事を續けるやうにと祈つた。即ち神様が永久に彼の上に惠を垂れ給ふと約束してお出でになつた通りである。

三。ダビデの幸福な治世(八〇十三—十八)

(イ)彼の名は尊ばる。ダビデの名聲は今や遠く且つ廣く知られた。彼が力ある强敵と戰ひ已が生命を堵して戰つて歸つて來ると、凡ての者が其の勇氣を喜び祝うた。

(ロ)守備隊を以て王國を固む。ダビデは得た物を失はぬ積りであつた。それ故法律を保護し、叛逆を防ぐ爲に、主要なる凡ての町々に兵隊を置いた。

(ハ)善政を以て國民を治む。イスラエル全國の王たるダビデは其の民が公平と親切とを以て扱はれる事を望んだ。彼は其の王國に秩序ある政治が行はれるやうに主要なる人物にはそれ〴〵の特別な仕事を授けた。例へば司令長官ヨアブなどの如く、然う云ふ人物の名前が今日の私共にまで傳へられて居る。

主なる教訓—正當な事でも、神様がその方が適當と認めて熊と下さらぬ時に、快よく服從する人は、神様の善しと見給ふ方法によりて然るべき時に、更に大いなる惠を受ける。

勸告—若しダビデは神殿を建てる事を神様から許されなかつた時に、拗ねたり、ぢれたりしたならば、それによつて自分が永久の王國の建設者たるに適しない事を示すのであつた。メシヤたるイエス様御自身が彼の一子孫たり、ダビデの子であり給ふと云ふ事は、世界最大の建築物にも優りて偉大なる名譽をダビデに齎し、大いなる奉仕を世界に致す所以であつた。自分では正當で道理に協つて居ると思ふ事を神様が自分に下さらぬ時には、宜しく御旨を受入れ、適當と見給ふまゝに自分を用ひ又惠み給ふやう神様にお任せすべきである。

第四十七課　ダビデの恐るべき罪（十一月十九日）

—(サムエル後書十一〇一—三〇話す)、十四—十七、廿二—廿七。十二〇一—十、(十二節を話す)—

注意—此の學課では、聖書の讀むべき部分は單に參考の爲に定めたのみに過ぎない。各組長は受持の生徒の年齢や神等の上に有つて居る支配力の程度に從ひ適當に選ばねばならぬ。但し學課となるべき聖書の部分は右に掲げてある所である。

【諺語聖句】自ら欺くな、神は侮るべき者にあらず。人の播く所はその刈る所とならん（ガラテヤ書六〇七）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲十一〇一。冬にならぬ前に戰爭が終るやうに、春に戰爭を始めるのが當時の習慣であつた。

△三。ウリヤはイスラエル人でなく、生れはヘテ人であつた。併しダビデの最も勇敢なる軍人の仲間であつた—彼の勇士の一人であつた（サムエル後書廿三〇廿九）。

▲十二〇三。此の鹿の仔、山羊、羔などを愛することは今日でも東洋では甚だ普通な事である。

△四。これは次の事を示して居る、（1）野獸な貪慾。貧者が富者から貪る事は惡い、富者が貧者から貪るのは更に惡い。（2）強盜。（3）壓制。（4）尊ぶべき感情の蹂躙。

△五、六。ナタンは智くダビデの善良な心に訴へ、其の憐憫の情と正義に對する愛情とを起さしめた。此の四倍の辯償は神樣が命じ給うたのである（出埃及記廿二〇一）。

△八。其の頃であるからダビデは、結婚して居らぬ人や寡婦ならば幾人でも望む程自分の妻にする事を許されて居た。

△九。ウリヤが戰爭で死んだのは事實である、併しダビデがそれを計畫し、又希望したのである。ダビデの此の行爲は昔の東洋の君主の生涯には普通な出來事に過ぎなかつた。別に奇妙でも珍しくもなかつた。併し神樣はより高き種類の法典によりてダビデを審判き給うた。

聖書の教訓

注意—組長諸氏は此の學課を教へる前に特別に其の爲に祈り、此の不道德の病ちた締りのない時代に、此の悲慘な物語が嚴かなる警戒となるやうに努めねばならぬ。若しそれが智慧のあるやり方であると思ふならば、ダビデの罪をもつと詳細に述べ、惡しき慾望は、制しないと罪を行ふやうになり、次には其の罪の公然の暴露を避ける爲に、更に罪を重ねる事（殺人さへ）が必要と思はれるやうになつたと云ふ事を示されよ。ダビデは此處では第十誡「汝貪るなかれ」と、第七誡「汝姦淫するなかれ」と第六誡「汝殺すなかれ」とを破つた。

一。ダビデの犯罪（十一〇一—四、十四—廿七）

惡しき思ひの危險なる事を見よ。私共は日常の思富上の生活に於ては第七誡を守るか、然らずば破つて居る。救主の標準（マタイ傳五〇廿七、廿八）は唯一の正當な標準である。凡て惡しき思ひを刺戟するもの—惡しき友、書物、繪、談話—は惡魔に屬けるものである。

紫昌と怠慢との危險を見よ。ダビデは已が生命を救ふ爲に逃げ廻はり、洞穴に住んで居た時には、幸福で、聖くて神樣に近く居つた。安樂と成功とは彼を盲目、聾となした。今は何を犠牲にしても自分の慾を滿足させねば承知しない。救主のお言葉（ルカ傳廿一〇廿四）は私共銘々への嚴かな警戒である。

惡事の表面的成功の危險なることを見よ。殆ど一年經過した。ダビデの計畫は表面上の成功を以て遂行せられ、其の息子が生れた、「但し」— 彼が計算に入れなかつた一つの事實—彼の行爲は神樣を喜ばせなかつた。私共が同胞に害を加へる時に、此の「但し」が私共の行く道を妨げる。

二。ナタンの困難な仕事（十二〇一—七）

△一。「エホバ…遣し」給うたのは事實である。併し並大抵の任務でない。勇氣と熟練と秘術と準備とを要した彼の目的は單に罪を悟らせるのみでなく王を悔改に導く事であつた。

△五。ナタンのやり方に注意せよ。先づダビデの中にある善き性質に訴へ、憐憫の情と正義に對する愛とを起さしめ、然る後に「これによりて自己を審判け」と云つた。他人の罪を認めることは容易い。ダビデは其の富人の罪を定めるのは公平な正當な事であると感じた。併し自分は更に〈〈惡かつた—羔でなくて、妻を盜んだのであつた。羔を殺したのでなくて、信用して居る友を殺したのであつた。

三。ダビデへの神の言葉（七—十二）

△十—十二。神樣の完全な正義を見よ。ダビデの罰は一生纏いた。彼の家庭は永久に破壞された。「汝の上に禍を起すべし」とは恐るべき言葉哉！ 幼きより助け給ひし同じ主である。

此處の点を強く敬へられよ。神樣の目には各個の家庭が、如何に身分は賤しくとも、神聖である。他人の家庭を破壞し又は他人の生命に害を加へ、苦い結果を刈取らずに濟むことの出來る人はない。神樣は權力の味方でなく、正義の味方である。國民の幸福と其の少年青年の安全とは、結婚の誓約と家庭の純潔とに對する尊敬の如何によつて定まる。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—私共はダビデが神樣に惠まれ、周圍の凡ての人々から尊び愛せられて居つたことを

見た。今日は彼が惡しき行爲のために自分の生涯を傷け、其の結果最早樂しい平和な生涯を送る事が出來なくなつた事を見るのである。高壇からサムエル後書十二〇一—九を朗讀。

一。ダビデの隱れた罪(十一〇一—三、十四—十七。廿二—廿七(一—三は話す))

(イ)ウリヤの妻を欲しがる。今まではダビデは勤勉に働いて居つたが、惡魔は彼を誘ひ、兵隊と共に戰爭に出掛けないで、エルサレムに止まらせた。或る夕方、用もなく家根の上を歩いて居る時、彼は一人の誠に奇麗な婦人の居るのが目に附いた。其の婦人を自分の妻に欲しいと思つた。其が自分の一番勇しい軍人の一人なるウリヤと云ふ男の妻である事を知つた。

(ロ)ウリヤを殺せと命ず。ダビデは何うしても此の婦人を妻にしようと決心した。それ故其の夫の殺される樣な工夫をした。ヨアブに手紙を書き、ウリヤを戰爭の一番烈しい所に置いて、死ぬ樣にしろと告げた。ヨアブは間もなく返事を寄越してウリヤは死んだと知らせた。

(ハ)ウリヤの寡婦を妻にす。夫の爲に守る喪が濟むや否や、ダビデはウリヤの寡婦を呼寄せて、之を自分の妻にした。併し神樣はダビデの此の行爲を喜び給はなかつた。

二。ダビデに話したナタンの譬(十二〇一—七)

(イ)富める强盜。神樣は預言者ナタンをダビデの許に遣し給うた。彼は一人の富める人の事を王に話した。其の人は澤山の羊や牛を有つて居たが、其の隣の人は一匹の小さな羔しか有つて居ない。富める人は來客の爲に御馳走をし度いと思つた。そこで隣の貧乏人の所に行き、其の羔を奪取り、屠つて料理した。

(ロ)ダビデの義憤。「其の富める者は死ぬのが當然だ!」とダビデは叫んだ、「兎に角、一片の憐憫の心を有たなかつたのであるから、盜んだ一匹の代りに四匹の羔を返すべき筈だ。」

(ハ)「汝は其の人なり!」その時ナタンはダビデの面を見詰めながら「汝は其の人である。汝は、此の富める人が貧乏人の牝の羔を取つたとて怒つて居るが、汝はそれよりもずつと惡い事をしたのである」と云つた。

三。ダビデへの神樣の言葉(七—十、(十二を話す))

(イ)ダビデの受けた恩惠。「イスラエルの神エホバ斯く云ひ給ふ」とナタンは云つた。そ

れからナタンはダビデに、神様がサウルの手より彼を救ふ爲に旋し給うた樣々の御恩。又今は王となり、家庭に、友人に、名譽に於て、富める者となつて居る事を思出させた。

(ロ)ダビデの犯した罪惡。ウリヤの一つの寶物は其の妻であつた。然るにダビデは彼よりそれを盜み、ウリヤを戰爭で死なしめた。「何故に」とナタンは恐ろしい口調で尋ねた、「汝はエホバの誡命を輕んじて、其の目の前に惡を行うたのであるか」。

(ハ)ダビデの一生涯の罰。ダビデは子供の時から神樣に仕へて居つたけれども、其の罪は看過しにされなかつた。「劍何時までも汝の家を離るゝことなかるべし」とナタンは彼に告げた。ダビデはウリヤが殺されるやう計畫した。が今度は自分の息子が自分に對して謀叛を企てることになる。それで彼は二度と家庭の中に平和を見る事が出來ないのである。「汝は內證に此の事を行つた」とナタンは再び云つた、「併し神樣は皆の見て居る前で汝を罰し給ふ。」ダビデが如何に答へたかは次の日曜日に習ひませう。

主なる教訓—自分の有つて居る物で滿足せよ、他の人の物を取らうとする事を慎め。

勸告—ダビデは他人の妻に對しては何の權利もなかつた。そして惡い手段で彼女を得ることに成功したけれども、その爲に自分の一生涯を傷ねて仕舞つた。眼に見る物を欲しがる心を許して置くと、直きに進んで何か惡い事を考出し、その結果は我が身に神樣の怒を招く。

第四十八課　ダビデの眞の悔改（十一月二十六日）

—（サムエル後書十二〇十三—廿三、詩篇五十一〇一—十三（青年科は終まで讀む））—

【諳誦聖句】　あゝ神よ、わがために清心をつくり、わが裏になほき靈をあらたにおこしたまへ（詩篇五十一〇十）

▲青年科（十三歲以上）

聖書の註解

▲サムエル後書十二〇十四。此の一節は今日成就されて居る。多くの人は「神の聖徒たるダビデ」の事を嘲笑ふ。一嘲笑者が、ダビデの事を嘲つて「神の心に適ふ人—そして「彼」は何をしたか」と云つた。「彼は詩篇の五十一と篇三十二篇とを書いた。そして貴君は若し彼の云ひ表して居る如き感情を持つならば、貴君も「神の心に適ふ人」となることが出來る」と答へた。「併し」と彼は言葉を進めて、その他に彼のした事を話して貰ひ度い」と迫つた。「神の敵に大いなる罵る機會を與へたと預言者ナタンの云つた事を彼は行つた」と答へるも、嘲笑者は沈默した。

▲詩篇五十一〇三。國王が公然と其の罪を認め、その告白

の聖な神殿の中に響かせたのは、歴史上にこれが唯一つの例である。此の詩篇の初めにある「うたのかみに云々」の語はダビデが聖歌隊長をして此の新禱を公けに用ひさせる積りであつたことを示して居る。自分の告白が全國民と其の子孫とにまで行き亘る事を願はなかつた。

▲サムエル後書十二〇廿。日光にあたる皮膚の部分が和らげる爲に「青をめる」ことはパレスチナでは普通な事であつた。此は又喜びの記號で、これを累することは喪の記號であつた。それ故ダビデの行爲は其の喪の過ぎたことを示した。

△廿二。ダビデの生きて居る息子等は、其の取られた子よりも優つた大いなる苦い經驗を彼になさしめた。

聖書の教訓

一。否定でなく告白（十二〇十三、十四）

眞に悔改めた人はダビデの如く行爲を以て之を證明する。否定し咎めを免れようとし、事を小さく見せるやうに努める事も、絶望して投出す事―「再び試みても駄目」と思ふ事―も或は墮落に伴ふ結果―戰友の不信用、失うた地位の恢復の困難等に反抗する事も、此等は皆その悔改が本當に深くも眞實でもない証據である。罪の自覺は神様からの賜物である。

二。絶望でなく新禱（詩篇五十一〇一―十九）

聖書全体の中でも、此は最も美しき新禱の一つである。組の生徒に諳記させて下さい。其の中にはダビデが已が罪の他人に及ぼす影響をも、自分に齎す結果をも、氣に懸けないで、それが自分を神様から引離すこと云ふ一事を只管に嘆いて居る。

△二。偽善者は自分の衣が洗はれて清潔に見えるならば、それで滿足するも、ダビデは「我をきよめたまへ」と叫んだ。

△三。「わが罪はつねにわが前にあり。」其の罪は初めには咎めを有ち、彼を神様より外に締出した。後には神様の赦に對する驚嘆と感謝とを以て記憶された。ペテロ（マコ傳十四〇七十二）及びパウロ（使徒行傳廿二（廿）々共に、ダビデは謙遜で、感謝に滿ちて「我は多く赦された。多く愛して居るか？」の精神を以て生きた。

△十一。ダビデはサウルが神様の御前から「棄て」られたのを見、聖靈が彼を去り給ふのを注目して居つた。故に、これは彼の最大の恐怖であつた。悪人は神様の御臨在を憎む。善人は之を渇望する―假令それが自分の罪を咎めても。

△十五。罪はダビデの唇を閉ぢさせた、併し清き心の經驗は之を「ひらか」せるのであつた。

△十八。彼は「さいはひ」を願うた―自分にではない、自分は罰を受けることを願はない―自分の罪の爲に其の民が若しむことのないやうにと、國の爲に願うた。

三。叛逆でなく服從（サムエル後書十二〇十五―廿三）

「父の罪を子にむくい」るとの言葉の一例が十五節にある。父の罪の爲に苦しみ、そして死にまへするに至つたのは此の子一人でない。悪を行ふ前に「これが自分丈けでなく、まだ生れて居らぬ者にまで影響するかも知れぬ」と考へよ。鍛錬を受けたダビデの態度は、彼が神の子たる事を証明して居る。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―今日はダビデが其の生活と言葉とを以て眞の悔改を示したことを見るのである。お話の一部分はサムエル書から、一部分は詩篇にあるダビデ自身の言葉から習ふのである。高壇から詩篇五十一〇一―十三を朗讀。

一。否まずに打明ける（サムエル後書十二〇十三、十四）

（イ）其の罪を認む。ナタンがダビデに、神様が彼の罪を罰し給ふと話したのを覺えておいでゞせう。ダビデは「別に他の人よりも余計に惡い事をした譯ではない」と云ふことも出來たであらう。併しそれと反對に、彼は面を隱し乍ら「私はエホバに罪を犯しました」と云つた。此の言葉を聞いたナタンの有り難さは如何計りであつたらう！

（ロ）默してナタンに耳を傾く。「エホバはまた汝の罪を取除いて下さつた。汝は死ぬゝな

い」とナタンは云つた。尙ほ言葉を加へて「併し汝は汝の惡しき行爲によつて神樣の敵に神の僕を嘲ける機會を與へたのであるから、汝の子供は死ぬ」と云つた。それからナタンは宮殿を去つた。

二。絕望せずに祈る（詩篇五十一〇一—十三）

【組長への注意】此の祈禱は、多分ナタンの言葉のあつた直く後にダビデが獻げたものであらう。それ故此處へ持つて來た。その後でサウエル書の話に歸るのである。

（イ）罪を打明ける。ダビデが獨りで後に殘つて居るときに、惡魔は彼に云つたに相違ない。「神樣に仕へる事なんか止して仕舞へ、最早誰もお前を信じないよ！ 祈つたとて役に立たない、神樣はお前の云ふ事を聞いて呉れやしない」と。けれどもダビデは身を神樣の御足下に投出して憐憫と聖潔とを訴へ求め、始終自分の前を離れなかつた其の罪を認め、外側丈けでなく心の中まで正しくなることを熱望した。

（ロ）赦を求む。或る人々ならば「自分は出來る限りの事をし、神樣に赦して下さいと願つた」と云つて、それで事足れりとして行つて仕舞つたであらう。ダビデはさうでない。彼は

尙ほ彼處に跪いて居る。「我をあらひたまへ、さらばわれ雪よりも白からん」と祈つた。自分の心は淸くして戴くことが出來ると信じた、そして自分が赦されたとの確信を得たいと思つた。

（ハ）聖靈を求む。赦を得る丈けで滿足せず、ダビデは神樣が自分の中に淸い心を新たに造り、又聖靈を取去り給はぬやうにと願つた。

（ニ）全き恢復を願ふ。ダビデは又神樣が彼に救の喜びを返し、彼を支へて、自分と同じ樣に道を外して罪に陷つた人々を助けることが出來るやうにして下さいと祈つた。ダビデは自分の恥辱や不名譽、乃至は其の一生涯の刑罰をさへ氣に懸けなかつた。彼の一つの願望は神樣が自分の靈魂を赦し、潔め、また舊に戻して下さることであつた！

三。進んで服從す（サムエル後書十二〇十五—廿三）

（イ）病める子の爲に訴ふ。ナタンが宮殿を去つて後間もなく、ダビデの子供は大變な病氣になつた。彼はこれが自分の受ける罰の一部と承知して居つた。食事を何うしてもしない、

終夜神様の御前に平伏し、人の慰藉を受附けなかつた。六日の間ダビデは泣き且つ祈つた。七日目に子供は死んだ。僕共は彼に告げることを恐れた。「子供の生きて居る間でさへ顔を上げる事をなさらなかつたのだから、失くなつた時には絶望なさるでせう」と彼等は云つた。

（ロ）神様の處置を受入れる。ダビデは僕共が小聲に話して居るのに氣が附いて「子供は死にましたか」と尋ねた。彼等は「左様で御座ります」と云つた。すると彼は起き、身體を洗ひ着物を更へ、神様の家に行つて禮拜し、自分の家に歸つて來て食物を請求した。僕共は驚いて、何う何ふ譯でさうなさるかと尋ねた。生命のある間は神様が其の子を助けて下さるかも知れないと、尚ほ希望を有つて居つたのだとダビデは説明した。併し子供の死んだ今となつて、ダビデは逆ふことをしなかつた。神様の御旨を受入れた。「我は彼の所へ行くであらうけれども、彼は我の所へは歸らない」と云つた。

主なる教訓—**惡をなした後の行爲によつて、其の人の悔改が眞實か否かが分る。**

勸告—惡い事をした後には屢々惡魔が「知らないと云ふか、申譯を造るかしろ」と囁く。

併し私共は速かに自分のした惡事に面を向け、之を打明けるのが正當である。次に私共が其の醜さを見た時に、惡魔は「最早此の上奮發したとて駄目だ、止めろ」と忠告する。けれども祈るのが正しい—神様と自分が害を加へた人々とから赦を求めよ。尚ほその時でさへ、それに伴ふ苦痛と罰とに反抗するやうな誘惑を受けるかも知れぬ。併し本當に悔いて居るならば、神様が離れてお仕舞にならぬやうにと祈りつゝ、忍耐を以て自分の罪の結果を忍ぶであらう。

（例）一人の銀冶屋が其の實驗を語つて云つた「私が一片の鐵を取り、赤く燒き、鎚で打ち、冷水に浸し、色々な手を加へる、併し—若しその中に瑕を見附けたならば、屑の積んである上へ投げて仕舞ふ。神様が私を火の中、水の中を通し、思ふ儘に論めしなさ曲げなさるが善い、併し、あゝ私は祈る—決して神様から屑を積んだ上へ投げて仕舞はれたく無いものだ！」

第四十九課　アブサロムの叛逆（十二月三日）

—（サムエル後書十四〇廿五、廿六。十五〇一—十七）—

【諳誦聖句】その口はなめらかにして乳酪のごとくなれども、その心はただかひなり（詩篇五十五〇廿一）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲十五〇二。「門の途」とは裁判の門の意味である。法律上の事件は常に一つの特別な門で處理された。

△六。ダビデは人民の愛を失つて居つた。其の理由の一部は（1）彼は前には高尚な奉仕を彼等の爲にしたが、今は平和の時で、人民の記憶は永く續かなかつた。（2）其の罪の爲に最も信仰の篤い多くの人々の尊敬を失つて居つた。彼は之を默して忍ばねばならなかつた。（3）多くの人々の愚つて居る通り、或は彼は此の時病氣で、身体も精神も力が衰へ（詩篇四十一〇八。廿八〇一—十）、その結果余り顔が見えないので、アブサロムが自由な舞臺を有つて居つたのかも知れない。

△十。「遣して言はせけるは」は「言ひけるは」とすべきである。又「思ふべし」は「言ふべし」とすべきであると思ふ。

△十一—十二。アブサロムには後援の源が三つあつた。（1）彼の兵候等（親ふ者）、（2）選抜された二百人—自分等が彼の部下だと思はれて居ることを知つた時には、彼と共に行きさうな人々。（3）アヒトペル—ダビデの最も賢明な、最も信用された相談役、また友人。詩篇五十五〇十二—十四は彼の事を指して居るかも知れない。

聖書の教訓

一。叛逆者の心（十四〇廿五、廿六。十五〇一—六）

（イ）アブサロムの美貌。アブサロムの華麗な外見上の賜物は彼に賞讃と甘言とを齎したが、又彼を滅亡に導いた。彼の自足と虚榮を慕ふ心とは、彼を危險なる君主となしたであらう。美貌は屢々滅亡の種となり其の所有者を危險に導く。

（ロ）アブサロムの佳言。アブサロムは果たすことも出來ぬ大きな約束をした。彼は又、實際に言葉には出さずに、遠廻はしに王を誘つた。「私が權力を有つて居れば物事が甘く行くのだがな。」此の精神を示す人は公衆の爲に危險である。最多數民の最大の利益でなく、自分の不忠な野心が其の目的である（ヨハネ第一書四〇一）。陰で主人を賣る人は亦、貴君をも、何時なりと其の目的に適ふ時には賣るであらう。

二。叛逆者の行爲（七—十二）

（イ）アブサロムの僞善。アブサロムは惡より、より以上の惡へと進んだ。父、友人、全國民を欺き、今や終に「神様に仕へる」などべらべら語るやうになつた。救主のお言葉はさう云ふ人物の事を云つたのである（マタイ傳廿三〇廿七、廿八）。ダビデの播いて置いた詐僞の收穫が今や戻つて來て、彼に苦

々しい刈り入れをさせて居る。其の息子に對する愛はダビデをして彼の欠点に對して盲目ならしめた。

（ロ）アブサロムの喇叭の音。喇叭が鳴れば「事は成れり」を意味するのであつた。アブサロムは叛逆の成功を報ずる事が事實にそれを成功せしめる助になると思つた。今樣の「アブサロム」が一時的に向ふ所敵なきが如き勢を得ることがあつても決して驚くな。古諺に「彼に繩を充分に與へよ、さらば自ら縊死するであらう」とあるのは實際である。

三。叛逆者の進軍（十三—十七）

（イ）アブサロムの成功。此の日はダビデの一生涯中の最も悲しき日であつた。其の三つの理由（1）息子の本性が現れた。（2）信用して居た友達が彼を棄てた、（3）人民の心は自分を去つたのみでなく、叛逆者の方に移つた。併しダビデは神樣を避難所とした（詩篇三）。

（ロ）アブサロムの老父。ダビデの決定する事は何でも喜んでする一握ほどの忠臣はキリストに從ふ者の雛形である。時には惡の潮流の爲に殆ど顚覆され掛かるが、後に見る如くその中にも保護せられ、やがて勝利を得る。

註—何時の時代にも「アブサロム」は居る。パウロの時代にも（使徒行傳五〇廿六、廿七）。之に伴ふ徴候は同じである—大いなる約束、契約又は約束の無視、自己の利益の爲には一國を内亂の渦中に投ずることを厭はぬ。これは自分の利得を求めずに、全人民の福祉と向上とをのみ願ふ眞の改革者の目的とは全然その趣が異つて居る。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—ダビデの罪は赦されて居つたがナタンの預言した悲痛は彼を襲うた。彼は他人を欺いたが、今日は彼が酷くも其の愛子に欺かれたのを見るのである。高壇からサムエル後書十五〇一—六を朗讀。

一。ダビデの民は迷はざる（十四〇廿五、廿六。十五〇一—六）

(イ)アブサロムの立派な容貌により。ダビデは自分の子供を皆可愛がつて居つたが一番自慢にして居たのはアブサロムであつた。人民も亦アブサロムの容貌の美しいのを譽めそやした。彼は身長高く、姿は立派で、何とも云へない奇麗な頭の髪をして居つた。アサブロムは立派な馬車に乘り、前には先驅を走らせ、傲然と馬を驅つて、エルサレムの市中を通る時に、人々から譽められるのが大好きであつた。

(ロ)アブサロムの立派な約束により。アブサロムは朝早く起きて、人々が困難な問題を解決して貰ふ爲に集つて居る門、即ち裁判の場所に急いで行くやうにした。彼等に何處から來たかと尋ねたり、色々の事情を聽いたり、彼等の要求は尤もであるのに、誰も事を正しく處置して呉れる人はない等と彼等に告げたりした。そして「私に其の權力がありさへすれば、凡ての人に公平な裁判をして上げるのですがなあ」と云ふのが常であつた。人々はアブサロムの約束を信じ込み、王に對して不滿を感ずるやうになつた。

(ハ)アブサロムの僞の友情により。人民は王の息子としてアブサロムに頭を下げる時には

彼は手を伸べて案内したり、ちやほやと愛嬌を振り卷いた。斯くの如くに彼は、人民の心を父の側から盜み取らうとする事を續けて居つた。その間に父の位を奪ふ心組である。

二。ダビデの息子は叛逆者(七—十二)

(イ)ダビデは欺かる。或日アブサロムはダビデの許に來て云つた「若し神樣が私を惠んで下さるならば、私は神樣に事へますと神樣に約束いたしました。私の生れたヘブロンへ行かせて下さい、そして私の約束を果たさせて下さい」と。ダビデは喜んで「無事に行つてお出でなさい」と答へた。

(ロ)叛逆を謀る。然るにアブサロムはあべこべに、イスラエル全國に廻し者を出して「汝等は喇叭の聲を聞いたならば、早速『アブサロムはヘブロンで王になつた』と云つて布れよ」と云つて置いた。彼は、自分の詐僞的な謀を少しも知らぬ二百人の者を選んで、一緒に連れて行つた。

(ハ)ダビデは顧問官に棄てらる。アブサロムは其の次にダビデの賢明な役に立つ相談役な

るアヒトペルと云ふ人を呼びに遣つた。するとアヒトペルは、神様に犠牲を献げて居つたのを其處々々にして、彼の許に急いだ。アブサロムは、多分賄賂でも與へたのであらう、ダビデを棄てゝ自分の味方になるやうにとアヒトペルを説勸めた。

三。ダビデの家は棄てらる（十三—十七）

（イ）謀叛の報知。一人の使者はエルサレムに走り込んで來てダビデに云つた「イスラエルの人々の心はアブサロムの方に附いて居ります」と。ダビデは大いに悲みつゝ家來等に云つた「直ぐに逃げよう。さうでないとアブサロムと彼の軍勢が押寄せて來て吾々に害を加へ、市を攻撃するかも知れない」と。

（ロ）一握り程の忠臣。ダビデを愛し信用して、アブサロムに仕へるよりは寧ろ死ぬ方を喜ぶと云ふ忠義な家來等はそれに答へて「御覽の通り僕共は、王なる我が主君のお定めなさる事は何事でも致す覺悟が出來て居りまする」と云つた。

（ハ）急いで逃走。市の門は打開かれ、ダビデは急いで出た。その後へ一族と家來とか悉く

附き從うた。迚もエルサレムの近くに假住ひをする樣な大膽な事は出來ぬ。彼等は家から遠く離れた山の間に入つて身を隱し、一方にアブサロムは勝利者としてエルサレムに乘込んだ。

主なる教訓—心に思つて居る事と口に云ふ言葉とを違へる人は、其の末は惡しく、之に信賴する人々を迷惑に陷れる。

勸告—神樣は御自身でアブサロムの如き人物が滅びるやうに計らひ給ふ。一時は成功する如く見えるが、彼等と彼等に欺かるゝ凡ての者とはお仕舞には倒される。自分を信用して居る人々を胡麻化したり、欺いたりする事が出來るのを自慢する人々と一切關係してはならぬ。

（例）イソップ物語の羊の皮を着た狼の話—彼の本性と目的とを隱して居つた。

第五十課　ダビデは再び逃亡者（十二月十日）

—（サムエル後書十五〇十九—廿〇十六〇五—十四、〔十七〇廿七—廿九を話す〕）—

【諺論聖句】朋友はいづれの時にも愛す、兄弟は危難の時のために生る。兄弟よりもたのもしき知己もまたあり（箴言）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲十五〇十九。「イッタイ」はイスラエル人でなく、ガテの土民であつた。彼は六百人の從者と共に其處から放逐され、それからダビデに與したものと思はれて居る—アブサロムの叛逆の程なく前に。

△廿五。「神の匱」は人々に次の事を感ぜしめる点にダビデの側に助となつたであらう、(1)契約の箱が共にあるからダビデの側が神聖であつた、(2)エルサレムは神樣なしであつた、幕屋は空であつた故。

▲十六〇九。「アビシャイ」はダビデの甥—ダビデの姉妹ゼルヤの息子であつた。彼はヨアブとは兄弟で、ダビデの主なる軍長の一人であつた。

△十四。ダビデが此の時に詩篇第三篇を書いたと思はれて居る。「われ臥して寝ね、われ眠して目ざめ、われを支へたまへばなり」—未だ知ることの出來ぬ試錬と悲痛との伴ふ新しき日を御助けによりて始めた。

▲十七〇廿七。此の三人の地主はヨルダン河の彼方のマハナイム—カナンの中の外邊にある部分—の近くに住んで居た。「ショビ」はアンモン人の王で外國人、「マキル」は以前にメピボセテを助け（サムエル後書九〇四）、「バルジライ」は老いたる名高いイスラエル人であつた。

聖書の教訓

一。ダビデの忠實な從者（十五〇十九—卅）

(イ)ガテ人イッタイ。イッタイはルツと同樣な堅實な品性を有して居つた。其の履歴は甚だしく彼女と似て居る。此の二人は忠實なる献身と愛との模範である。

(ロ)祭司ザドク。凡ての者が虚偽に陷つて居る處で祭司等は神樣と王とに忠實を續ければ—困難な事だが—それは彼等がダビデに最上の奉仕をなす道であつた。時々神樣は、神の民が寧ろダビデと共に配流に居らんことを欲する時に、都でアブサロムの近くに住みながら忠實を盡すことを命じ給ふことがある。

(ハ)オリブ山の登り道。ダビデが怡も「私が苦しむのは宜しい、併し神の國に害の至ることは許すことが出來ぬ」と云つたが如く、契約の箱を少しでも危險の中に置くことを承知しなかつたことに注意せよ。これが凡て神樣の眞の僕たる者の精神である。

ダビデがオリブ山に登る時の涙と、救主が之を下る時の涙とを對比せよ（ルカ傳十九〇卅七、四十一）。ダビデは己が罪と苦痛との爲に泣き、キリストはエルサレムの罪と苦痛との爲に泣き給うた。

二。ダビデの卑怯な敵（十六〇五—十四）

(イ)シメイの攻撃。彼は今日も尚ほ存在して、屢々私共の困つて居る時に出て來る。不當な罪の責を私共に負はせて、混乱させ失望させようと努める（默示錄十二〇十）。彼は多分ダビデの味方の忠義心を覆さうと試みたのであらう。

(ロ)「私がやつ附ける。」アビシャイが誤ふ者を殺し度いと思つた事はダビデに助とならなかつた。彼の復讐心は神樣の靈によつて起つたものでなかつた。貴君の愛する人々が困つて居る時に、アビシャイの模範に倣うて事情を益々惡化せしめる事のなきやうに慎め。

(ハ)ダビデの高潔な答。ダビデは自分の側を辯明し、自分の名譽を保護することを神樣に委れた。彼に來る凡ての事は神樣の御手の中にあつた（詩篇百九〇廿八）。受くべき答でない呪詛は雲のやうである—過ぎ去る（箴言廿六〇二）。既にダビデは他の方面に日光を眺めようとして居つた。

三。ダビデの眞の友（十七〇廿七—廿九）

これぞ彼等の機會である！そして彼等は之を繼へた。必要な時に與へた助力は、心要のない時に同じ助力を得たよりも遙かに貴い。救主を愛する凡ての者が其の愛を示し、主の御軍を進める爲に助力すべき機會は今である（マタイ傳廿五〇廿七—四十）。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—前週はダビデが斷腸の思をし乍らエルサレムを逃げたところを見だ。今日は彼を助けた人々や、又彼の道を益々困難ならしめた人々の事を習ふ。高壇からサムエル後書十五〇十九—卅を朗讀。

一。ダビデの忠實な從者（十五〇十九—廿）

（イ）忠義な外國人、ダビデがキラロンと云ふ小川へ來た時に、イスラエル人でないイッタイと云ふ外國人が其の六百人の部下と共にダビデの從者に加はつた。彼は新しく移住したばかりであるから、一緒に附いて逃げて廻はる事をさせ度くないとて、ダビデは彼にアブサロムと共に止るやう勸めた。ところがイッタイは、ダビデの行く所ならば何處へでも行つて生死を共にすると、見事な答をした。そこでダビデは「進み行け」と云つたので、イッタイと其の部下とは小川を越えてダビデに從うた。

（ロ）喜んで仕へる祭司。ダビデを助けようとてザトクや他の祭司等は聖き契約の箱をエルサレムの外に持出した。併しダビデは彼等に歸れと告げた。神樣の御惠によりて後日自分も都に歸つて禮拜する積りであつた。若しそれが出來ず其、彼は御旨のまゝに身を神樣の御手に委ねて居つた。兎もあれ聖き箱が聖都を離るべき筈ではなかつた。またザドクは其處に居れば、もう歸つて來ても安全だと云ふ時には、王樣にお知らせする事が出來たであらう。そ

れで祭司等は契約の箱と共にエルサレムへ歸つた。

（ハ）悲しむ人民。そこでダビデはキデロン川を渡り、オリブ山を登つた。その後に主なる人々や特別な友人等が附いて行つた。王樣は跣足で、頭に布を被つて（悲哀の記號）歩いた。人民も彼と共に悲しみ、行く途すがら泣いた。

二。ダビデの卑怯な敵（十六〇五—十四）

（イ）其の嘘と侮辱。ダビデと其の民とが疲れつ、悲しみつ、谷を通つて居る時、サウルの一族なるシメイが出て來てダビデと其の從者とに石を投げ、王樣を詛ひ且つ嘲つた「斯うなるのは當然だ。お前はサウルと其の家族とを殺したが、今神樣が國をお前の息子にお渡しになつたのは尤もの事だ」と。此の言葉は嘘である。ダビダは私共の覺えて居る通り、サウルと其の子供等に親切の行爲をした。

（ロ）軍長の忿怒。ダビデはシメイの言葉には何の答もしなかつた。それで彼の軍長の一人なるアビシャイは斯う云つた「何で此の下らない男がこんなに王樣を詛ふ譯がありますか。

向ふへ渡つて彼の首を取りに行かせて下さい」と。

（ハ）ダビデの信仰と忍耐。併しダビデは其の軍長を叱つた。「彼の詛ふのを打ちやつて置け」と彼は云つた、「自身の子でさへ私を殺さうとして居るのだから、此の男が私を詛はないと云ふ道理もなからうぢやないか。放つて置け、彼がさうするのを神様がお許しになつて居るのだ」。尙ほダビデは、斯う云ふ風に詛はれた代りに神様が自分を惠んで下さると云ふ希望を有つて居つた。そこで彼は歩いて道に進み、シメイは塵や石を投げたり、詛つたりし乍ら後に附いて行つた。

三。ダビデの親切な友人等（十七〇廿七—廿九〔廿七の名を省く〕）

（イ）休息の場所を備ふ。遂に體力が盡き、氣も失せん計りになつて、ダビデは安全な場所に着いた。三人の親切な友人が彼を迎へた。彼等は態々出て來て彼を歡迎し、尊敬を表し、困難の時に王様に奉仕する事を喜んだ。

（ロ）必要品を豊かに備ふ。三人の友人は彼と其の從者との爲に色々様々の贈物を用意して

あつた—敷物や布團は休む爲に、燒物の茶碗や鉢は食事の爲に、また種々様々の食物を澤山。

（ハ）豫想と親切とを表す。彼等は王様も家來も大いに困つて居る事を知つて居つた。そして頼まぬ前から此の凡ての準備をして置いたのであつた。「此處は人家から遠う御座いますから、皆さんは嘸お腹が空いて、疲れて、咽が渴いておいでゝ御座りませう」と彼等は云つた。

主なる教訓—他の人々が困つて居る時に私共が何う云ふ扱をするかを見れば、私共が其の人々の眞の友達であるか否か分る。

勸告—今一度無宿の流浪人となつたので、ダビデは誰が本當に自分を愛して居るかを直ぐに知ることが出來た。或人が彼を詛つて石を投げた、併し彼の家來等は彼の許を去らなかつた。三人の友は實際的の助を彼に與へた。私共も本當に人の友であるならば、人が困つて居る時に見棄てないで忠義を盡し、出來る限りの事をして助をするやうに努めるであらう。仕へ奉るべき筈の人々から、度々見棄てられておいでになる私共の最上の友なるイエス様の側に立つて、其のお手傳をする爲に、有らゆる機會を捕へる事が何より大切である。

第五十一課　アブサロムの沒落（十二月十七日）

—（サムエル後書十八〇一—十八、廿一—廿三。〔十九〇十四—廿三、廿一—四十を話す）—

【諳誦聖句】　惡しき人の勝誇は暫時にして、邪曲なる者の歡樂は時の間のみ（ヨブ記廿〇五）

▲青　年　科（十三歳以上）

聖書の註解

▲十八〇六。「エフライムの叢林」はヨルダン河の東の地方にあつた。嘗てエフライム人が其處でエフタに打敗られたことから其の名を取つたものと思はれて居る（士師記十二〇四—六）。

△八。アブサロムの兵隊は大抵は其の地方の地理を知らず從つて退却の時に道を見失ひ、下生（したばえ）の中に迷ひ込み、容易く敵の餌食となつた。そこで「叢林の滅ぼせる者は刀劍の滅ぼせる者よりも多かりき」である。

△九。アブサロムは髪の爲に樹に引懸かつたのではない、勿論髪の爲に一層こんがらかつたであらうけれど。頭が多分又になつた樹枝の間に押込まれたのであらう。

▲十九〇十八。「濟舟」とは多分筏—今も尙ほヨルダン河の其の方面で用ひられて居る—の事だらう。

△廿七。今日でも東洋人は埋葬の場所を重んじ、其の家の墓に葬られる事を大切に思ふ。

△四十。其の死の床に於てダビデは特にバルジライの息子等を大切にする事をソロモンに頼んだ（列王紀畧上二〇七）。幾百年の後にも一軒の宿屋のやうな家にキムハムと云ふ名が附いて居つた（エレミヤ記四十一〇十七）、或はそれがダビデの彼に與へた賜物の一部であつたかも知れぬ。或る人々はこれが彼の、ダビデの子なるキリストの降誕の際に「なる處なかりし」ベツレヘムの旅舍そのものであつたと信じて居る

（ルカ傳二〇七）。

聖書の教訓

一。アブサロムは敗らる（十八〇一—八）

（イ）父の義務。ダビデが自分の軍勢の數を調べ、その指揮官等に己が息子と戰へとの任命を下した時の彼の心は、如何ばかりか辛かつたに相違ない。「我汝の家の中より汝の上に禍を起すべし」（サムエル後書十二〇十一）との神樣の御言葉が實現された。

（ロ）父の愛。アブサロムに對するダビデの愛は無盡藏であつた（雅歌八〇七）。叛逆、詐僞、憎惡も之を消す事が出來なかつた。善き父母の愛は神聖なものである。之を輕んずる者は神樣は罰し給ふ。

二。アブサロムは殺さる（九—十八、廿一—廿三）

（イ）助なく見棄てらる。アブサロムはイスラエル人の心を盜んだ。正當な手段で得たのでなかつた、それ故彼を棄てた。サウルでさへもギルボア山では太刀持が共に居つた（サムエル前書廿一〇四）。アブサロムは一人の眞友をも有たなかつた。虛僞や甘言で得た友はまさかの時に價値はない。

（ロ）暫時の成功。アブサロムは自分の爲に一つの記念碑を建てたが、人は彼の爲に別な記念碑を建てた。「時は眞理の試金石である。」後世に於て人の賞讃を受ける、ことを豫期する人は速かに忘れられるが、單純に自分の義務を盡して神樣に仕へる人の感化は永く生きる。

ダビデの愛も心配もアブサロムを救はなかつた。彼自身の利己心と高慢とが彼の生涯を滅ぼし、彼の死を齎した。彼の「樣樹」は、神樣が人手を用ひずとも、何時でも惡を行ふ者を捕へ給ふ事が出來ると云ふ一例である。

三。ダビデは都に歸る（十九〇十四—廿三、廿一—四十を簡單に話す）

（イ）完全な勝利。外は勝利—內は斷腸の思。彼は嘗てヨアブに罪なき者を戰場で死なしめよと告げた（サムエル後書十一〇九五）。今彼は罪ある者を助けよとヨアブに願つたが、其の効が無い。神樣の驚くべき公平の前には階級も地位もない。御前に立てば萬人平等である。

忍耐して時を待つことによりてダビデは、シメイが自分の足下に平伏すのを見た。自制と神に於ける信仰とは結局勝利を得るに定まつて居る。

（ロ）忠實な從者に報賞。バルジライへのダビデの報賞は、數主が眞に主に從ふ者に報賞を賜ふ有樣を示した繪である、（1）主は彼等の願望を充たしめ、彼等の安全を圖ることを喜びとし給ふ（詩篇廿七〇四、默示錄七〇十七を見よ）。（2）主

は彼等を、御自分の愛し給ふ友として、公けに認め給ふ（廿九〜は智能と品性との上に善き遺傳を受け、神様を知らぬ人の子供等の有つことの出來ぬ恩寵を有つのである。節）。（3）主は彼等の子供に恩惠を乃ぼし給ふ、而して子供等

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言―アブサロムは今やエルサレムに身を落着け、父を攻めて殺し、自分が王にならうと計畫中であつた。今日は彼の企ての結果を見るのである。サムエル後書十八〇一―五を朗讀。

一。ダビデの大勝利（十八〇一―八）

（イ）準備を爲す。人民の數を調べた後に、ダビデは軍勢を分けて三人の指揮官に導かせた。人民は彼が一同と共に戰陣に臨むことを承知しなかつた。彼の生命は滅多な危險を冒すには餘りに貴重であつた。それで彼は人民の出て行く時に、門の所に立つて居つた。

（ロ）指揮官等に命ず。凡ての民の聞いて居る前で、ダビデは主なる指揮官等に命じた、「私の爲に彼の青年を、アブサロムを、手柔かに扱つて呉れ」と。

（ハ）息子は敗北す。戰爭は森林の中で行はれた。アブサロムの軍は直きに敗れ、其の部下

は二萬人も殺された。森の下生の中を逃げて居る時に捕へられたのである。

二。アブサロムの恐るべき最後（九―十八、廿一―廿三）

（イ）彼の無殘な死。アブサロムは騾馬に乘つて背の低い橡樹の下を通つて居つた。頭が枝に引懸かつた。馬は前に進み、アブサロムはぶら下つた儘あとに殘され、其の長い頭髮が枝にからまつた。ダビデの兵隊の一人がそれを見、走つて行つてヨアブに告げた。「殺したのならば褒美を遣るのだつたに」と總指揮官のヨアブは云つた。けれども其の男は「假令千枚の銀を貰つても、アブロサム樣に手を觸れるのは厭です。私は王樣の御命令を聞いて居ります」と答へた。「私はお前なんかと愚圖々々話をして居る事は出來ない」とヨアブは云つた。三本の投槍を手に取つて其の樹へと急いで行き、それをアブサロムの胸に突通すと、十人の年若き太刀持等が劍を以て彼を擊つた。そこでヨアブは喇叭を吹き、戰爭は終を告げた。

（ロ）不名譽な埋葬。彼等はアブサロムの死骸を穴の中に投入れ、その上に大きく石を積み上げた。そこでイスラエル人等は其の天幕に歸つた。長い以前にアブサロムは自分の爲に立

涙な石碑を造り、之に自分の名を附けたが、これは永く經て後に失せて仕舞つた。
註―不孝息子に對する輕蔑の記號として、石を一つ宛その上に投げることを、母親から敎へられた男の子供等の石で、彼の死骸の上に積んだ石の山が益々大きくなつた。

(ハ)父の悲嘆。一人の使者が急いでダビデの許に行き「王樣よ、お知らせで御座います。今日は神樣は、凡てあなたに逆いた人々の手から、あなたをお救ひになりました」と云つた。「アブサロムは無事か」とダビデは尋ねた。「凡て王樣に逆ふ者は皆彼の青年の如くになれば結構で御座います」との答であつた。ダビデは大いに悲み、門の上にある室へ昇つて行つた。行きつゝ泣いて、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。嗚呼われ汝に代りて死にたらん者を。アブサロム、わが子よ、わが子よ!」と云つた。

三。ダビデの歸京(十九〇十四―廿三、廿一―四十を簡單に話す)

(イ)ユダの民に迎へらる。ユダの人々(ダビデの屬する支派)は今や彼にエルサレムに歸ることを求めた、そして彼がヨルダン河まで來ると、彼等は彼を已が家、已が町なる都に連れ歸らうとて待つて居つた。

(ロ)シメイを助く。シメイ―ダビデを詛つた人―は、恐ろしくなつたので河の所までやつて來て、ダビデの前に平伏し、罰をなさらぬやうにと願つた。ダビデの軍長の一人なるアビシヤイはシメイを殺したがつた、併しダビデは「今日は誰をも殺してはならぬ」と云つた。そしてシメイの生命を助けて遣ると約束した。

(ハ)バルジライに報ゆ。ダビデの避難中に食物を與へたバルジライも、そこに來て居つた。「エルサレムにお出でになつて、私の友として私の近くにお住み下さい」とダビデは云つた。併しバルジライは、自分は餘り年を取つて居るし、邪魔になるばかりだからとて、自分の代りに息子のキムハムを連れ行つて下さいと願つた。王はその通りした。

主なる敎訓―罪と僞と親不孝とによつて得た成功は、永持がなく、不幸に終る。

勸告―アブサロムの物語は私共に次の事を敎へる―(1)罪人の道は樂でない。(2)罪で得た上部の成功は一時は續くかも知れぬが、直きに永久の滅亡が來る。(3)父母に不從順、不尊なる人は決して成功しない。(4)惡人の死には希望の光がない。

第五十二課　クリスマスの話（十二月二十四日）

平和の君（イザヤ書九〇六、七。十一〇一—九。ルカ傳二〇一—廿）

【讃詠聖句】ひとりの嬰兒われらのために生れたり、我儕はひとりの子をあたへられたり。政事はその肩にあり。その名は奇妙、また議士、また大能の神、とこしへのちゝ、平和の君とよばれん（イザヤ書九〇六）

▲青年科（十三歳以上）

聖書の註解

▲イザヤ書九〇六。或る人々は「奇妙、また議士」と云ふ言葉は「奇妙なる議士」と一つの稱號になるべきだと思つて居る（廿八〇廿九を見よ）。「奇妙」とは「驚くべき」の意。

△七。ギリストの位は暴力や物質的征服によらず、公平と正義との道德的資質によつて立てられるのである（イザヤ書十六〇五）。

▲十一〇一、二。「智慧、聰明」（即ち洞察力）は裁判官や統治者の主要なる智的資格。「謀畧」とは目的を達する爲に適當に手段を用ひ、誤りなき決斷をなす力量。「才能」とはそれを實行するに必要な力。エホバの「智識」は神様の御性質と御要求とを知り分くる力。「エホバをおそるゝ」とは敬虔と云ふ事を云ひ表す舊約聖書の云ひ表し方である。

△八。「まむし」と云ふのは多分石垣の穴にでも住んで居たのであらう。

聖書の教訓

一。其の隆世の預言（九〇六、七。十一〇一）

（イ）平和の君として。肩は力の場所を指する未だ全世界を治めるに充分な程に強い人はあらはれて來ない。併しキリストの政治とそれより流出づる平和とは際限なく、終はない。

（ロ）ダビデの家の根より。「枝」はキリストの影響として好んで用ひられる（ゼカリヤ書三〇八）。地中に隱れて居る根から「芽」が生え出て、おとなしく音を立てずに成長するのは救主の此の世に來り給うた有樣、又今尙ほ神樣の民が此の世界に感化を及ぼす有樣をよく表して居る。

二。其の政治の樣樣（十一〇二—九）

（イ）人類を治む。「エホバを畏る、をもて歡樂とする人が政治を行ふ時に國に平和は來らざるを得ない。國家の安全の秘訣は萬人神を敬ふ事にある。

（ロ）萬物を治む。此處に見る動物は其の疾走力、体力、鋭敏な視力、その他の美しき性質を保存し、ただ人間に危險でお互同士を害するやうな性質を失ふのみである事は明白である。その如く、人の心が平和の君の指導の下にある時には美しき性質は殘り、有害な性質のみが失せる。

動物が互に相殺し、相滅するやうな性質を失つた時には、最も反對な性質を備へた者も共に平和に暮すことが出來る。その如く、今日もイエス樣が家庭を治め給ふ時には反對な性格や性質の人も爭論を打棄てゝ一緒に樂しく暮すことが出來る。

三。ベツレヘムに於ける其の降誕（ルカ傳二〇一—廿）

ダビデの子孫なるイエス樣はダビデの町なるベツレヘムに生れ給うた。其の降誕は地上では人の注意を引かなかつたが天に於ては天使等によりて傳達された。イザヤの預言は未だ成就されて居ない。併し他日イエス樣が平和の君として歸り來り給ふ時には、今日其の心に主の御政治を受けて居る人々は主の御榮光を共に受ける事が出來る。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—此の學課は、イエス樣が「ダビデの子」、永く約束されて居たダビデの子孫として來り給ふ事を敎へて居る。それに就いて預言者の語つた事と、明日私共の祝ふダビデの町ベツレヘムに於ける實際の御誕生との事を習ふのである。高壇からイザヤ書十一—〇一—九を朗讀。

一。其の隆世の預言（九〇六、七。十一〇一）

註―預言者イザヤは聖靈に導かれ、自分では其の充分の意味を解しない言葉を書き記した。彼は過去に溯つて、エサイの子なるダビデへの神様の約束を思出した時に此等の約束は後日立派に成就されると云ふ事を知つた。今日の私共は昔の神の僕等の目に隠れて居つた多くの事を理解できる。彼等は自分の云つて居る事を後世の人々が充分に理解するとの自覚を有つて居つた。(ペテロ前書一〇―一一)。丁度老人が子供に向いて「私の生きて居る間には何々を見られまいが、お前等は見られるだらう」と云ふのと同じやうな譯である。

(イ)子供として。他の子供が他の家に生れるやうに生れた。併し世を治める爲に生れ、マリヤの息子たると同時に力ある神として生れ給うた。其の政治は常に平和で、常に弘まり、終ることはない。

(ロ)ダビデの家系から。此處でイザヤは、丁度枝や芽が隱れた根から靜かに出て來るやうに、イエス樣はダビデの家系から出で給ふ事を語つて居る。その如くイエス樣は靜かにナザレの家にお住みになり、成長して大人となり給うた。

二。其の政治の模樣(十一〇二―九)

註―此の言葉は或る意味に於てはイエス樣が最初此の世に來り給うた時に事實となつて居るけれども、救主が權威を以て歸り來り給ふ時にのみ完全に成就されるのである。

(イ)人を治め給ふ。若し人々が樂しく平和に暮さうとするならば、賢く正しく治めて貰はねばならぬ。さうでないと貧乏な弱い保護する者なき人々は踏みつけられ、高慢な利己な野心のある人間が勝利を得る。救主は正義と眞實とを以て治め給うた。私共は屢々外見や人の噂さに欺かれる。主は、私共とは異り、見聞きする所を以て判斷し給はぬ。主は凡ての人の心を見拔き、眞實な柔和な者を保護し、其の純潔と力とを以て惡を滅し給ふ。

(ロ)萬物を治め給ふ。世界は彼の最初の墮落の結果今日も尙ほ苦んで居る。動物は互に肉を喰みあひ、子供等は毒蛇に刺されぬやう保護しなければならぬ。併しイエス樣が平和の君として治め給ふ時には、諸動物は共に食ひ、休み、遊ぶのである。今日は彼等は逐使はれて居る―屢々不親切に―併し其の時には小さな幼兒が彼等を導くことが出來る、何となれば彼等の野蠻な性質が去つて柔和な害のない物となり、恐怖も罪も悲痛も消去るからである。

註―「エホバを知るの智識」とは神樣の御性質と御旨とを知ることで、此の世の凡ての學問よりも遙かに上である。そして何時か凡ての民が此の智識を有するに至る日が來る。その時には殘酷、壓制、不公平などが地上から放逐されて仕舞つて居るであらう。此の預言の成就を早めるやう手傳ふのが私共の特權である。

三。ベツレヘムに於ける其の降誕(ルカ傳二〇―廿)

註　十節の聖書の部分は皆の方々知つて居る所であるから全部讀む必要はないが、七節から讀んで下さい、或は時間の許す限り澤山讀んで下さい。永く前にイザヤの語つた約束はクリスマスの晩から成就し始めた。

（イ）馬槽に臥し給ふ。マリヤがヨセフと共に到着した時、ベツレヘムには他國から來た人々が群がつて居り、宿屋の中には彼等の居るべき場所は無かつた。それ故マリヤの小さい息子は馬小舎で生れた。そして彼女は布で卷いて馬槽の中に其の子を寢かした。それが有り合はせでは最上の搖籃と云ふ譯であつた。

（ロ）牧羊者らは尋ね來る。馬槽の中に臥しておいでになる新たに生れた救主を見ようとて整日牧羊者らはベツレヘムへ來た。彼等は天使の歌と福音とを聞いて主の御誕生を知つて居つたのである。彼等が其の馬小舎に來て見ると、丁度天使らの云つた通りに、聖き幼兒は母マリヤ並にヨセフと共に居給うた。

主なる教訓—平和の君の政治を今日貴君の心の中に始めてお戴きなさい。

勸告—救主の御政治を一時に全世界に及ぼすと云ふことは私共には出來ない。併しベツレヘムに來り給うた如くに、主は私共の心と家庭とに來り給ふ事は出來る。主は喜びと惠と平

和とを以て來り給ふ。その結果として私共の周圍のものは動物に至るまで、私共の生涯の中に主の御感化を感ずるやうになる。或は貴君は生來喧嘩好きで、怒り易く、屢々家庭の中に面倒を起したり、自分を愛して下さる方々に心配を掛けて居ることかも知れない。これが、平和の君が心の中を治め給ふ時には、すつかり變つて來る。

（例）或る一家族がひどい短氣を以てよく知られて居つた、爭ひの言葉や怒つて打つたり叩いたりする音さへも屢々近所の人に聞えた。遂に長女が救はれた、イエス樣の靈が其の娘の心に入つた。そして娘はそれを家の中に持込んだ。だん〳〵に萬事樣子が變り、その娘の愛と忍耐とが家族の他の者をも主に導き、遂には町中の人が「何と變つたこと！」と云ふやうになつた。喧嘩はもう無くなり、その代り家の中には、愉快な歌や、柔しい言葉や、平和があるやうになつた。（四十六）

第五十三課　第四復習日（十二月三十一日）

ダビデの勇士（歴代志略上十一〇十—十九。サムエル後書廿三〇十一—十二）

【諳誦聖句】これと偕なる召されたるもの、選ばれたるもの、忠實なる者も勝を得べし（默示錄十七〇十四）

註意—第十六課の初めにある註意等は今日の復習日にも當嵌まる。

▲質問（各質問の終と括弧内の數字は其の答を見出すべき學課の番號である）

一、サウルの死んだ時にダビデが唯一つの支派の王にせられたのは何故ですか(四十二)
二、彼は全國の王になつたのは何時ですか(四十二)
三、ダビデは人民の數を調べた高慢の罪に對して何う云ふ罰を受けましたか(四十三)
四、ダビデが最初に契約の箱をシオンに移さうとした時に失敗したのは何故ですか(四十四)
五、三ケ月の後に何う云ふ事が起りましたか(四十四)
六、神樣に斷られたダビデの大きな願望は何でしたか。何故斷られましたか(四十六)
七、ウリヤの事で犯した罪に就いて、ダビデが自分で自分を責めるやうになる爲に、ナタンは何うしましたか(四十七)
八、ダビデは其の罪の罰の一部分として何う云ふ事に遇ひましたか(四十七)
九、ダビデが本當に悔改めたと云ふ事は、彼の何う云ふ行爲によつて分りますか(四十八)
十、彼は此の時に何と祈りましたか(四十八)
十一、アブサロムは何う云ふ風にしてダビデの民を欺きましたか(四十九)

十二、アブサロムは其の父に何う云ふ惡い事をしましたか(四十九)
十三、アブサロムが謀叛した時に、變らずにダビデに忠義であつた人々の名を、幾つか云つて下さい(五十)
十四、ダビデがエルサレムから逃げた時に(イ)シメイ、(ロ)バルジライ、はダビデに何をしましたか(五十)
十五、何の爲にアブサロムの謀叛は終になりましたか(五十一)
十六、ダビデは逃げて居つた所から歸る時に(イ)シメイ、(ロ)バルジライ、を何う云ふ風に扱ひましたか(五十一)

▲青年科（十三歳以上）

▲歴代志略上十一〇十。最初に來る他に秀でた三勇士は各々個々別々に見事な働をし、多くの味方に取卷かれつゝ神樣の働をする。とは比較的容易である。併し神聯の要！給ふ者は獨りで立つことの出來る人々である。

△十一。サムエル後書廿三〇八に「八百人」とあるのは誤す時に間違へたので、「三百人」が正しい數と思はれて居る。

▲サムエル後書廿三〇十一、十二。或る人々は其の「扁豆の地」はその爲に態々戰ふほどの價値はないと思つたらう。併しシヤンマの勇敢な行爲によりて、その地が永久に歴史の中に載せられるやうになつた。貴君の住む場所は「扁豆の地」

であるかも知れない、機はないかちシヤンヤに敵つて神樣の爲に之を得よ。

▲歷代志畧上十一〇十五—十九。これはキリストに眞に從ふ者が何でも主の望み給ふ事柄に就いて感する所を示す美しき比喩となる。主は罪人を救はん爲に生命を棄て給うた、而して救世軍は主の御目的を達する爲に凡ての危險を冒す覺悟のある「男女の勇士」の友情に滿てる大いなる一團である。

△十八。三人の中の誰が水を汲み、その間誰が敵を防いだか私共には分らない、兎も角も三人は共に働いた。そして主君の爲に成功ある奉仕を立したとの喜びを共にした。自分の任されて居る小さい部分を忠實にやつて居る限りは、それは何の部分であらうと氣に懸ける事は入らぬ。

△十九。ダビデは水そのものよりも、その水の爲に拂はれたる犧牲によりて其の水の價値を認めた。その如く幾百年の後に「ダビデの子」なるイエス樣は寡婦の獻げた二枚のレプタを見給うた時、其の犧牲によりて其の價値を見積り給うた。その爲に拂ふ犧牲の割合に少量のものしか主に獻げるものを有たぬやうに見える凡ての人の爲に此處に奬勵がある。

註—此の題目は義勇團に適當である。

▲少年科（六年生以下三年生迄）

緒言—前にダビデが神樣の爲に神殿を建てる事を止められた事があつた。併し彼はそれよりも遙かに偉大なる事を行うた—名も手柄も永久に生きるやうな英雄を造つた。今日は彼等の行つた事を少しばかり見るのである。高壇から歷代志略上十一〇十—十四を朗讀。

一。彼等の秀でた奉仕（歷史志略上十一〇十—十四。サムエル後書廿三〇十一、十二）

（イ）三百人と一人。此の長官は、戰爭の會議に於ては議長たり、戰術上に大いなる力量

を備へて居つたであらう。併し彼の最も立派な一個人としての手柄は、獨りで三百人のペリシテ人に向つて、之を打敗つた時であつた。

（ロ）ダビデの唯一人の助人。大麥畑であつた小さな戰爭の時に、ダビデの部下は主人を棄てた。ヨドドの息子なるエレアザル一人丈けが踏止まつた。彼は其の手が强くなつて劍から離れない程になる迄戰つた（サムル後書廿三〇十）。そして神樣の力によりて王を救ひ、敵を打敗つた。

（ハ）扁豆畑の勝利者。ペリシテ人は豆の生へて居る地面に集まつて來た。イスラエル人等は之を放棄した—「迚も此處を固守する事が出來ない」—併しシヤンヤは其の立場を守り、神樣の爲に其の土地を得た。

二。彼等の生命知らずの獻身（歷代志略上十一〇十五—十九）

（イ）ダビデの願望。暑い收獲時の時候に洞穴の中に閉込められてばかり居るので、ダビデは子供の時に飲んだベツレヘムの氣持の善い井戸水が飲みたいと思つた。「あゝ、今善い水

を一杯飲むことが出來たならば！」

（ロ）速かな答。ダビデの三人の主なる士官が彼の言葉を聞いた。彼を滿足させようと決心した。パリシテの軍勢の中を突き拔けて行つた。丁度門の內側にある井戸から水を汲み、それをダビデに持つて歸つた。

（ハ）ダビデの尊重心。ダビデは其の水を見た時に、それが爲に如何なる犧牲が拂はれたかを知つて居つた。餘りに貴くて自分が飲むのは勿體ないと思つた。「我いかで命をかけし此の三人の血を飲むべけんや」と何つた。そして彼は嚴かに神樣への供物としてそれを注ぎ出した。

主なる教訓—**キリストと偕に居る者は、勇敢になり、獻身的になる。**

勸告—此の勇士等はダビデと偕に居る事によりて、强い、勇ましい、大膽な、忠義な人になつた。その如く今日もイエス樣を友また模範とする事は主に從ふ人々を勇敢な忠義者にする。救主の勇士の數に入れられ度いと願ふ者は、昔のダビデの勇士と同じ德を表さねばならぬ。

（例）印度の暴動のあつた時、コリン・カンベルと云ふ人は、其の最初の戰の時にはまだ年の若い副官であつたが、危險を見て大いに恐れた。彼の大將はそれに氣が附き、彼の側へ行つて、彼と腕を組合せ、靜かにあちらこちらと歩き、敵の砲火に身体をさらしたが、その結果遂に其の青年の恐怖は永久に消失せ、彼は最も勇敢、大膽な陸軍の指揮官の一人となつた。

親孝行デー學課其一（午前の分）

モーセの父母（出エジプト記一〇廿二。二〇一—十。ヘブル書十一〇廿三）

注意—親孝行デーの學課は午前午后に分けてある。當日の朝の問答と午後の組會學課とは一つ前の日曜日か、後の日曜日に、二回分一度に數へるやうにして下さい。

▲青年科及び少年科

緒言—今日は親孝行デーである。今朝はモーセの父母に就いて習ふのである。高壇から出エジプト記二〇一—六を朗讀。

一。亂暴な王の命（一〇廿二）

（イ）エジプトの國。エジプトはアフリカ大陸の北部にあつて古代文明の中心地の一つである。國中をナイル河と云ふ大河が流れて居て、一年に一度大洪水が起る。併しその洪水は此

の國に取つては少しも害がなく、却つて繁榮の源となつたと云ふのは、其の汎濫の結果、肥沃な土をその沿岸一帶に殘して行くので、豊饒な農作物を得られるからである。

(ロ)イスラエル人。此處へ東の方からイスラエルの民族が移住して來た。初は小人數であつたが、子孫が殖えて本當のエジプト人よりも遙かに大勢になつので、パロ―國王の事をパロと云つた―はその勢力を殺がうとて非常に苛酷な勞働をさせて苦しめ、終には彼等を奴隷にしてもつと酷くしたが、それでもイスラエル人は殖える一方であつた。

(ハ)パロの命令。到頭パロは恐ろしい亂暴な命令を出した「イスラエルに男の子が生れたら河に投込め」と。これでは現在のイスラエルの男子が皆墓に入つた後―遲くも百年位後にはイスラエル人と云へば女ばかりとなる譯である。

二。男兒の誕生(一、〇一、二)

(イ)父母の喜悅。アムラムとヨケベデ(六〇二十)と云ふイスラエル人の夫婦があつた。その間に一人の赤ん坊が生れた―丈夫さうな誠に可愛い男の子であつた。お父さんもお母さんも

どんなに喜んだであらう！　神樣に感謝し、又神樣の御惠を受けて其の子が行末正しい立派な人になる樣にと願つたことであらう。

(ロ)父母の心配。然し王の命令は……と思ふと二人の心は眞闇になつた。河へ投込めばどうなるか。あの見るも恐ろしい鰐の堅い齒が、この柔かいぶく〳〵した赤ん坊に觸るや否やもう子供の生命は無い―　どうして此の可愛い子を棄てられよう。大きくなつては神樣の御用に立つ偉い人になる樣にと前から祈つて居たこの子、生れたてだけれども「美しい」、きつと將來立派になりさうな此の子を―

(ハ)父母の苦心。「一體、子供を殺すなんて神樣の御心に逆ふ罪の行だ。神樣はどうかしてお助け下さるに違ひない、大丈夫だ」と神樣に信賴した父母は、子供を隱す事に定めた。お父さんは平生の通り毎日辛い勞働をしに外へ行つたであらう。お母さんは赤ん坊を惡王やその役人に知られぬ樣そつと育てるのである。人に見附かつたり、泣聲でも聞かれたりしては大變だから出來る丈奥の方に寢かして置いたのであらう―どうせ奴隷の家として廣くもあるま

いから、なほ困つたであらう。外を役人が通つたりする時の心配と云つたら、何とも譬へ様も無かつたであらう。もし運悪くその時に赤ん坊が泣きでもすれば、忽ち役人はづか〳〵入つて來て、赤ん坊は勿論、家中皆捕へられて殺されるであらう。日が暮れると、そつと赤ん坊の着物を洗濯したり干したりしたであらう。子供を一人育てる親の苦心は中々であるが、まして内緒で育てるのだから、何んなに苦勞したらう！　神様を信じて其の子の將來に望を持ち、自分の命にも優つて赤子を愛したからこそ、我慢も出來たのである。

三。葦間の箱舟（二〇三―十。ヘブル書十一〇廿三）

（イ）心を込めた箱舟。 斯うして三ヶ月たつた。赤ん坊が大きくなり、泣聲も強くなつたので、隠し切れなくなつた。然しむざ〳〵河へは投込めぬ。棄てるには棄てゝも、殺したくない。思案の揚句、遂に萑の箱舟を持つて來て、瀝青と樹脂とを塗つて水が浸込まぬやうにした。綿か布か獸皮かの柔かい小さい蒲團か何かを敷いたであらう。空氣の通る様に、併し鳥や獸に見附からぬ様に、氣を附けて蓋をした。お母さんはその箱舟を抱き、姉のミリアム

を連れて川邊に來た。清らかな水の靜かな川の岸邊には丈の高い葦が生ひ茂つて、熱い日光が直接に照らぬ涼しい處であらう。

註―ナイル河は河が幾つにも分れて三角洲をなしてゐるからその支流の一であつたらうと思はれてゐる。エジプトでもローマでも古代の婦人はよく川や泉で水浴をした。

この葦の葉蔭の水の上に、そつと箱舟を浮べた。お母さんは姉のミリアムにそつと番をさせて自分は家に歸つた―全能のエホバ神の御保護を祈り、且つ一生懸命に信じながら。

（ロ）神様の攝理。 暫くするとミリアムは飛んで來た。「お母さん！　御姫様が拾つて下さつた！　乳母を呼んで來いと仰しやつたから早くいらつしやいよ、お母さん！」　何と云ふ嬉しい事であらう。「矢帳り神様はわが子を守つて下さつた」と思ひつゝ、お母さんはミリアムと一緒に馳け出した―今度は感謝に溢れながら。

「此の子を連れて行つて育てゝ下さい。養育料は拂ひますから」とパロの王女は云つた。もう誰にも遠慮は要らぬ。奴隷の子では無い、王女の預り子だから役人が來ても大威張！

（ハ）信仰によれる教育。 聖書に「信仰に由りて兩親は」と書いてある位だから、兩親共信

仰の篤い人物であつた事は疑も無い。少し物が解る樣になると、神樣の事を敎へ、イスラエルの御先祖の信仰の豪傑の話をし、又お前は斯う〳〵云ふ風で幼い時に助かつたのであるから、大きくなつたら神樣に事へ、イスラエル人を救へ。それがお父さんお母さんの何よりのお願だ」と何時も敎へたらう。

註—後にユダヤ人は六才になると聖書を敎へられたとの事であるが、それはモーセの時から始つたのでもあらう。モーセの信仰品性は皆この幼時の家庭敎育の賜であると云つても間違ではなからう。

相當に大きくなると愈々パロの宮殿へ行くことになつた。家を離れる時にも父母はよくモーセに敎へて「周圍の惡い風を見習はずに、家に居た時の樣に父母の敎を守れ」と云ひ聞かしたであらう、別れのお祈もして下すつたであらう。パロの御殿に行くと、モーセ（援出）と名をつけられた。それから後の事は午後習ひます。

主なる敎訓—**親は子供の爲には自分の生命を惜まず、あらゆる苦勞も厭はない。**

勸告—モーセの兩親は（イ）隱して育てゝ居る事が王に知れゝば自分が生命を失ふのであらうが、それでもモーセを隱して育てた。（ロ）川に捨てる時にも色々苦心してその安全を圖つ

た。（ハ）モーセの爲に神樣に祈つた。

貴君は捨てられたり隱して貰つたりする必要はないが矢張り父母は（イ）貴君を自分の生命より大切だと云ふ位に思ふ。（ロ）衣食を備へ、學校へ遣り、貴君の安全を圖る。（ハ）貴君が立派な人になる爲に骨折と苦心とを惜まない。モーセは神樣と父母との特別な骨折によつて生命を拾つた。諸君も一人として父母の御恩を受けないで大きくなつた人はない。今朝からは親の御恩の有難さを思つて一層親孝行になるやう神樣に祈りませう。（悔改の座）

親孝行デー學課其二（午後の分）

孝子モーセ（使徒行傳七〇廿二。ヘブル書十一〇廿四—廿九。）

【諺語聖句】我子よ汝の父の誡命を守り、汝の母の法を棄る勿れ（箴言六〇廿）

▲青年科及び少年科

緒言—午前にはモーセが父母のお蔭で危い命が助かつた事を習つた。今からその後の事を

習ふ。高壇からヘブル書十一〇廿四—廿九を朗讀。

一。モーセの立身（使徒行傳七〇廿四）

（イ）高等教育。パロの王女の子となつたモーセは、他の貴族の子供と一緒に教育を受けた。

註—當時エジプトは學問の淵叢で、その學科目には算術、幾何、天文、法律、音樂、詩等があつた。又習字は、公文に用ふる象形文字と日常使ふ字との二種を習ひ、中々むづかしいもので、年も進み手蹟も立派になると「書記官」とか「學士」とか云ふ名を受ける。

モーセは熱心に勉強したのであらう。その證據には、イスラエルの法律を書いたが、それはモーセの法典と云つて今でも名高い古代の法典である。殊に聖書の初めの五つ—創世記から申命記まで—もモーセが編纂したらうと云れてゐる。さう云ふ特權を戴いたのはモーセが學生時代によく勉強した賜だらうと思ふ。

（ロ）その成功。モーセは學校を卒業した後軍人となつたやうである。云傳へによれば外國と戰つて大勝利を得たと云ふことである。大人となつて實際の働をなす際にも彼の品性と勉強とは彼を成功者とならせたと見えて、使徒行傳に「言と業とに能力あり」と記されてゐる。

（ハ）將來の地位。王女の息子であり、學問はあり、成功はするし、モーセの前途は希望に輝いてゐた。甘く行けばパロとなる事も出來たかも知れない。王となれなくとも大臣となつてエジプト全國を治める事も、パロの大軍隊に大將となつて號令することも出來る。出世の門は大きく開いて彼を待つてゐた。

二、モーセの獻身（ヘブル書十一〇廿）

（イ）モーセの同國民。飜つてモーセは自分と同じ國民のイスラエル人の事を考へた。彼等は奴隷となつて惡王から酷い壓制を受けて苦しんで居る。彼等は眞の神樣を敬ふ民で、のちには、神樣が彼等の先祖に御約束になつたカナンと云ふ立派な土地に住む筈の民である。それ故エジプトで死んだ先祖のヨセフは木伊乃にしてエジプトを出る時には一緒に持つて行く筈になつてゐる位である。今はイスラエル人がこのエジプトの苦しい境遇から救ひ出される時ではなからうか。

（ロ）モーセの撰擇。パロの王女の子として富貴を極めるか或はイスラエル人と一緒になつ

て苦勞するか、モーセはこの二つの岐路に立つた。惡魔は來て囁いたらう「なに攝ふものか、惜しいぢやないか。大いにパロの王族として出世しろ成功しろ！」と。自分さへ出世すれば良いと云ふそんな自分勝手な者になれとて、父母はあんなに苦心して自分の生命を助けて育てゝ下さつたのであらうか。小さい時にお母さんは何と敎へて下さつたであらうか、とモーセは思つたであらう。さうだ自分が贅澤をして威張るよりか、神の民のイスラエル人と一緒に苦勞するのが自分の使命だと決心したモーセは、パロの女の子として受ける筈の出世や贅澤には別を告げてしまつた。

(八)モーセの大事業。 さう云ふ決心が彼の行爲に現れて來た結果、パロ王の怒を招いたので王の宮殿を立ち去る事になつた。その後四十年間ミデアンの野に牧畜をして居たが、或日神樣からエジプトに歸りイスラエル人を救ひ出せとの命令を受けた。それからモーセは神樣の御助を受けて到頭イスラエル人—丈夫な男子だけ數へても六十萬人も居た—を奴隷の哀れな境遇から救ひ出し、途中で色々な苦しい事にも出逢つたが、いつも小さい時から信仰して

あた神樣に祈つて勝利を得、イスラエル救濟の大事業を成遂げたのであつた。

主なる教訓—善人になつて善事を行ふのが最上の親孝行である。

勸告—モーセは自分の安逸の爲に父母の敎を捨てたりはしなかつた。小さい時の父母の敎に從つて神樣を尊び、その人民を愛し、之に事へて、父母の立派な意志願望を成遂げた。

諸君も今からモーセに倣つて(1)父母を尊び、(2)何時も父母の事を忘れず、(3)救を受けて善い人になり、善い事を行つて父母の心をお喜ばせなさい。

若しも貴君の父母がまだ眞の神樣を知らずに、罪のエジプトに居るとすれば、モーセを助け給うた神樣の力によつて、父母を罪より導き出して、救の喜びに入らしめねばならぬ。

(例)一人の娘が悔改の座に出た。自分は既に救はれて居るのに何故悔改の座に出たかと尋ねると「父母の爲に悔改めるのです」と答へた。その結果その家族が救はれた。

「を」は「り」

大正十年十月三十日印刷
大正十年十一月五日發行

東京市神田區一ツ橋通町五番地
發行人　チャールス・デユース

東京市神田區一ツ橋通町五番地
編輯人　山室軍平

東京市神田區一ツ橋通町五番地
發行所　救世軍本營

東京市神田區一ツ橋通町十五番地
印刷所　一ツ橋印刷株式會社

325
323

終